

三重県斎宮跡調査事務所年報1984

# 史 跡 斎 宮 跡

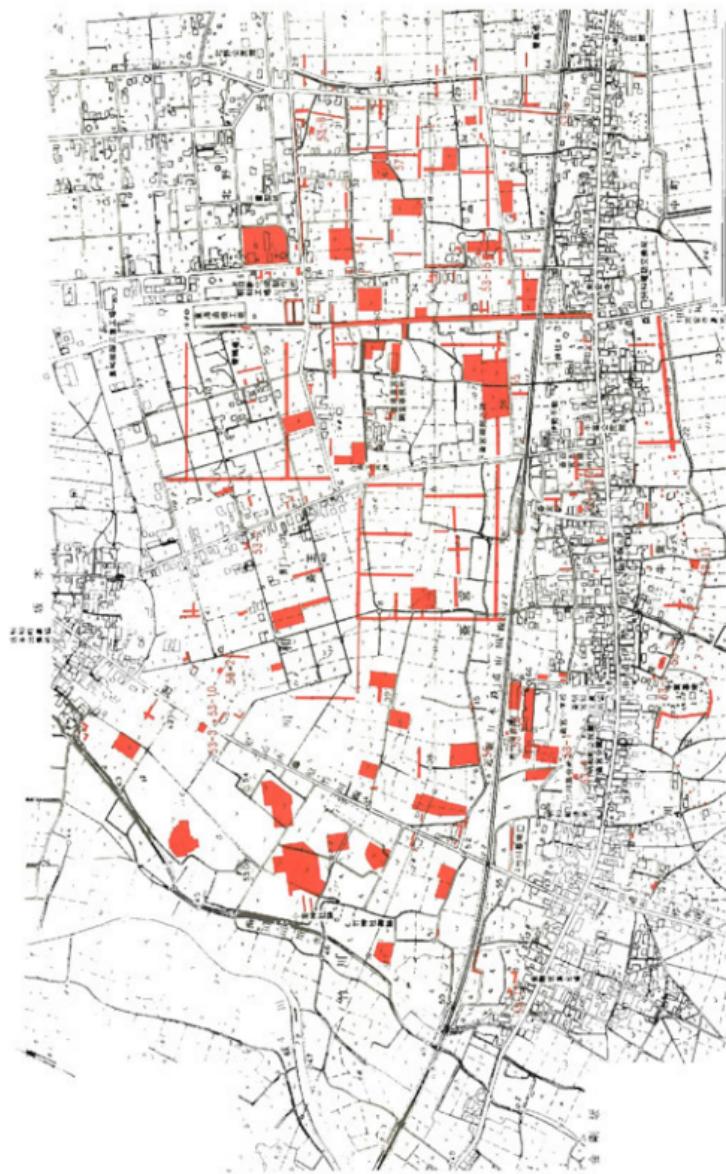
発掘調査概報

昭和60年3月

三重県教育委員会  
三重県斎宮跡調査事務所



第54次調査全景 (東から)



## はじめに

『創業と守成（維持）とのいすれが難しいか』　これは、唐の太宗が左右の名臣にたずねた有名な問答の一節であり、世に「貞觀の治」とたたえられ、その平和と繁栄を築いた秘密を今日に伝える「貞觀政要」に収められているものです。

昭和45年宅地開発の事前調査として古里地区で開始された斎宮跡の発掘調査は、本年度で、早15年となり、地元住民の方々の理解と協力のもとに、その調査総面積も約96,500m<sup>2</sup>に達しました。また、昭和54年史跡指定後はじまつた史跡地の公有化も、本年度の先行取得分を含めて14haに及ぶに至りました。

確かに、これを140haという広大な史跡の保存と活用の全体からみれば、その進捗率は、発掘調査で7%、土地公有化で10%にすぎないのですが、しかし斎宮跡は、無人の原野ではなく、現に2,000人以上もの人々の日常生活の場であり、生産活動の場であります。従って、史跡の保存と住民生活との調和をはかりながら、この掛け替えのない重要な史跡をいかに現代に活用するのかが、今後の最大の課題となっております。

このため、県といたしましては、既に昭和57年度には、古伝承地「斎王の森」周辺にモデル的に一部史跡整備を実施するとともに、引き続き昨年度と本年度の2ヶ年にわたって、「史跡保存と町づくり」をテーマにした斎宮跡環境整備基本構想（試案）の策定事業を鋭意進めてきたところであります。

幸い試案策定をお願いした「地域環境計画研究会」は、都市工学研究グループで斬新なアイディアのもとに、ユニークな新しい史跡整備の在り方を検討いただきました。

ここにご報告申しあげます昭和59年度の発掘調査は、こうした斎宮跡の保存と活用の科学的基礎となるためのものであり、特に64年3月に土地公有化の線引きを明確化しなければならない第2種保存地区に主眼をおいて実施したものであります。

調査にあたり、種々の有益なご指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに調査に保存にと懼しみなくご協力をいただいた地元関係各位に心から感謝の意を表する次第であります。

最後に、「今は守成の時期にさしかかっている。だから、君達と一緒に心をひきしめてよく考え、守成の困難に処していこう」と結んだ太宗の心を旨として、今後一層のご指導とご協力を念願して発刊のご挨拶といたします。

昭和60年3月

三重県斎宮跡調査事務所

所長 佐々木 宣明

## 目 次

I 調査の経過.....	1
II 第54次調査.....	4
III 第55次調査.....	16
IV 第56次調査.....	28
V 第57次調査.....	39
VI 第53次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）.....	55
VII 調査事務所要覧.....	63
(付篇) 竜宮跡の土師器	

## 例 言

1. 本書は、三重県竜宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和59年度に実施した史跡竜宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第VI章は、明和町竜宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行なった現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は竜宮跡調査事務所及び明和町教育委員会が担当した。報告書については、別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の表示は座標北を用いた。
4. 遺構標示記号は次の通りである。  
S B; 建物 S K; 土塙 S D; 溝 S E; 井戸 S A; 横 S F; 道路
5. 竜宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、櫛山女学園大学教授久徳高文氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、京都府立大学教授門脇植二氏、名古屋大学教授柏崎彰一氏、名古屋大学教授早川庄八氏、皇學館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
6. 本概報の執筆・編集は、三重県竜宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、谷本綱次、福村直人、倉田直純があたり、刀根やよい、坂真弓美、豊田敏子、皇學館大学生若林真登、松田早苗がこれに協力した。
7. 遺構の時期区分については、昭和60年3月作成の付録「竜宮跡の土師器」による。

## I 調査の経過

昭和59年度の調査は、面的な計画調査を4ヶ所で実施した。このうちの2ヶ所は、昨年度の見直しで昭和64年3月31日までに保存の方向付けを明示することになった中町北部の第2種保存地区であり、当面調査の重点は、当地区に置かれることとなった。一方、明和町が主体の現状変更緊急調査も例年通り、調査事務所が担当して実施した。調査面積は計画調査6,700m<sup>2</sup>、緊急調査2,884m<sup>2</sup>、合計9,584m<sup>2</sup>および、今年度の調査を合わせると調査総面積は約96,000m<sup>2</sup>で史跡の7%に達した。

第54次調査は中町北部の西前沖地区で、5月から7月にかけて1,630m<sup>2</sup>にわたり実施した。平安時代前期の掘立柱建物のほか、平安時代後期から鎌倉時代後期にかけての掘立柱建物、土塙、井戸およびこれらを取り囲む溝を多数検出した。特に縦柱建物が多く見つかり、古代から中世にかけての建物の変遷や集落構造を考えるうえで貴重な成果が得られた。また11,571枚における差銭状備蓄銭の出土は、世間の注目を集めた。

7月から9月にかけて実施した第55次調査は、将来の史跡整備に備え、その基礎資料を得るために、第19次調査と第20次調査の間を調査した。これにより、御館・柳原地区における調査は第28次調査も含め、約6,000m<sup>2</sup>が面的に確保されることになる。検出された遺構の多くは、前次の調査で確認されており、新たに検出したものは少ない。また第20次調査の西側は土取りのため、遺構はほとんど残っていないことが確認された。

第56次調査は、宮城中西部の状況を解明するため、東裏地区で9月から11月にかけ1,870m<sup>2</sup>にわたり実施した。奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土塙と平安時代後期～末期の掘立柱建物、土塙等を検出した。遺構はこの2時期に限られ、宮城中西部に共通する状況であることを確認した。しかし掘立柱建物の柱通りの方向は、東裏地区北部の古道沿いで実施した第50次調査では、奈良時代の溝S D170や鎌倉時代の古道の方向に揃うものが多かったが、今回の調査では、むしろ宮城中央部や東部で検出される建物の方向に近い。

第57次調査は中町北部の東加座地区で、区画溝S D1935の北側延長部分の確認と掘立柱建物の関連を追求するため、12月から翌年2月にかけて実施した。溝の集中する箇所及びその近辺を調査対象としたため、掘立柱建物の検出は20棟あまりである。建物の時期は、奈良時代末期～平安時代前期のものが大半を占め、3間×2間の小規模な建物が多く、中心的な官衙建物に対する付属的な官衙建物と考えられる。建物の柱通りの方向は、区画溝の方向に一致するものが多く、建物配置が溝と密接な関連をもっていることが当地区でも確認された。また出土遺物

に円面鏡や「殿司」と墨書きされた土器があり、当調査区が斎宮寮13号の1つである殿部司の有力な推定地と考えられる。

現状変更に伴う緊急調査は、宮域各所で15件、約2,900m<sup>2</sup>にわたり実施した。特に第53-2次調査では、ほぼ方位にのる奈良時代の南面廂付東西棟建物が検出されており、すぐ近くで実施した第43-1次調査で出土の「美濃」施印須恵器とともに奈良時代斎宮の所在を考えるうえで貴重な資料が得られた。また、牛糞集落南西部の畠地一帯にも奈良時代の遺構が広く分布していることが確認された。

一方、昨年度からの継続事業である斎宮跡基本整備構想が、三重大学工学部建築学科北原理雄助教授を中心とする地域環境研究会により策定され、その具体化が待たれることになった。また保存啓発事業の一環として本年度も「体験発掘」を計画し、第55次発掘現場で7月30・31日の両日にわたり、地元斎宮小学校高学年の児童、父兄を対象に実施し、約30名の参加があった。

昭和59年度発掘調査地区一覧表

調査次数	調査地区	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	地 稷・地 番	所有者	備 考
53-1	6ACM-P	1,250	59.3.27～ 59.5.9	明和町竹川字東裏284	明和町	体育館新設 第4種保存地区
53-2	6ACA-M	112	59.5.17～ 59.5.29	明和町斎宮字古里3280 -2	中西 敬	個人住宅新築 第3種保存地区
53-3	6ABE	180	59.8.13～ 59.8.23	明和町竹川字古里 573 -2	永納一義	個人住宅新築 第3種保存地区
53-4	6ACL-S	70	59.8.22～ 59.8.30	明和町竹川字東裏 271 -1	田所 雄	取納小屋新築 第3種保存地区
53-5	6ACR	27	59.8.24～ 59.8.29	明和町斎宮字木葉山 97-5	田中昭三	倉庫新築 第4種保存地区
53-6	6AGO		59.9.3～ 59.9.4	明和町斎宮字鍛冶山	明和町	町道側溝新設 第4種保存地区
53-7	6ADD-U	64	59.9.6～ 59.9.19	明和町斎宮字藤林3147 -3	野呂 照	資材置場造成 第3種保存地区
53-8	6AGE-O	58	59.9.21～ 59.9.29	明和町斎宮字東前沖 2470-2	上田義勝	個人住宅新築 第3種保存地区
53-9	6ACS-O	305	59.11.22～ 59.11.30	明和町斎宮字木葉山 95-2	浅尾眞吾	農業用倉庫新築 第3種保存地区

調査次数	調査地区	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	地 種・地 帯	所有者	備 考
53-10	6ACA-R	33	59.11.22～ 60.11.28	明和町斎宮字古里3267 －1	西川 春雄	農業用倉庫新築 第3種保存地区
53-11	6ADR-W	363	59.12.19～ 60.1.8	明和町斎宮字木葉山 131-7	西村 帝	個人住宅新築 第3種保存地区
53-12	6ABL-K	70	60.1.26～ 60.1.28	明和町竹川字中垣内 464-2	沢 恒一	既設納屋の曳家 第3種保存地区
53-13	6ADQ-L	103	60.2.4～ 60.2.12	明和町斎宮字牛糞3022	辻 彰	個人住宅新築 第3種保存地区
53-14	6ACM-O	45	60.2.22～ 60.3.5	明和町竹川字東裏287 －3	明和町	体育庫移築 第4種保存地区
53-15	6AFK-C-D	204	60.2.27～ 60.3.20	明和町斎宮字西加座 2721-1	鈴木 営夫	盛土 第2種保存地区
54	6AFE-N	1,630	59.5.7～ 59.7.31	明和町斎宮字西前冲 2630 他	林 重子他	計画的面調査第 2・3種保存地区
55	6AEN-P	1,500	59.7.21～ 59.10.3	明和町斎宮字柳原・脚 館2785-1 他	森下秋三他	計画的面調査 第1種保存地区
56	6ACH-S	1,870	59.9.17～ 59.11.22	明和町竹川字東裏289 －1 他	澄野泰久他	計画的面調査 第3種保存地区
57	6AGF-H-I	1,700	59.12.17～ 60.2.27	明和町斎宮字東加座 2441 他	佐々木茂他	計画的面調査 第2種保存地区

## II 第54次調査

### 6 A F E - N (西前沖地区)

今回の調査地は、西前沖地区の南端部に位置し、調査区の南側を流れる現代溝が、西前沖地区と西加座地区との字界をなしている。

これまで付近で行っている発掘調査には、当調査区より60mほど北に離った所で実施した第37-4次調査(昭和56年)や、同じく50mほど西での第51次調査(昭和59年)などの面調査がある。またトレンチ調査には、調査区南側部分を東西に走る第35次調査(昭和55年)、および調査区南端部分より約5m南へ離れて南北に走る第41次調査(昭和56年)がある。これらの調査結果などより、当地区一帯には、120m前後の間隔をおいて、碁盤目状に区画溝が走ることが、次第に明らかになってきている。

第51次調査では、東西に走る区画溝S D 291を検出し、この区画溝および溝の南方部分の状況を明らかにすることことができた。今回の調査は、第51次調査で検出された区画溝S D 291の北方部分の状況把握等を主な目的として、約1,630mにわたって実施することになった。遺構の検出される地山面までは30cm~40cm前後であり、全地区にわたってあまり高低の差は認められなかった。

調査の結果、第35次のトレンチ調査で確認された分を含めて、掘立柱建物44、井戸5、椎列1をはじめ、多数の溝、土塙などを検出した。これらの大半が平安時代前期から鎌倉時代にかけてのものであり、それ以前のものは、遺構、遺物ともに皆無に近い状態であった。

#### (1) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物12、土塙14、溝1がある。

掘立柱建物は、調査区の北西部と北東部に集中する。北東部に位置するS B 3440・S B 3448・S B 3455は、いずれも南北棟建物で、柱攝形は径60cm~70cmの方形を呈する。東端のS B 3506は調査区外へ延び、規模は不明だが東西棟建物である。北西部に位置する8棟は、3間×2間の南北棟建物であるS B 3426を除き、他はすべて東西棟建物である。各掘立柱建物の柱通りの方向は、北に対し西へ3°~4°偏る建物が多いが、柱通りを揃える建物は少ない。

掘立柱建物の建てられた順序については、切り合い関係により、S B 3402→S B 3409→S B 3407が確認された。また、出土遺物より大別すると、S B 3402・S B 3404・S B 3506・S B 3423が最も古く、次にS B 3403・S B 3409が、最後にS B 3407・S B 3426の順となる。S B 3404とS B 3423は、建物自体が重複していることから考えて、この時期には少なくとも4回の建物の建て替えがあったことが考えられる。

54次



第1図 第54次造構実測図 (1 : 200)



溝は発掘区の東部で、南北に走る S D 3507が検出された。北端部で、幅約 1 m、深さ 70cm の逆台形を呈し、南へ行くほど狭く浅くなる。埋土は黒褐色を呈し、土師器杯・甕、灰釉陶器椀などが出土しているが、その量は極めて少ない。

土塙には、発掘区中央部やや南よりの S K 3520・S K 3522、北東部の S K 3446・S K 3451、北西部の掘立柱建物近辺に S K 3410・S K 3411・S K 3413・S K 3416・S K 3417・S K 3433・S K 3435・S K 3458・S K 3461・S K 3465がある。このうち、S K 3411・S K 3413・S K 3416・S K 3433は掘立柱建物に先行するものである。S K 3458は 1.6m × 1.3m、深さ約 20cm の楕円形を呈する小規模なものだが、完形品約 20 点を含む土師器杯が重なり合って出土しており、意識的に捨てたことを窺わせるものである。S K 3411 や S K 3520などは比較的規模の大きなものであるが、いずれも遺物の出土量は少なかった。

#### (II) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構は少なく、掘立柱建物 1、土塙 3 のみを検出した。

発掘区の北東部に位置する掘立柱建物 S B 3494は、4 間 × 2 間の南北棟の建物で、柱掘形は径 30cm ~ 40cm と小さい。

土塙 S K 3449・S K 3537は、共に発掘区東部で検出された小規模なものである。発掘区中央部やや北寄りで検出された土塙 S K 3424は、径 1.6m のほぼ円形を呈し、深さも 60cm 前後とやや大きい。出土遺物には灰釉陶器椀、土師器小皿・杯・甕、須恵器甕等があるが、全体に量は少ない。

#### (III) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物 9、土塙 16、溝 4 を検出した。

この時期の掘立柱建物は、そのほとんどが平安時代前期の建物が建っていた場所を避けて建てられており、柱通りの方向により 4 つのグループに分けられる。このうちほぼ方位にのる建物が半数を占め、調査区中央部の S B 3470・S B 3475・S B 3484・S B 3523、調査区南西部の S B 1886がある。他は、北で西に 3° ~ 4° 傾る建物 (S B 3471・S B 3505)、北で西に 8° 傾る建物 (S B 3500)、北で東に傾る建物 (S B 3453) が各 1、2 棟あるのみである。建物の規模は、3 間 × 2 間のものが多く、床東柱をもつ建物 (S B 1886・S B 3475・S B 3500・S B 3523) もある。この時期の建物で、床東柱をもつ例は斎宮では珍しく、こうした建物が、平安時代末期に出現していく大形で方形プランを呈する、所謂総柱建物と呼ばれる建物につながっていくものであろうか。後期の中でも比較的古い時期に位置付けられる S B 3484は、北面、東面に廂をもつ 2 面廂付の南北棟建物で、北面廂柱間 2.4m、東面廂柱間 2.2m。柱掘形は全体に浅い。

土塙は、大半が中央部より北半分に集中しており、S K 3405・S K 3421・S K 3438・S K 3439・S K 3443・S K 3445・S K 3463・S K 3473・S K 3477・S K 3479・S K 3485・S K 3487・

S K 3488・S K 3489・S K 3508・S K 3528が検出された。ほぼ方形を呈するS K 3445・S K 3473の他は、すべて不整円形あるいは不整形を呈するもので、深さ20cm前後の浅いものが多い。出土遺物には、土師器皿・皿・椀類があるが、いずれも微量である。

溝は、調査区西端でS D 3415、中央部でS D 3486の南北溝が検出され、また、南東隅では東西溝S D 3540が検出された。いずれも浅いものばかりである。S D 3486は、幅40cm~50cm、深さ20cmの逆台形を呈し、南へ行くほど浅くなり、途中で切れる。埋土中より、主に土師器皿が出土しているが、量はわずかである。他に、小さな溝S D 3517がある。

#### (IV) 平安時代末期の遺構

第35次調査で検出したものも含めて、掘立柱建物17、柵列1、土塙23、溝10、井戸2がある。

掘立柱建物は、発掘区中央部やや東寄りを南北に走る溝の東側部分で8棟、西側部分で9棟検出した。南北溝の東側には、3間×3間の総柱建物と考えられるS B 3441・S B 3541のほか、3間×2間の東西棟建物S B 3495、3間×2間の南北棟建物S B 3442・S B 3496・S B 3502・S B 3504・S B 3545がある。このうちS B 3442・S B 3496・S B 3504・S B 3545は床束柱をもつ。柱通りの方向は北に対し6°前後西へ偏る建物が多く、柵列S A 3437や南北溝S D 1902などの方向とはほぼ一致する。東側中央部ではかなりの重複が認められ、短期間のうちに何度も建て替えが行われたものと思われる。このうちS B 3496→S B 3504→S B 3502の順を確認している。

南北溝の西側には、主要な建物とみられる5間×4間の総柱建物S B 1885をはじめ、3間×3間の総柱建物S B 1890、東西棟建物S B 3420・S B 3432・S B 3468、南北棟建物S B 3429・S B 3469・S B 3483・S B 3518がある。このうちS B 3420には北側に柱間1.2mの廊が付き、S B 3429は床束柱をもつ建物と考えられる。またS B 3483・S B 3518は南北溝にはば並行して建つ。S B 1885は南東隅に2間×2間の方形土塙S K 3511が伴う。土塙の深さは30cm~40cmで、中央部には径60cm、高さ15cmの地山の高まりが認められる。おそらくこの場所にも柱が建てられたと考えられ、建物を建てたあとに土塙が掘られたものと解釈できる。土塙からは、土師器皿・甕、山茶椀、ふいご羽口などが出土している。またこの建物の柱掘形のいくつかには、径15cm前後の扁平な川原石を柱を支えるための根石として使用していることが認められた。

土塙は、23ヶ所（S K 1879・S K 1888・S K 1893・S K 3412・S K 3419・S K 3422・S K 3425・S K 3430・S K 3444・S K 3454・S K 3460・S K 3462・S K 3472・S K 3492・S K 3493・S K 3497・S K 3498・S K 3499・S K 3511・S K 3516・S K 3533・S K 3534・S K 3536）で確認した。発掘区全域に散在し、形状・規模とも様々である。S K 3511に次いで比較的大規模な土塙S K 3472は、4m×3m、深さ約20cmの不整円形を呈するものであり、土師器皿・小皿・甕、須恵器皿、山茶椀、山皿などが出土しているが、いずれも少量である。その他の土塙は、小規模なものが多く、特別な性格を窺わせるようなものは認められなかった。

溝は、南北溝 S D 1883・S D 1898・S D 1900・S D 1902・S D 3434・S D 3481・S D 3490、東西溝 S D 1878・S D 1910、調査区南東部を斜めに走る S D 3548がある。このうち、S D 1878・S D 1883・S D 1898・S D 3481およびS D 3548は、幅が40cm～50cm前後、深さ10cm～20cm前後と小規模なものである。南北に走る S D 1900・S D 1902・S D 3434・S D 3490のうち、切り合ひ関係により、S D 3434→S D 1902→S D 3490の順が確認されたが<sup>4</sup>、S D 1900についてはわからなかった。中でも、S D 1902は、北端部で溝幅約1.2m、深さ50cm、南端部で幅1.2m、深さ80cmを測り、逆台形を呈する主要な溝の一つと考えられる。理土中からは、山茶椀、山皿を中心にして、土師器皿・小皿・甕・須恵器甕・鉢などの遺物が整理箱に12箱分と、北辺部を中心に多量に出土している。東西溝 S D 1910は、ほとんどの部分を鎌倉時代に入ってから新たに掘り直されてしまい、その規模等については明らかではないが<sup>4</sup>、これら主要南北溝に統くものと思われる。

柵列 S A 3437は、南北溝に沿って11間分確認できた。溝と柵列との前後関係は不明であるが、溝と同一方向を示しており、4本の南北溝のいずれかと同時期に存在したものと考えられる。

井戸2基（S E 1880・S E 1904）は共に第35次調査で検出しているが、トレンチが狭く、完掘できなかつたものである。S E 1880は、検出面で5m×6mの楕円形を呈する大形の掘り形を、S E 1904は、2m×3.5mの不整形な掘り形をもつものである。いずれも完掘はできなかつたが、S E 1904の理土中からは、整理箱にして約30箱分という多量の土器が出土している。土師器皿・小皿の完形品が大半を占め、炭や焼土も若干認められた。一括して捨てられたものであろう。

#### （V）鎌倉時代前期の遺構

掘立柱建物5、土塙21、溝13、井戸1を検出した。発掘区西部の掘立柱建物S B 3464は、3間×3間の純柱建物で、大半の柱掘形には径15cm前後の根石を伴う。その東側のS B 3474は、2間×2間の身舎に東側に1間の廊が付く。廊柱間は1.6mで、S B 3464と同じく大半の柱掘形に根石を伴う。これら近接する2棟の掘立柱建物は、柱通りの方向をほぼ同じくし、南北側柱通りを備える建物である。ここでは一応別個の建物と考えたが、一連のものとも思われる。調査区東部のS B 3501・S B 3457は、同一場所でほとんど重複しており、両者は建て替え関係にあると見られる。柱掘形の出土土器から、3間×3間の純柱建物で柱掘形内に根石のないS B 3501が古く、4間×3間の純柱建物で、大半の柱掘形内に根石をもつS B 3457が新しい。S B 3457の南東隅にちょうどおさまる一辺3m×3mの方形土塙S K 3503は、長軸方向が柱通りの方向と一致しており、建物に伴う施設と考えられる。土塙からの出土遺物には、山茶椀、土師器鍋・甕・皿などがあるが、いずれも細片で、量も少ない。南東部にある南北棟建物S B 3546は、3間×2間の純柱建物である。

土壇は調査区中央部および北東部で主に検出された。比較的大きなものに、S K 3452・S K 3476・S K 3503・S K 3524などの方形を呈するもの、S K 3427・S K 3447・S K 3456・S K 3466・S K 3519のように円形または楕円形を呈するもの等がある。他に、S K 3467・S K 3431・S K 3450・S K 3482・S K 3491・S K 3510・S K 3515・S K 3512・S K 3525・S K 3530・S K 3531・S K 3532などがあるが、全体に小形で浅い。北東隅にあるS K 3447は、径約2m、深さ約40cmと、小形ながら土器皿・小皿の完形品を中心に、整理箱で10箱分と多量の土器が出土した。一括して捨てられたものであろう。S K 3476からも山茶碗・山皿を中心にかなりのまとまった土器が出土しているが、他の土壇からはわずかである。中央部に位置するS K 3524の北東隅には焼土が残る。また、調査区中央部やや西寄りのピット状土壇S K 3515からは、多量の古銭が一括して出土した。古銭が埋めてあった穴は、現在の地表から60cm下、遺構面からは深さ約30cmで、長径70cm、短径45cmである。97枚前後を1単位としたいわゆる差銭の状態で約119通確認され、総数11,571枚を数えた。各単位には、細い繩が通してあり、観察結果からすればさらに3連ごとにひもの結び目をつくり、連結されていたことが窺われる。底部の差銭には、布目压痕が付着しており、おそらく袋状のものに納められていたものと考えられる。埋蔵された時期については、鎌倉時代の土器片が同じ土壇から出土していることや、判明した古銭のうち、景定元宝（1260年初鑄）が時代的に最も新しいことから、鎌倉時代中期以後と推定される。現在判読されたものは、五銖銭・開元通宝・元祐通宝・政和通宝・嘉定通宝など49種類であるが、今後精細な検討によりさらに増えるものと思われる。斎宮での発掘調査で今回のような古銭の大量出土は初めてであるが、現在のところ、帝王制度との関連は明らかではない。

溝は、第35次調査で検出された分を含めて13条検出された。発掘区西部のS D 3406・S D 3509・S D 1884、発掘区東部のS D 1903の南北溝のほかは全て東西溝である。S D 1903は、平安時代末期に埋没するいくつかの南北溝のすぐ東側につくられており、南部で直角に曲がり東に向かうが、浅くなり途切れてしまう。S D 3406・S D 3509・S D 1884は、いずれも途中で切れたりする小規模なものである。調査区南端部には、幅約4mの間に東西溝がいくつか掘られている。幅約0.5m～1.5m前後、深さは0.5m～1.5mとその規模はさまざまであるが、何度か掘り返されながら、一つの区画溝としての機能を果していたものであろう。溝の前後関係については、セクションによる埋土の切り合い関係によって、S D 3514→S D 1911およびS D 3544→S D 3543→S D 1911の順序が確認された。このうち溝S D 3514は、幅約1m、深さ約1.2mで逆台形を呈する。この時期の中では規模の大きいものであるが、発掘区中央部で途切れてしまう。これに重複あるいはわずか南を並走する形でS D 3544が掘られているが、その前後関係はわからない。この時期で最も新しいS D 1911はこれらの溝のすぐ北側を東西に貫くものである。最大幅1.4mで、地山面からの深さは40cmである。この他に、S D 3526・S D 3527・S D 1896・

S D 3513・S D 3512などの東西溝があるが、いずれも小規模なものである。

井戸 S E 3436は、調査区中央部やや北寄りで検出された。径 2.2m の円形を呈し、上部はすり鉢状に掘られているが、上面より 50cm の所からは、径 1.4m の円形で真すぐ下方に掘られる素掘りの井戸である。出土遺物は、須恵器、土師器の細片など微量であった。

#### (VI) 鎌倉時代後期の遺構

第35次調査で検出されたものを含めて、土塙 8、井戸 2、中世墓 1、溝 1 を検出した。

8つの土塙のうち、調査区中央部で検出した S K 3478は、大小いくつかの土塙群からなり、3 m × 6 m の不整橢円形を呈する大形の土塙であるが、土器の出土量はわずかであった。北西部に位置する S K 3408と、それに近接する S K 3414は、共に一辺約 80cm、深さ約 30cm の方形を呈する小土塙である。S K 3414からは、通称ベラと呼ばれる土師器皿が、完形品にして約 100 点ほど一括して出土した。S K 3408からも、土師器皿が 10 点ほどほぼ完形のまま出土している。この他の土塙 S K 1897・S K 1899・S K 1905・S K 3480・S K 3549からは、いずれも遺物の出土量は少ない。

調査区中央部南寄りにある南北溝 S D 1892は、途中で切れてしまう小規模なものである。

調査区東端の井戸 S E 3539は、径 1.2m の円形素掘り井戸である。調査区の西端にある井戸 S E 3459は、上部が径 4 m × 3 m で、すり鉢状に掘られているが、上面より 20cm 前後からは、3 m × 3 m で真すぐ下方に掘られたほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。地表面より約 4 m 掘り下げたが、完掘できなかった。

調査区中央部北寄りにある土塙墓 S X 3428は、東西 2.2 m × 南北 1.2 m の長方形を呈し、深さ 70cm を測る。土師器皿・甕・鍋などの細片とともに、棺に使用したと思われる鉄釘がわずかに出土している。

#### (VII) 遺 物

出土遺物は遺構に対応して、平安時代前期と、平安時代末期～鎌倉時代のものが大半を占めている。整理箱にして約 200 箱と、その量も多い。比較的良好な土器の一括資料が得られたものに、平安時代前期に位置づけられる S K 3458、同じく末期に位置づけられる S K 1904・S D 1902があり、鎌倉時代には S K 3414・S K 3447がある。

平安時代前期の S K 3458からは、黒窯 90 号窯期の灰釉陶器碗 2 点と共に、土師器杯・甕などが出土している。大半が土師器杯で、完形品にして約 20 点にのぼる。口径 13cm 前後、器高 3 cm 前後で、赤褐色または黄褐色を呈し、口縁部がゆるく外反し、比較的薄手である。口縁部はヨコナデ、底部は指による押さえで、表面は凹凸がある。

平安時代末期に位置づけられる良好な一括資料としては、井戸 S E 1904、溝 S D 1902 出土のものがある。S E 1904 出土のおもな器種には、土師器皿・小皿・高杯・鉢・台付小皿・甕・鍋

・ロクロ製皿・同小皿、山茶椀、山皿、須恵器鉢、砾石、石臼、暗緑色の墓石などがある。大半が口径9cm前後、器高1cm～1.5cmの土師器小皿で、口縁部はヨコナデ、底部は指による押さえで、表面には凹凸がある。完形品も多く含まれる。溝S D 1902からは、山茶椀を中心に山皿、土師器小皿・皿・台付椀・甕・高杯、須恵器鉢・甕、青磁椀などが出土している。山茶椀は、瀬戸窯山茶椀編年におけるIIIの5の段階に相当するものであり、12世紀末頃を考えている。

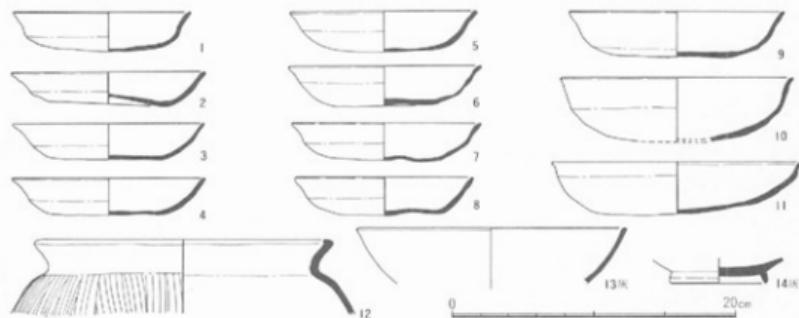
鎌倉時代前期の土塙S K 3447からは、土師器皿・小皿・鍋・高杯、山茶椀などが出土している。中でも土師器皿と小皿が大半を占める。土師器皿は、口径約15cm前後、器高3cm程で、比較的の底部に比ベ口縁部が厚手で、口縁部はわずかに内弯する。淡茶褐色を呈し、口縁端部をわずかにヨコナデする。底部は指による押さえで、凹凸がある。土師器小皿は、7cm～8cm、器高1.5cm前後で、すべててずくねのものである。

山茶椀は、厚い底部、腰の張った体部、わずかに外反する口縁部から成り、底部には扁平で粗雑な高台が付く。底部が角切りのままで高台の付かない山茶椀もあり、この中には口縁端部を上方にわずかに折り曲げ、口縁端部外側に面をつくるものが見られる。

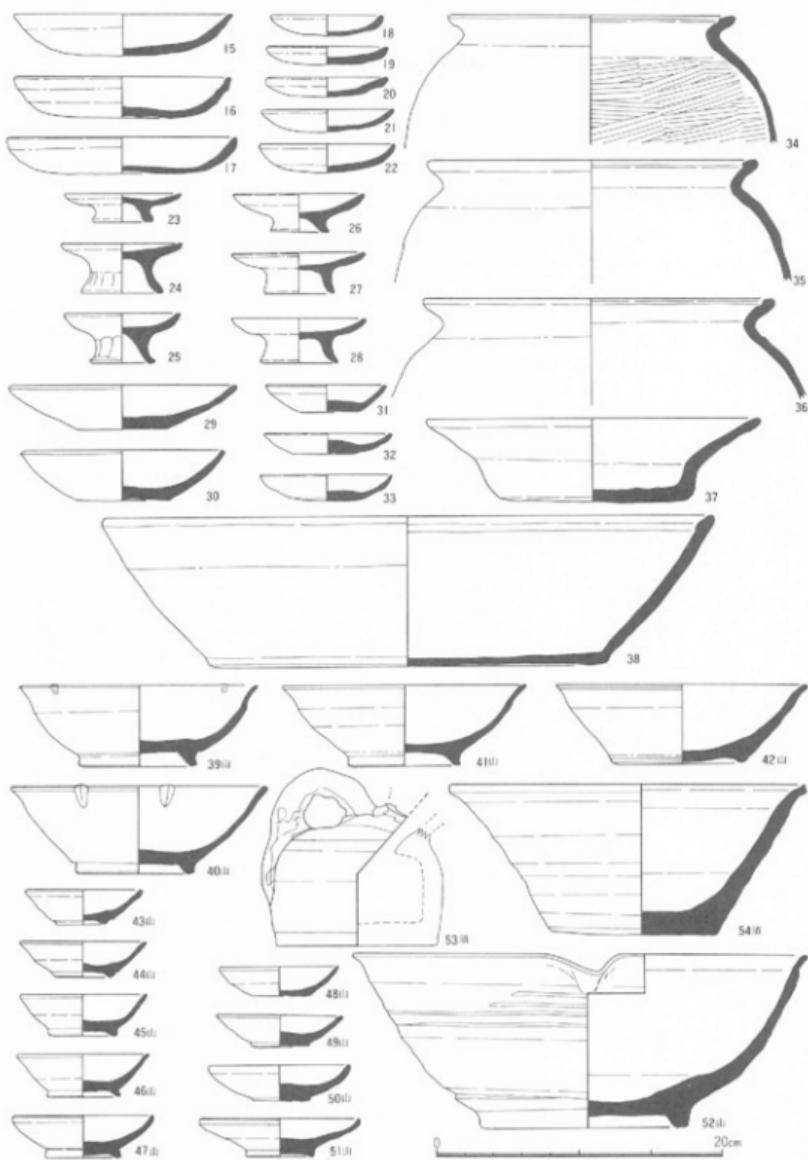
鎌倉時代後期の土塙S K 3414からは、土師器皿・小皿が約100点ほど出土している。皿は口径11cm前後で、口縁部は大きく内弯する。小皿は口径7.5cm前後。いずれも器壁は非常に薄く、色調は白っぽい。

綠釉陶器は、包含層も含めて445点確認された。大部分が椀、皿類の破片であるが、中には段皿や壺などもあり、陰刻花文を施したものや二彩陶器も混じる。また火災をうけ、色の変色しているものもある。

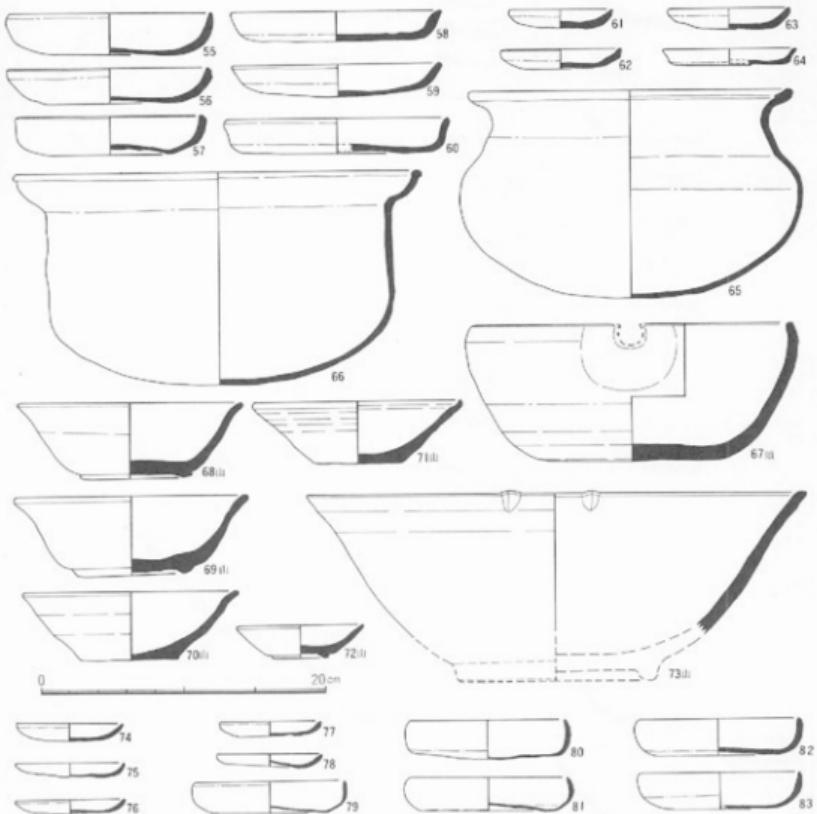
墨書き土器は30点出土している。山茶椀底部外面に書かれたものが19点、同じく山皿5点、土師器皿6点である。



第2図 第54次出土遺物 S K 3458 ; 1～14



第3図 第54次出土遺物 S E 1904 : 15~54

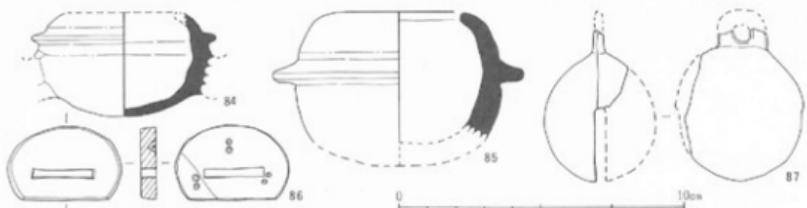


第4図 第54次出土遺物 S K 3447 ; 55~73、S K 3414 ; 74~83

このほか特殊な遺物では、平安時代後期の灰陶陶器椀の底部内面を硯として利用した転用硯2点や、斎宮ではあまり出土しない布目瓦などがある。転用硯のうち1点は朱を塗ったものである。また、調査区ほぼ中央部の平安時代のピットからは、銅製の鉢が真半分に割れた状態で出土している。その他包含層や小穴からは、濃緑色の石鉢（丸柄）1点、濃紺色の碁石2点、ミニチュア羽釜2点が出土している。

#### (VII) まとめ

第51次調査で検出された区画溝S D 291の北方部分の状況把握を目的とした今回の調査では、区画溝S D 291の北方部分の状況およびこれと直交する南北方向の区画溝に区画された一画の



第54回 第54次出土遺物ミニチュア羽蓋；84・85、石鉢；86、銅鉢；87(1:2)

状況を把握することができた。遺構、遺物ともに平安時代初期およびそれ以前のものは皆無に近く、平安時代前期から鎌倉時代にかけてのものが多く、大半を平安時代末期のものが占めることが確認された。

平安時代前期には、比較的大形の柱掘形をもつ掘立柱建物群が、調査区北西部に出現する。これらは、何度か建て替えられていることが窺えるものの、建物間の配置に明確な規則性は認められなかった。しかし、柱掘形などから考えて、平安時代前期の斎宮寮に相当することが考えられ、さらに北及び西に整然とした配置を示す大形建物群の所在が考えられる。

平安時代中期では、土地数基を検出したにすぎない。

平安時代後期には、1条の南北溝の他に、数棟の掘立柱建物が散在するが、規画的な配置や溝との関連を明らかにするまでには到らなかった。

平安時代末期の遺構、遺物は多い。幾条かの溝が掘られ、十数棟の掘立柱建物が建てられるのもこの時期である。建物の約半数は、南北溝や柵列の方向と柱通りを揃えており、ある程度の地割りの意識が存在していたと思われる。また從来より、梁行が3間以上で平面プランが方形に近い大形の総柱建物が出現するのは、この時期からと考えてきたが今回もこれを裏付けることができた。

鎌倉時代に入ると、調査区南端部を東西に走る溝がいくつか出現するが、掘立柱建物の数は減り、4棟検出されただけである。建物は総柱で、中には柱掘形内に根石を入れるものが認められた。この時期の遺物のうち、発掘区中央部付近で出土した古銭塊は、周辺に関連するような遺構もみられず、性格は不明であるが、斎王制度と直接関連するものか否か、今後の研究をすすめていきたい。

以上のように、当地区は各時期を通じて建物の計画的な配置や個々の建物間の関係を見い出すまでには至らなかったが、出土遺物に食器としての杯、皿類の出土が目立ち、煮焚き具としての鍋、甕の類が少ないと、墨書土器の出土が多く、綠釉陶器も445点とかなりの量が出土していることなど、非常に官衙的な性格が強い地区であろうと指摘できよう。

### III 第55次調査

#### 6 A E N - P 、 6 A E O - H (御館・柳原地区)

昭和48年に始まった宮城範囲確認調査における第8・9・10次調査の御館・柳原地区的調査結果はこの地区が斎宮跡の中心部分であろうと充分に予想させるものであった。それは平安時代の大形掘立柱建物をはじめ多数の縁石陶器、墨書・朱書き器、石製銘帯などの検出からうかがわれる。史跡指定による保存管理計画ではAB地区(公有化地区)として区分された所である。

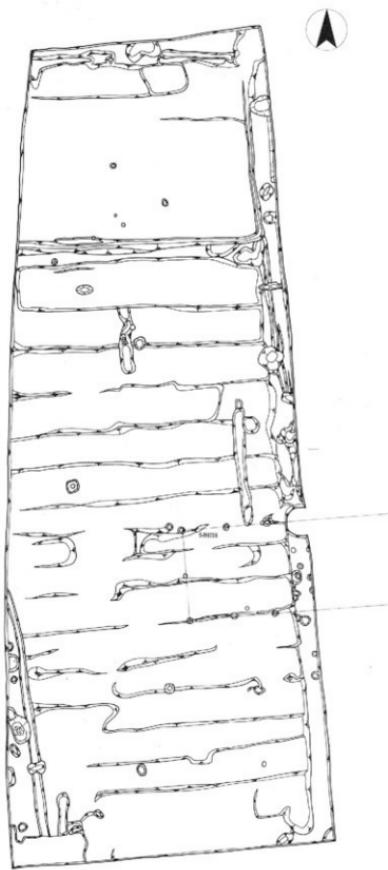
その後、昭和53年度の第19・20次調査、54年度の第28次調査と3回の調査を実施している。その際、それぞれ63棟、32棟、29棟の掘立柱建物を検出した。それらは平安時代前半より末期にいたる各時期のものがある。前半のものは5間×2間を基本とする大形の建物が多く、時期が下がるにつれ少くなり、後半から末期にかけては3間×2間の小形の建物が主体となり、調査区の南部分では建物が重複して密集する個所が一定の幅で東西方向に並ぶことなどが確認されている。

今回の調査は第19次と20次調査区の間をつなぐ状態で調査区1,500m<sup>2</sup>を設定した。小字御館・柳原の境界を挟んだ所で、境界部分には南北に走る区画溝の存在が予想された。これで、この地区では約6,000m<sup>2</sup>の広範囲にわたって面的発掘調査をすることになった。調査は7月16日より始めた。この夏もまた、保存啓発事業の一環として、斎宮小学校の児童および父兄による体験発掘を当地区において、7月30・31日の両日にわたり実施した。

調査の結果、掘立柱建物21をはじめ多数の土塹、溝を検出した。しかし、東側の柳原地区では既に土取りによる遺構面の削平で西側より地山が約40cm程度低くなってしまっており、遺構はほとんど確認出来なかった。西側の御館地区では、検出した建物の多くが第19次調査地区に続くものであり、新たにみつかった建物は7棟のみである。一方、御館・柳原両地区の境界部分に存在すると予想していた区画溝は、明瞭にし得なかった。鎌倉時代以降の遺物を出土する幅60cm程度の溝が何条も重複しており、第46次や第51次調査で検出したような幅2m以上の逆台形を呈する溝は存在しないようである。しかし、溝のすぐそばには建物が建たない状況である点は他の区画溝の存在する地区同様である。

##### (1) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物6、土塙4がある。掘立柱建物の多くは第19次で検出した建物の東側部分である。SB 999・SB 1001・SB 1004・SB 315はいずれも5間×2間の東西棟の建物である。桁行11.6m~12m、梁行4.8mと大形である。今回検出した2棟はやや小形で、SB 3551とSB 35



第6図 第55次造構実測図 (1:200)



52は3間×2間の南北棟である。これら6棟の掘立柱建物は柱通りの方向により2者に区分し得る。ほぼ方位にのるS B999・S B1004・S B3552と北に対し、1°～2°程西へふれるS B315・S B1001・S B3551の二者である。S B1004とS B 315は柱穴の切り合いよりS B1004の前者の方が新しいと思われる。この期の建物の柱掘形は径70cm～90cmの方形に近く、S B3551のみが径40cmの小形の円形を呈している。また、S B3552は2間×2間の身舎に南側に廂をもつもので、S K3555の埋土中で検出しており、この土塙より新しい。

土塙はS K 317・S K3555～S K3557・S K3560がある。S K 317は第8～9次で検出したもので、径2.7m×1.8m、深さ30cmの楕円形の土塙である。土師器杯・甕の破片が少量出土している。S K3555は5.6m×5.4mのほぼ正方形を呈する土塙で、深さ25cmで、当初竪穴住居かとも考えられたものである。西および北側は直線的につづくが、東、南側は整然としない。塙底も南側、北東側には不規則な土塙が重複した状態で、一段深くなる箇所がある。東北隅にはS K3556・S K3557が重複している。S K3557も多くの土塙が重複した状態で底は一定でない。S K3560はS K3555の東南側に接するようにある径4.2m×4.0mの楕円形の土塙で、僅か20cm足らずの深さである。これらの土塙の埋土は黒褐色土で、多数の土器が出土している。その上、これらの土塙出土の土器が互いに接合する場合もあり、ほぼ同時にあったと考えられる。S K 3557からは円面鏡も出土している。S K3555はS B3552より古く、S K3560はS B 315より古いものである。

#### (II) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物S B1002と土塙S K1021があるのみである。S B1002は東側柱のみを検出したもので、5間×3間の東西棟で、北側に廂をもつ。柱通りは平安時代初期のものに比べ、北に対し西へのふれは大きくなる。

土塙S K1021も第19次で一部検出したものである。径4.3m×3.6mの楕円形を呈するが、東側に円形の土塙が重複しているものかもしれない。土師器杯・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿など数百点の土器片が出土している。

#### (III) 平安時代後期の遺構

この時期の遺構は2期に区分し得る。前者に属するものに掘立柱建物S B3562・S B3563・S B3564・S B3567・S B1007・S B1059がある。S B3563・S B3564は共に3間×2間の東西棟で、ほぼ同じ規模であり、建て替えかとも考えられる。柱通りの方向はS B3563がE 8°N、S B3564がE 10°Nとややふれが大きい。S B3562は3間×2間の南北棟建物で、他の2棟に比べ柱掘形が一回り大きく一辺60cm～80cmの方形を呈し、比較的大形である。これら柱掘形からは少量の土器片が出土している。S B3563からは蕭宮跡土師器編年S E 2000相当の土器片が出土している。S B3564からはそれよりやや古い土器片が見られる。

後者に属するものとして掘立柱建物 S B 1019・S B 1014・S B 1022・S B 1023・S B 3570がある。S B 3570は今回新しく検出したもので、3間×3間とめずらしく、調査区の最も東に位置している。この期の建物はすぐ西側の第19次調査の際にも相当数見つかっている。その多くは径40cm程度の小形の柱掘形で、何度も同じ場所で建て替えられたように重複している。

一方、東側の柳原地区で、ただ一棟のみ検出したS B 1059は第20次調査で検出した建物の西側部分で、5間×2間の東西棟で、柱掘形からS E 2000相当の土師器が出土している。

#### (IV) 平安時代末期の遺構

新しく検出した掘立柱建物はないが、第19次調査で検出のS B 314・S B 1008・S B 1024の全体の規模を確認した。土塙には、調査区西部のS K 3565・S K 3566、東部のS K 3571がある。いずれも長径1m～2mの楕円形土塙で、土師器皿類がまとまって出土している。

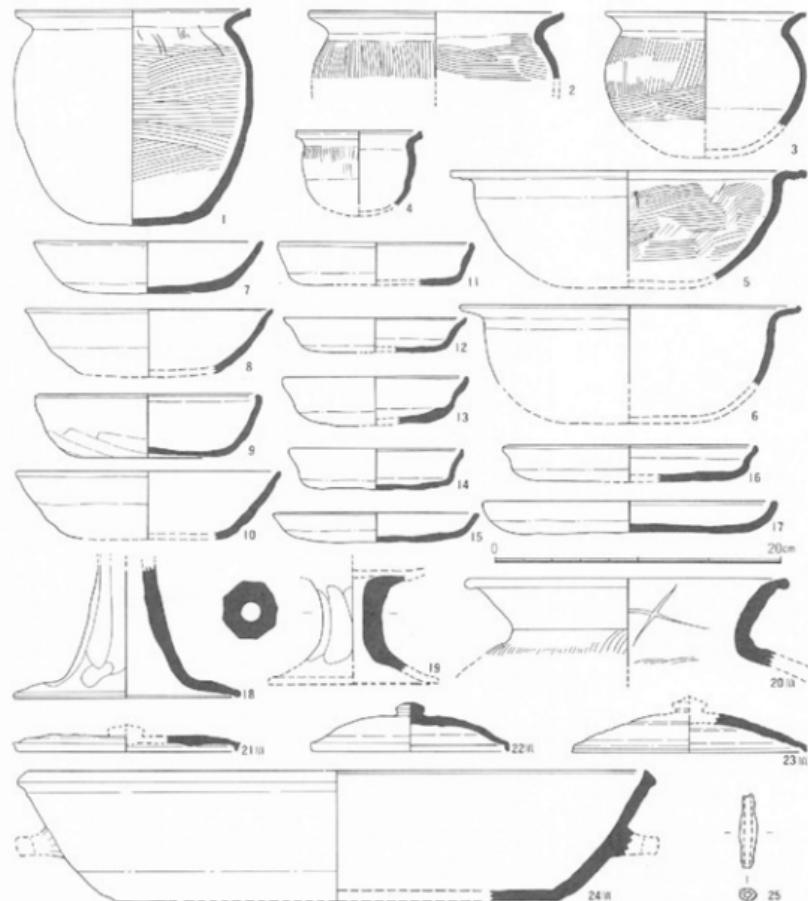
#### (V) 遺 物

調査区の東側、柳原地区および御館地区的南部分の道路寄りの部分は、既に土取りにより削平されており、その上、第8～10次調査のMトレンチと重複しているため、調査面積のわりに遺物の出土量は少なく、整理箱50箱足らずである。また、耕作土、遺物包含層は浅く、この部分からの出土は見られず、ほとんどが遺構からである。なかでも、S K 3555からS K 3557にかけての土塙が最も多い。その他遺物も土塙からの出土で、溝からは少ない。S K 3555～S K 3557は数個の土塙が重複した状況で、遺構の検出状況からは新旧関係を明瞭にし得なかった。次いでS K 3560があるが、土器の多くは細片となっていた。S K 3565・S K 3566・S K 3571はいずれも小さく浅い土塙であるが、土器の出土は比較的多い。

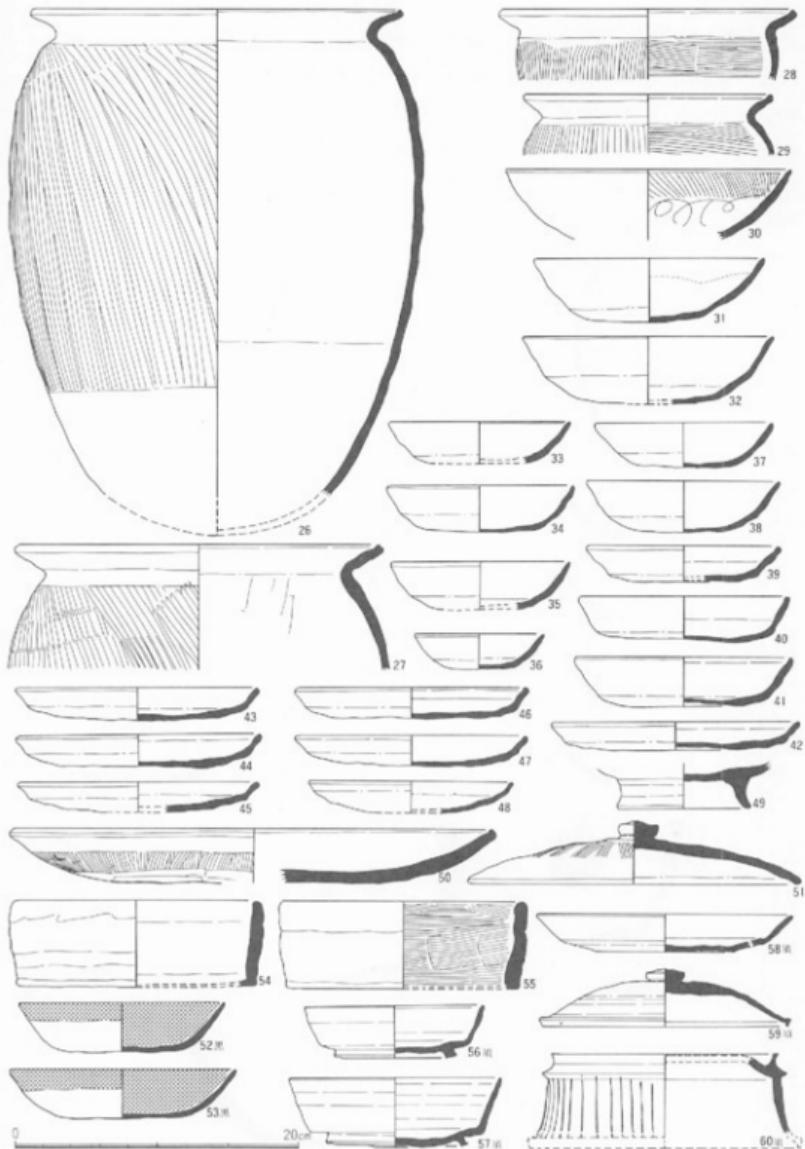
S K 3555・S K 3557はともに平安時代初期に属するものである。土師器甕・鉢・杯・高杯、須恵器甕・杯・蓋・鉢・硯と豊富な器種を出土している。土師器甕は大、小2種あり、奈良時代の甕と比べると、小形品は大差ないが、大形の長甕は奈良時代のものほど長くなく、やや球形に近く、刷毛目も粗いようである。杯は口縁部が屈曲して立つ、この時期特有のものが多くなる。皿も浅い薄手のもので、奈良時代的な厚手の大形品は少ない。杯・皿のほとんどが、口縁部をヨコナデ、杯下半部は指のなでつけによるe手法の調整である。5・9のみは底部をヘラケズリするb手法であり、30の内面には斜行および蝶線の暗文が施されている。S K 3557からは黒色土器、製塙土器も出土している。円面硯(60)は海部と脚上部の破片である。口径16cmで、脚部はあまり開かず直立気味である。器壁5mmの薄手で、脚部には透しは無くヘラ描沈線が縦方向に1cm間隔で施されている。これらのS K 3555とS K 3557の土器は、第34次SK 1445出土の土器群に似ており、平安時代初期と考えられる。しかし、S K 3557は浅い皿が多いこと、口縁部が屈曲する杯が少ないとなどから、この範疇の中でも新しいものと思われる。

S K 1021出土土器には土師器杯・皿、須恵器杯・蓋、灰釉陶器碗・段皿がある。土師器杯は

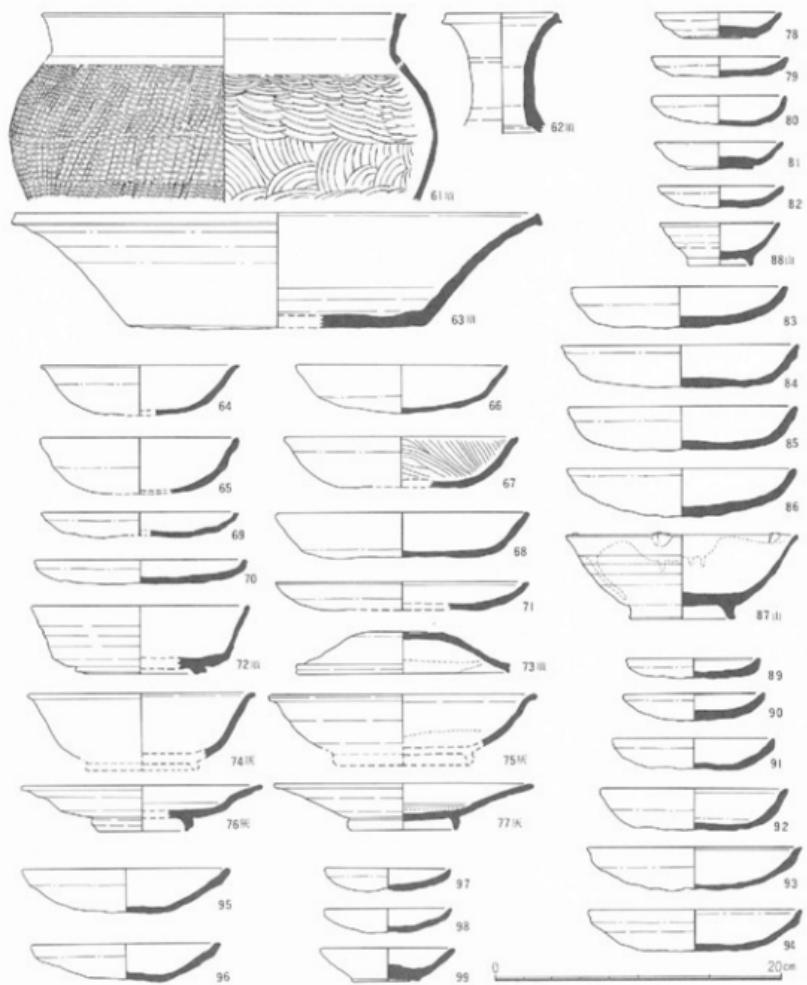
S K 3555やS K 3557に比べ薄手で、口縁の外反が大きくなる。皿も口径が縮小し、口縁部外面のヨコナデの範囲も狭くなり、底部と口縁部との境に明瞭な棱が見られなくなる。伴出する灰釉陶器は、流し掛け、体部内面のみハケ塗り、体部内外面ハケ塗りのものが見られ、その形態から黒笹14号窯期と黒笹90号窯期との中间的な様相を見せている。これらから、S K 1021出土土器は、斎宮跡土師器編年のS K 3127に相当し、平安時代前1期の中でも新しい段階に属するものと考えられる。



第7図 第55次出土遺物 S K 3555 ; 1~25



第8図 第55次出土遺物 S K 3557 ; 26~60



第9図 第55次出土遺物 S K 3557 ; 61~63、S K 1021 ; 64~77、S K 3566 ; 78~88  
S K 3565 ; 89~94、S K 3571 ; 95~99

S K 3565、S K 3566、S K 3571出土土器は全て平安時代末期に属する。土師器小皿の形態や法量は大差ないが、杯の口縁部の形状や法量の違いにより S K 3566が最も古く、あるいは後二期まで遡る可能性もある。他の二つは、第50次調査で検出の S D 3052出土土器によく似ている。

## (VI) まとめ

今回の調査は、西側の第19次調査地区と東側の第20次調査地区的間をつなぎ、単に面的に調査地区を増やすという意図のみでなく、南北の農道を伴う字御館と字柳原の間に、宮城東部にみられた区画が及ぶかを検討する目的を持っていた。この点に関しては、すでに述べたように、鎌倉時代以降の土器を包含する幅約60cmの溝が何条も重複していることを確認するにとどまり、宮城東部の比較的整った区画溝とは規模と、時期からも一致するところが少なく、今回の調査地点では区画溝として、明確にすることはできなかった。しかしながら、第44次調査で検出された道路西側溝(S D 2660)から、この溝(S D 318・S D 3559)が西へ約130mの地点にあり、溝の東と西とも一定の建物の建たない空地が存在することから、不十分ながらここでは一応、字御館と字柳原の境が斎宮跡官衙を地割する線と考えておきたい。

一方南北の間の地割については、今次調査ではまったく不明であるが、一応宮城東部での1区画約120mを西方におよぼすと、すでに調査済みの19次・20次・28次と合わせて、西側の字御館部分は、1区画約15,600m<sup>2</sup>の南東部分の約5分の1弱にあたり、東側の字柳原部分では、南西部約5分の1強が調査されたことになる。

今回、あらためて過去3回の調査で検出された建物の規模・時期を検討し、時期別に図示したもののが第10図と第11図である。御館地区では、平安時代初期から、中期を除き末期まで、6期、総数68棟、柳原地区では、中期が入って7期、57棟の建物が検出されたことになる。ここでは御館地区の建物の時期的変遷について概観してみたい。

平安時代初期の建物は15棟ある。南北棟5棟に対して、東西棟が10棟と倍を数える。また大形建物に限れば、南北棟1棟に対して東西棟が9棟にのぼり、この傾向が圧倒的となる。大形建物の面積は、二面廻付南北棟S B 1000の120m<sup>2</sup>を除くと、大半が桁行5間×2間の平面をもち50m<sup>2</sup>～60m<sup>2</sup>あり、3間×2間が多い小形建物は、20m<sup>2</sup>前後の面積をもっている。柱掘形をみても、大形建物では一辺90cm～1mと大形方形であるが、小形建物では50cm～60cmの小形方形である。このような平安時代初期の建物は、大形の主要建物、小形の付属建物とともに1時期に2～3棟が同時に存在し、建物柱通りの方位、配置状況、柱掘形の切り合いから4～5回の建て替えが行われたものと推定される。

平安時代前期では、I期の建物11棟、II期の建物7棟と減少の傾向がみられ、南北棟建物も4棟から1棟へと少なくなる。主要建物の平面規模をみても、I期では廻付建物が1棟あって、その面積も60m<sup>2</sup>～70m<sup>2</sup>と平安時代初期に近いが、II期では、5間×2間の建物であってもその面積は33m<sup>2</sup>～40m<sup>2</sup>と小さくなる。小形の付属建物は、初期同様3間×2間で20m<sup>2</sup>前後の面積と変化はない。柱掘形についてみても、大形の主要建物では一辺80cm～90cm、小形の付属建物では40cm～50cmといずれも小形化をたどる。前期の建物のあり方から、I期については大形主要建



第10図 第19・20・28・55次調査掘立柱建物時期別変遷図（1：1000）

物1～2棟と小形の付属建物3棟ぐらいが同時にあって2度建て替えが行われ、II期については、主要建物1棟と付属建物2棟のうち後者が2～3度建て替えられたものと推定されよう。

平安時代中期の建物は激減し、御館地区では皆無になり、わずかに柳原地区で2棟の小形建物が確認されたにとどまる。



第11図 第19・20・28・55次調査掘立柱建物時期別変遷図（1：1000）

平安時代後期はⅠ期とⅡ期にわけられ、Ⅰ期では12棟、Ⅱ期では16棟確認される。建物の棟方向では前の時期同様東西棟が大半を占める。主要建物として区別できる5間×2間の建物は、Ⅰ期についてはなくなり、Ⅱ期では2棟認められるが、面積約40m<sup>2</sup>で柱掘形も小形建物（面積25m<sup>2</sup>前後）と同様40cmで円形に近い。建物の位置が約20mの間をおいて南方の2ヶ所に限定さ

れる傾向がみられ、2棟組の建物が4～5回建て替えられたと考えられる。

平安時代末期の建物は、すべての建物が面積25m<sup>2</sup>前後で径40cm前後の小形の柱掘形をもつ東西棟である。建物の位置も後期と同様の場所に限られ、1～2棟が3～4回建て替えられたものだろう。

以上のように西側の御館地区が、1つの官衙の区画のなかにあって南東部の約5分の1弱を占める場所にあたることを前提として、その部分の建物の変遷についてみてきたのであるが、この1区画については、建物規模の変遷はあるものの平安時代全体を通して（猿投窯編年の折戸53号窯式と併行する平安時代中期を除いて）15回～20回にわたり継続的に建物が建て替えられている状況が明らかになった。東部の柳原地区についても、建物の配置は当然異なるものの、平安時代初期から前II期までの大形主要建物と小形の付属建物が組になる状況から、後期から末期にわたり次第に小型化していく同様の過程を見い出すことができる。4次の調査を重ねた現段階で概観できるのは以上のとおりであるが、今後字御館・字柳原地区的調査が進み、1つの区画全体を見通すことのできる時期を待ちたい。

## IV 第 56 次 調査

### 6 A C H - S (東裏地区)

宮城西部の東裏地区で実施する計画的な面調査は今回で3回目である。第1回目は東裏地区の中でも西部に位置する場所で第27次調査を実施し、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土塙土師器焼成址などを検出している。第2回目は東裏地区の北端部にあたる場所で、古里地区から東へ延びる古道南部の状況を明らかにする目的で第50次調査を実施し、奈良時代から平安時代初期にかけての竪穴住居、掘立柱建物のほか、平安時代末期の大形の純柱建物を確認し、各時期の掘立柱建物が奈良時代の大溝S D 170や古道の方向に規制された地割りによるものか、ほぼ柱通りの方向をこれに揃え、比較的整然と配置されていることが確認されている。また東裏地区南部では、約4,300m<sup>2</sup>にも及ぶ齋宮小学校関連の現状変更に伴う事前調査を実施し、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物をはじめ、平安時代後期の掘立柱建物、四脚門、築地などを検出している。

以上のように、東裏地区における遺構状況は、奈良時代及び平安時代後・末期の遺構が主体で、両時期の間を埋める遺構はほとんど皆無に等しいという状況である。今回の調査はこうした状況をふまえ、東裏地区の東部の状況を明らかにすることを目的とした。調査地は竹川字東裏289-1番地である。

調査の結果遺構面までは地表から30cm~40cmと浅く、また後世に開墾されたためであろう、重機による幾条もの小溝が全面を走っていたが、幸い遺構への影響は少なく、飛鳥時代の竪穴住居1、奈良時代の竪穴住居14、掘立柱建物7、平安時代後期~末期の掘立柱建物11、井戸1のほか各時期の土塙を多数検出した。

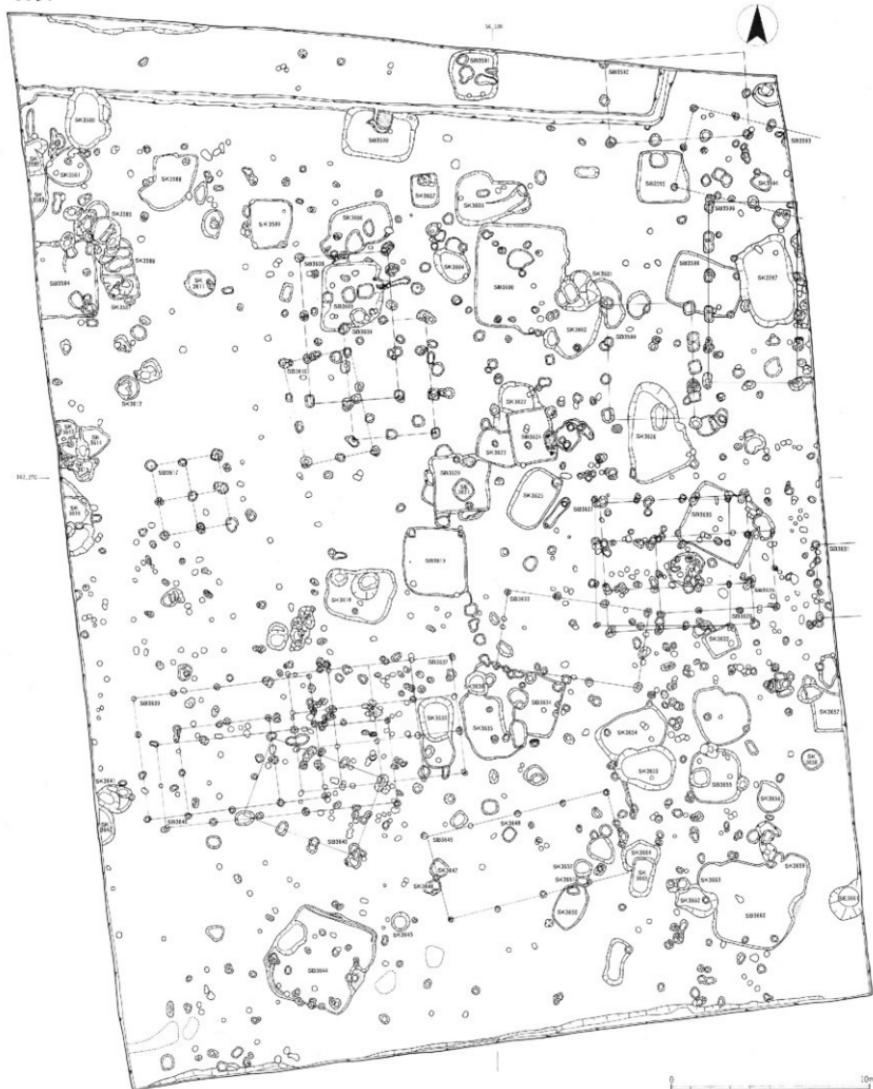
#### (1) 飛鳥時代の遺構

調査区南東部の竪穴住居S B 3644、北東部の土塙S K 3601がある。

竪穴住居S B 3644は一辺4.8mの方形プランを呈し、東壁中央部にカマドとしての焼土面の高まりがあり、西壁寄りに貯蔵穴とは考えられないが1.8m×1.1mの深い土塙をもつ。周溝は北壁及び南西コーナーで一部が確認された。四隅の主柱穴は明確でない。このように奈良時代の竪穴住居に比べて一回り規模が大きく、周溝を有する点で古い様相を示しており、出土土器でも淡褐色を呈する粗製の椀が主体的で、共伴する須恵器杯蓋が猿投窯編年の岩崎41号窯式に相当するものと考えられるところからこの時期のものとした。

土塙S K 3601は、遺構面では径2.2mの円形土塙として確認されたが、遺構を掘りあげた段階で5つの小土塙の集合体であることが確認された。土師器杯・椀・甕が少量出土している。

56次



第12図 第56次遺構実測図（1：200）



## (II) 奈良時代前期の遺構

調査区の東半部で検出した竪穴住居4、土塙3がある。

竪穴住居は北から順にS B 3600・S B 3619・S B 3634・S B 3660があり、いずれも主柱穴や周溝は認められず、規模や平面プランも統一されていないようである。このうちS B 3600が最も規模が大きく東西4.5m、南北5.2mを測る。他は一辺3m~4mの小規模なものである。カマドはS B 3660の東壁中央部に痕跡として認められたが、他は明確にし得なかった。

土塙は楕円形を呈するS K 3602と、底辺3.2m、長さ4.9m、深さ40cmの二等辺三角形を呈する大形土塙S K 3626と1.7m×1.3mの長方形を呈するS K 3632がある。S K 3602は竪穴住居S B 3600に西肩が切られており、これより古い。またS K 3626の南半部は全体の大きさを確認し得なかったが平安時代末期の浅い土塙に切られている。いずれの土塙も土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・蓋等が出土しているが、出土量は多くない。共伴する須恵器は猿投窯編年の高藏寺2号窯式に相当する。

## (III) 奈良時代中期の遺構

この時期の竪穴住居が最も多く9戸を検出したほか、この竪穴住居から生じる日常生活廃棄物を捨てたと考えられる土塙9がある。

竪穴住居は、最大のものでS B 3584の一辺3.9m、最小のものではS B 3624の2.8m×2.2mで、平均床面積は約8m<sup>2</sup>であり、奈良時代前期の竪穴住居に比べて全体的に規模が小さくなっている。竪穴住居の長軸線が東に対して大きく南へ傾くもの（S B 3598・S B 3630）と、これ以外のほぼ方位にのるもの（S B 3584・S B 3591・S B 3595・S B 3605・S B 3620・S B 3624・S B 3655）がある。カマドは比較的壁面の深いS B 3605・S B 3620・S B 3624で顕著に認められた。特にS B 3605は東壁中央部に設けられたカマドから東へ延びる幅25cm、長さ1.4mの煙道が確認された。煙道の方向は竪穴住居の軸線に直交せず、北へややずれる。煙道の先端、煙出し部分は丸く彫れ、底は少し低い。煙道の入口部分で土圧により押しつぶされた状況で底部を打ち欠いた胴の長い長甕が1個体検出されたほか、先端部でも甕胴部片を確認しているところから、少なくとも3個体の長甕を使用して煙道を築いていたものと思われる。またカマドの焚き口の右側には、長甕が直立した状態で検出されたところから、破損した長甕をカマドを構築する際、その一部として再利用したものと考えられる。

土塙は各竪穴住居の近辺で検出されている。径1m~2mの円形土塙（S K 3581・S K 3656・S K 3658・S K 3663）と、長辺が3m~3.5mの隅丸長方形土塙（S K 3580・S K 3603・S K 3606・S K 3625・S K 3654）がある。

## (IV) 奈良時代後期の遺構

竪穴住居1、掘立柱建物7、土塙29がある。

調査区北部で検出した竪穴住居 S B 3590は唯一この時期のもので、3.6m×2.5mの小規模なものである。北壁中央部にはカマドがあり、カマドを構築する際、床面に白っぽい粘土を貼りつけていることが確認された。

掘立柱建物はすべて調査区北半部で検出されている。柱掘形内出土土器だけでは時期の決め難いものもあるが、掘立柱建物 S B 3609・S B 3599がそれぞれ奈良時代中期とした竪穴住居 S B 3605・S B 3598の埋土を切っており、また掘立柱建物 S B 3596は同時期と考えている土塙 S K 3597の埋土を切っている点などから、およそ掘立柱建物は、この時期のものであると考えた。調査区北東部にある3間×2間の東西棟建物 S B 3592以外はすべて南北棟建物で、倉庫と考えられる S B 3617、5間×2間の S B 3596を除くと、他は桁行・梁行柱間こそ違え3間×2間の小規模な建物である。柱掘形はいずれも径50cm前後の円形ないしは隅丸方形である。S B 3617とこの東側にある S B 3610は、柱通りの方向や柱間が似ているところから同時期に建っていた可能性が強い。また S B 3610は、柱掘形の切り合い関係から S B 3610→S B 3608→S B 3609の順が確認されており、順次ほぼ同一場所で建て替えられたことが想定される。以上の点から奈良時代後期の中でも掘立柱建物は少なくとも3時期ないし4時期の変遷を考えられる。

土塙は不整円形を呈する大小様々なものが、調査区各所で検出されている。特に調査区北西部と南東部に集中しており、北西部で S K 3582・S K 3583・S K 3585～S K 3588・S K 3611～S K 3616、南東部で S K 3647・S K 3648・S K 3650・S K 3653・S K 3659・S K 3662・S K 3664を検出した。このほか北部の S K 3604、方形土塙 S K 3607、北東部の S K 3594、東西 2.7m、南北 4.5mと最も規模の大きい S K 3597、中央部の S K 3622・S K 3633・S K 3618、南西部の S K 3641・S K 3642がある。いずれの土塙も、その大きさにかかわらず、出土土器は土師器甕・鍋類が主体的で、土師器杯・皿・椀と共に細片が少量出土しているに過ぎない。

#### (V) 平安時代中期の遺構

この時期の土器は遺物包含層から少量出土はしているものの、遺構として検出できたのは土塙 S K 3589のみである。この土塙から出土した土師器杯・皿は、斎宮跡土師器編年の中期の様式遺構としている S E 3134よりは新しく、後Ⅰ期の S E 2000よりは若干遡るものと思われ、平安時代中期の中でも新しい時期のもの、猿投窯編年では折戸53号窯式の新しい段階の時期に相当するものと考えられる。

#### (VI) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物 6、土塙 1がある。

掘立柱建物は、奈良時代の遺物が北半分に多かったのに対し、南半分で多く検出されている。柱通りの方向から北に対し東へ10°～20°偏る群（S B 3593・S B 3633・S B 3643）と北に対し西へ4°～7°偏る群（S B 3628・S B 3639・S B 3640）とに大きく分かれる。柱掘形は調査区南

西部の3間×2間の東西棟建物S B 3643、東部の3間×3間の南面廂付東西棟建物S B 3628が径50cm～70cmの楕円形を呈し、後期の建物の中にあっては比較的大きいが、他は径30cm～40cmの円形を呈する。柱間は、梁行が7尺前後、桁行が7尺～8尺のものが多く、総じて桁行柱間がやや長い。建物の規模では5間×2間の東西棟建物S B 3640が最も大きく、これは宮城中・東部で検出されるこの時期の官衙の建物に匹敵するものである。ところでS B 3639は2間×2間の身舎に北面・西面・東面の3方に廂の付く三面廂付建物と考えられる。桁行柱間2.3m、梁行柱間2.15mで北面・西面廂柱間が1.9m、東面廂柱間が2.3mを測る。こうした建物は宮城北東部で実施した第37-4次調査で3棟確認しており、斎宮では今回で4例目となった。なお後者の3棟は南東隅に2間×1間分の土塙をもち、時期的には平安時代末期に位置付けられているが、今回のS B 3639には土塙を伴っておらず、これに先行するものと考えられる。

土塙は調査区東端で浅い方形土塙S K 3657のみ検出した。

なお、本時期の遺構は斎宮跡土師器編年の後II期とした様式遺構S K 1730・S K 1074に相当するものと考えている。

#### (VII) 平安時代末期の遺構

掘立柱建物5、土塙8、井戸2がある。

掘立柱建物は、前代（後期）の建物とはほぼ同一場所か、その近辺で検出されている。北側に廂をもつ3間×3間の東西棟建物S B 3627は、前代のS B 3628とはほぼ同一規模でほとんど重複しており、両者は廂を南面から北面へ移してはいるものの、柱位置を少し西へ移動しただけの建て替え関係にあるものとみられる。これは柱掘形の切り合いからも明白である。S B 3637は4間×3間の純柱建物で南東隅に2間×1間分の浅い土塙（S K 3638）が伴う。S K 3638は北半分が一段低くなっている。土塙内からは、土師器甌・小皿・台付小皿、山茶椀、山皿、青磁碗などの細片が出土している。これに類する純柱建物は宮城北東部の第54次調査で数多く検出されており、近くでは斎宮小学校関連の事前調査（第53-1次）でも一棟見つかっている。なお、第54次調査では柱掘形内に扁平な根石をもっているが、今回のS B 3637や第53-1次調査のS B 3778は、根石をもっていない。このほかこの時期の掘立柱建物にS B 3629・S B 3631・S B 3649がある。いずれも東西棟建物である。

土塙は径1m前後の円形小土塙（S K 3636・S K 3645・S K 3646・S K 3651・S K 3652）とS K 3635のように径2.0m×3.5mの大形で浅い土塙がある。また一辺2.0m×1.1m、深さ40cmを測る南北に長い方形土塙S K 3665は、土塙内から土師器皿6、小皿15、ロクロ製土師器小皿1、山茶椀2が出土しており、土塙墓の可能性がある。

井戸は調査区中央部でS E 3621、調査区南東端でS E 3661を検出している。S E 3621は径1.1m、S E 3661は径1.7mの円形素掘り井戸で、藤澤編年のII-4型式の山茶椀や斎宮跡S D 30

52に相当する土師器皿などが出土している。いずれも完掘はできなかった。

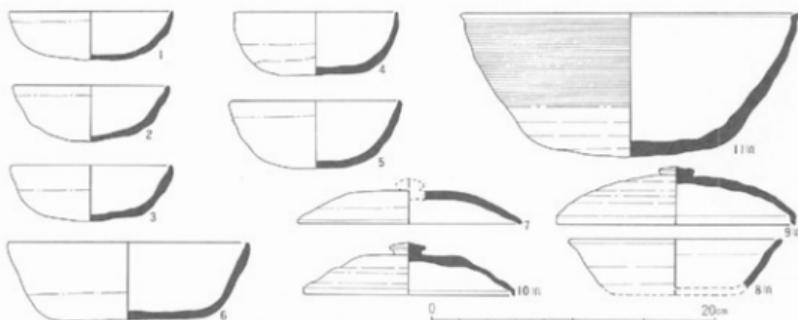
#### (VII) 遺物

調査面積 1,870m<sup>2</sup>と広く発掘調査した割には、出土遺物は整理箱で約90箱と比較的少ない。遺物の多くは、奈良時代前・中・後期の各窓穴住居や土塙から出土した土師器甕・杯・皿・粗製の椀などで、これに少量の須恵器杯・杯蓋・甕などが伴う。

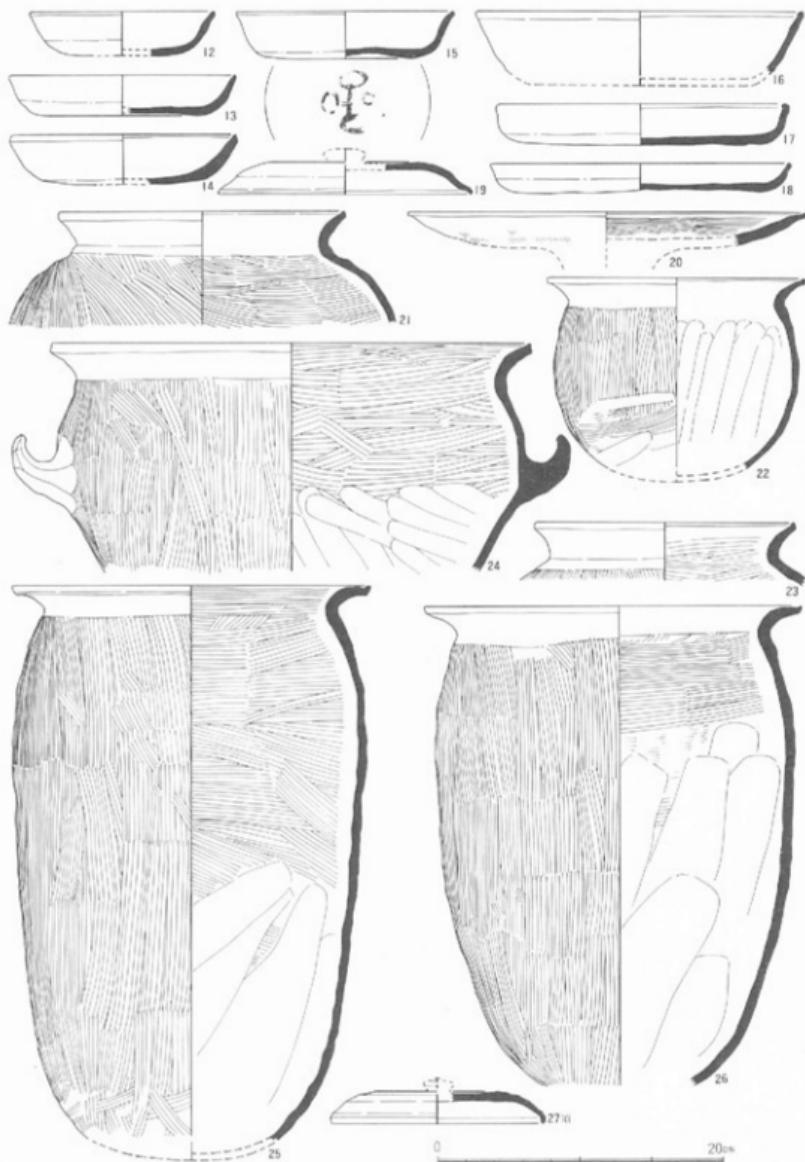
窓穴住居 S B 3644出土土器は、これより一時期古く、伴出する須恵器は猿投窓編年の岩崎41号窓式に相当するものと思われ、7世紀後半に比定し得る。土師器杯・杯蓋・椀・甕・長甕・甕・カマド、須恵器杯・杯蓋・鉢などがある。供膳土器では、口径11.3cm～12cm、器高 3.6cm～4.5cmで胎土がややあらい粗製の椀（1～5）が多い。杯6は口径17.0cm、器高 5.8cmを測る大形品である。鉢11は、須恵器の焼成不良品である。ロクロで水挽き成形され、体部にはカキ目を施し、体部下半から底部をヘラケズリする。

窓穴住居 S B 3605出土土器は、奈良時代中期・8世紀中頃に比定し得る。土師器杯は、口径23cm、器高 5.2cmの大形のもの（16）と口径13cm～16cm、器高 3cm前後の小形のもの（12～15）がある。大形の杯は口縁端部を丸く肥厚させ、内側に段をつくるものが多いが、小形のものは、肥厚せず細く、丸く終わるものが多い。土師器皿（17・18）は口径20cm～21cm、器高 2.0cm～2.9cmで器壁は全体的に厚く、口縁端部を丸く肥厚させるものが多い。器面の調整は、杯・皿とも口縁部をヨコナデし底部をヘラケズリする b 手法が主流である。土師器杯蓋19は口径18cmで天井部をていねいにヘラミガキしている。長甕26は煙道に使用したもの、長甕25はカマド焚き口部の壁面として再利用したものである。

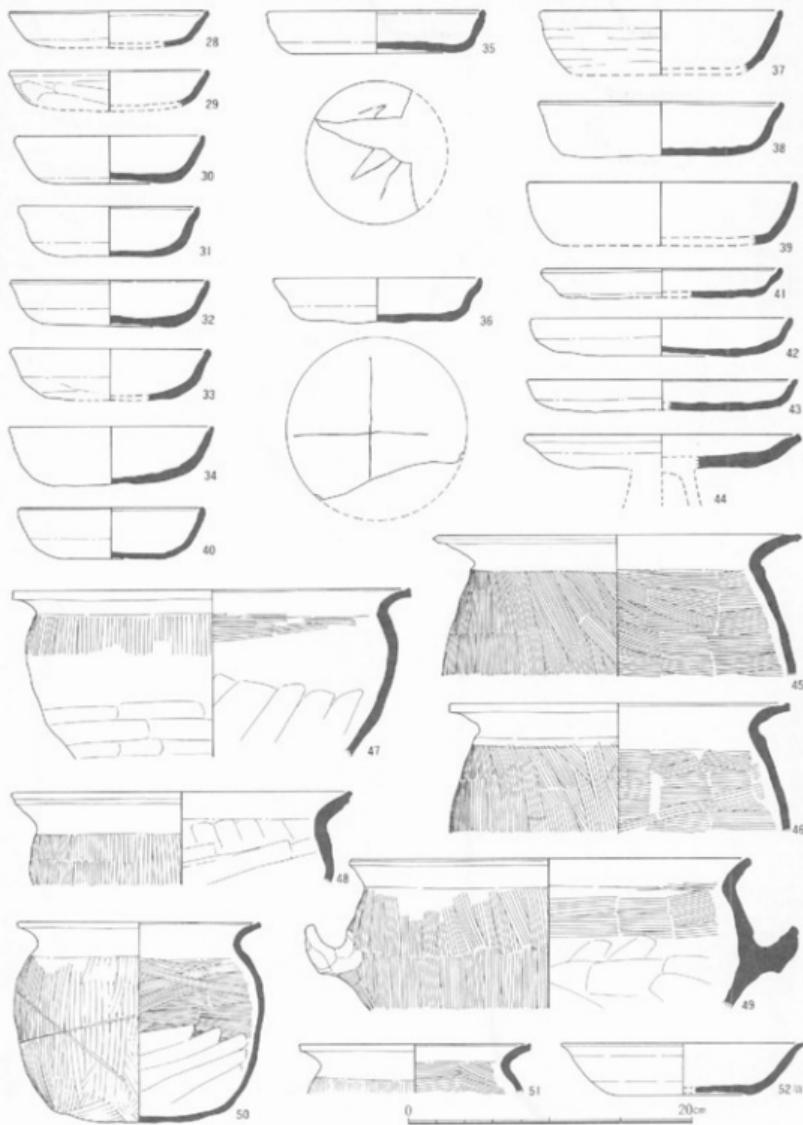
S B 3590出土土器は、斎宮跡土師器編年の標式遺構である S K 1291に相当し、奈良時代後期、8世紀後半頃と考えられる。土師器杯は口径13cm～15cmのもの（28～36）と口径17cm～19cmのもの（37～39）があり、杯31・36・38のように口縁部が外反し、端部がやや内湾する平安時代



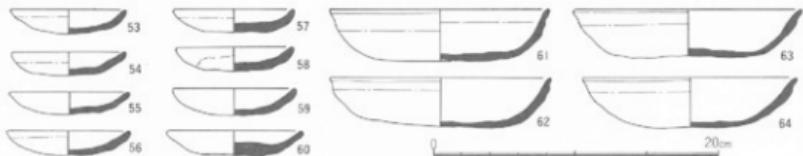
第13図 第56次出土遺物 S B 3644 ; 1～11



第14図 第56次出土遺物 S.B.3605 ; 12~27



第15図 第56次出土遺物 S B 3590 ; 28~52



第16図 第56次出土遺物 S K 3665 ; 53~64

に主流を占めるタイプの杯も若干認められる。器面の調整はほとんどが b 手法であるが、杯29・37のように口縁端部近くまでヘラケズリするものや、口縁部を横なでし、底部をなでつける e 手法のものも少量認められる。杯36には「+」、杯35にはジグザグ模様のヘラ記号が底部外面に記される。皿は口径17cm~19cmで前代のものに比べやや小ぶりとなる。器面の調整は b 手法で、皿41のように口縁部が外反し、端部が内弯するものも見られる。粗製碗40は口径12.2cm 器高 3.4cmを測り、底部が比較的平坦で、以前のものに比べ底径が大きい。甌は、胴の長いもの(45・46)、口径に対し器高の低い鍋形のもの(47~49)、小形で体部が球形に近いもの(50・51)の3者がある。須恵器は非常に少なく、実測し得たのは1点のみである。杯52の底部はヘラ切りのままで調整を行っていないようである。

平安時代末期の土器はこれらに次いで多く、土塙や、掘立柱建物が検出された調査区南部の遺物包含層から土師器皿・小皿、ロクロ製土師器小皿、藤澤編年のII段階第4型式の山茶碗や小皿などが出土している。土塙 S K 3665出土の土器は、土塙墓に伴う副葬品とも考えられる。口径 8.5cm 前後の土師器小皿(53~59)、口径15cm 前後の皿(61~64)、口径 9.4cm のロクロ製小皿(60)と2個体分の山茶碗底部片がある。ロクロ製でない皿は白っぽい色調で、胎土に比較的砂粒を多く含み、器壁はやや厚手である。12世紀中頃に比定している S D 3052出土土師器に相当するものと思われる。

このほか平安時代中期の土器も少量出土しているが、その数は微々たるものである。また平安時代前期~中期の遺構が皆無に等しいということから、綠釉陶器は小片がわずか2点出土しているのみで、灰釉陶器の量も少ない。特殊なものでは、調査区南西部の遺物包含層から淡い青灰色をした石製丸柄が1点出土している。

#### (IX) まとめ

当初の予想通り、当地区は奈良時代と平安時代後・末期の遺構が主体を占めることが確認された。

奈良時代の遺構では、竪穴住居、掘立柱建物、土塙が数多く検出された。竪穴住居は奈良時代前期を遡るものから奈良時代後期に至る各期のものが認められ、今回の調査で期を追うごと

に規模が縮小する傾向が把握できた。そして奈良時代後期では、竪穴住居は S B 3590を残すのみとなり、ほとんどの建物が掘立柱建物である。東裏地区南部で実施した齋宮小学校関連の事前調査や古道沿いの第50次調査でも奈良時代前・中期は竪穴住居が主体的で、掘立柱建物は後・末期に出現しているところから、この頃東裏地区では竪穴住居から掘立柱建物へ移行したものと思われる。掘立柱建物は 3間×2間の小規模な南北棟建物が多く、各建物間の配置に計画性が明確に認められないところから、こうした建物は、竪穴住居と同様、官衙に組みこまれた建物とは考え難く、齋宮寮に携わる雜役人達の住居ではないかと考えられる。

平安時代後・末期の遺構では、掘立柱建物、土塁、井戸が検出された。掘立柱建物のうち後II期に位置付けた S B 3639は、3面廻付建物と考えられるものであるが、宮城北東部西前沖地区で実施した第37-4次調査で検出した末期の3面廻付建物には、南東隅に土塁を伴っており、土塁を伴わないものが先行するようである。こうした建物がやがて12世紀代の中頃以降すべての柱通りに柱をもつ総柱建物へと変化していったものと思われる。

掘立柱建物の柱通りの方向は、第50次調査や第27次調査では地割りが奈良時代の溝 S D 170やこれに沿う鎌倉時代の古道の方向に規制されたものか、北に対し東へ偏る建物が多いのに対し、当調査区では奈良時代、平安時代の掘立柱建物とも北に対し西へ偏る建物が多く、地割りの規制あるいは意識が当調査区までは及ばなかったものと思われる。

## V 第 57 次 調査

### 6 A G F - H · I (東加座地区)

広域圏道路より東側の通称中町地区と呼んでいる第2種保存地区は、昭和64年3月31日までにその保存の方向付けを明確化することになっている。当調査事務所ではこれに対応するため、特にこの地区的調査に重点を置いており、本年度も既に第1回目の計画調査として第54次調査を当地区北西部の西前沖地区で実施し、平安時代前期の掘立柱建物のほか、平安時代末期～鎌倉時代の総柱建物や溝を多数検出している。またこれまでの調査から中町地区一帯には、一辺120m前後の間隔を置いて区画溝が碁盤目状に走ることが次第に明らかになってきている。そこで今回は、これまでに面的な調査の及んでいない区画の中で東から第2列目の最も北の区画を調査対象とし、第35次調査で確認されている区画溝 S D 1935の北側延長部分の確認と、この溝の西側にあたる区画内の遺構状況を把握することをおもな調査目的とした。

調査の結果、西側の6 A G F - H 区は、近代の畑作に伴うものか、幅25cm、深さ40cmの小溝がほぼ一定の間隔で東西に何条も掘られ、また南北方向にもこれより新しく、浅い溝が調査区東部で検出されたが、幸い遺構への影響は少なく、奈良時代末期から平安時代前期にかけての掘立柱建物、土塙、溝などを多数検出したほか、東側の6 A G F - I 区では予想通り、奈良時代末期から平安時代末期に至る数条の区画溝を検出した。

#### ( I ) 奈良時代後期の遺構

調査区北西隅の掘立柱建物 S B 3671、調査区南部の土塙 S K 3707・S K 3708、溝 S D 3687がある。

掘立柱建物 S B 3671は梁行、桁行とも調査区外へ延び、全体の規模は不明であるが南北棟建物と考えられる。柱掘形は一辺70cm前後で掘形の形状は不揃いである。

土塙 S K 3707は2.6m×2.1m、深さ15cmの隅丸方形土塙。このすぐ南にある S K 3708は径3.2m、深さ25cmの円形土塙である。出土遺物は、いずれも土師器杯・皿・甕・把手付壺、須恵器杯・杯蓋・甕等が少量出土したにとどまる。

溝 S D 3687は、幅50cm～70cm、深さ10cmでは半周ほど円形に巡る溝である。本米、溝が一周する内径9mの円形周溝と考えられるが、北半分の溝の掘形が浅かったため、遺構面では検出できなかったものと思われる。出土土器は、少量で細片のため、時期は決め難いが、重複する奈良時代末期～平安時代初期の掘立柱建物や土塙より古く、一応この時期のものと考えた。

#### ( II ) 奈良時代末期～平安時代初期の遺構

この時期の遺構が最も多く、掘立柱建物13、竪穴住居1、土塙28、溝4がある。

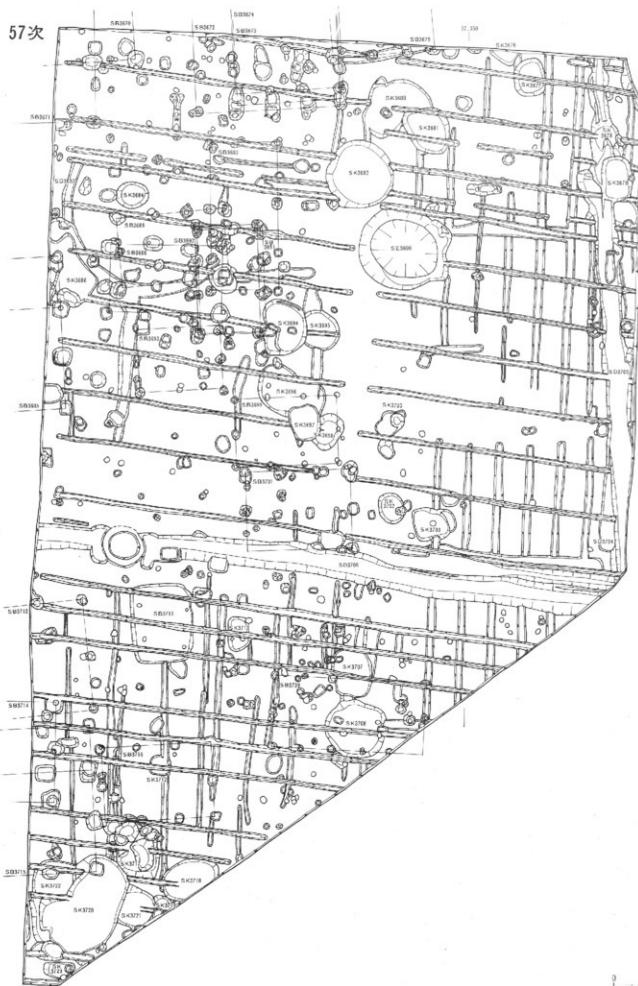
掘立柱建物は、そのほとんどが調査区西寄りで検出されている。これは、建物が区画溝から10数m離れて建てられるというこれまでの調査例と照合するためと考えられる。時期的には、猿投塚編年の折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式に相当する時期のものであるが、この間の土師器の編年が今一つ、明瞭でないため、掘立柱建物を各小期に細分することは避けた。しかし、掘立柱建物のうち、柱掘形内の土師器杯・皿の形態のみで判断すれば北部のSB3672・SB3688・SB3689、南部のSB3714・SB3716は次の平安時代前I期に近い時期に位置付けられそうである。掘立柱建物の柱通りの方向は北に対し西へ3°～4°偏る建物が13棟中8棟を数え、区画溝による中町地区一帯の地割りの方向によく一致し、殿舎の造営が計画的であったことが窺われる。特に柱掘形が90cm～100cmで方形を呈する北西隅のSB3670、東妻柱通りを揃え、北と南に位置する北面廂付東西棟建物SB3685・SB3715はいずれも西の調査区外へ延び全体の規模は不明であるが、当区画内における官衙を構成する主要な殿舎に相当するものと考えられる。その他の建物は柱掘形が一回り小さく、柱間も6尺前後で3間×2間の小規模な建物が主体的であるところから、これらの建物は、前記の建物に対する付属的な建物と思われる。なお柱掘形の切り合ひから新旧関係の明らかなものでは、SB3691→SB3692、SB3688→SB3689の順を確認している。SB3691・SB3692はほぼ同一場所における建て替え関係とみられる。SB3688は柱掘形の大きさ、柱通りが不揃いで、妻柱の位置も中心をややはすれており、柱掘形の大きさの割に柱痕跡は20cm前後と小さい。

堅穴住居SB3711は、南北4.3m、東西3.3mの長方形プランを呈する。カマドではなく、四隅で小さな柱穴を検出したが不揃いで主柱穴とは考えられない。出土遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋等でごく少量出土しているに過ぎない。長軸方向は、N4°Wでこの時期の掘立柱建物の柱通りの方向に合致している。

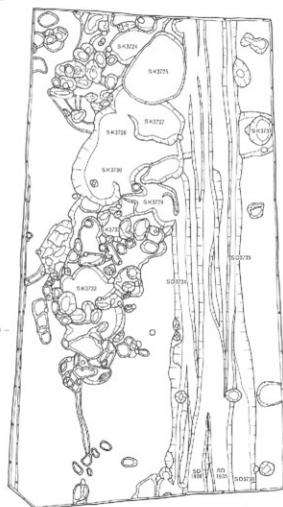
土塙は、掘立柱建物の周辺で大小様々なものが多数検出された。特に調査区南西部の土塙SK3718～SK3723および東部の土塙SK3724・SK3726～SK3733は、そのほとんどが互いに切り合って土塙群を形成しており、土器をはじめとする生活廃棄物の捨て場が一定の場所に限定されていたものと思われる。切り合ひ関係の明らかなものでは、SK3721→SK3719→SK3718、SK3721→SK3720、SK3728→SK3730、SK3695→SK3694の順を確認している。土塙の形状は円形、楕円形、不整円形があり、SK3712のように径1.1mの小さなものから、SK3720のように径5.6m×3.2mの大形のものまである。

また土塙のなかには、SK3726のように小穴の集合体から成るものもある。それぞれの小穴からは土師器の繊片が少量出土しているのみである。こうした土塙は、西前沖地区で実施した第37～4次調査のSK2413、東加座地区で実施した第40次調査のSK2310などに類例が求められるが、その性格については不明である。このほか、この時期の土塙にSK3676～SK3679・

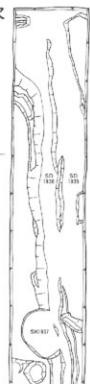
57次



A small circular logo or icon, possibly representing a compass or a specific brand symbol.



35次



第17図 第57次遺構実測図（1:200）



S K 3681・S K 3682・S K 3684・S K 3686・S K 3696・S K 3725がある。なお、以上の土壙のうち、調査区東部のS K 3731、北部のS K 3677・S K 3681などは、時期的に平安時代前I期に近いと考えられるものである。

出土遺物は、各土壙とも土師器杯・皿・甕のほか、少量の製塙土器、須恵器杯・蓋・甕を伴うものが多い。

溝は調査区東部に集中しており、所謂、從来から区画溝と呼ばれてきたものである。このうちS D 1935は第35次トレンチ調査で検出した溝の北側延長部分に相当し、平安時代末期の溝S D 1936に大部分が切られ溝の底部分しか検出できなかつたが、切り合ひ関係や出土土器から判断して最初に掘られた溝と考えられ、溝の埋没年代は、奈良時代末期あるいはこれを遡るものと思われる。遺構面で幅1.2mを測るが、元は逆台形状を呈する整然とした溝であったものと思われる。溝方向はN4°Wを示し、今回検出の多くの掘立柱建物の柱通りの方向と同じである。この溝の東側には、これより浅い溝S D 3736があり、第35次調査の報告で、S D 1935の東半は浅い段状を呈すると記されたものがこの溝に相当するものと考えられる。今回の調査ではS D 1935とS D 3736の切り合う部分が平安時代前II期の溝S D 3735により切られているため、S D 3736がS D 1935に伴う溝の段なのか、別に掘られた溝かは結論が出なかつた。6AGF-H区東端で検出した南北溝S D 3705は、幅1.3m、深さ40cm、溝方向N4°Wを示し、出土土器から少なくとも奈良時代後期まで遡ると考えられる溝であるが、仮りにこの溝と規模、形状、溝方向ともよく似ているS D 1935とが同時期に存在していたとすれば、建築遺構の確認されていない両溝に挟まれた部分は道路遺構とも考えられる。なおS D 3705の北側はS K 3678と重複する所で一端途切れ、すぐ南の区画で実施した第40次調査では確認されていない。S D 1935の西側の溝S D 3734は、この時期の溝の中では最も新しく平安時代前I期に近い。幅1.0m、深さ40cm、南端で2つに分かれており、あるいはもう一条別の溝が重なっている可能性もある。

### (III) 平安時代前I期の遺構

猿投窯編年の黒笹14号窯期に相当する時期の遺構をこの時期のものとした。掘立柱建物2、土壙5がある。

掘立柱建物S B 3673は3間×2間の東西棟建物で北側柱列は調査区外である。

土壙には調査区中央部のS K 3698・S K 3702・S K 3703、南西部のS K 3717、北東部のS K 3725がある。出土遺物では土師器杯・皿類が多く、S K 3703・S K 3717が整理箱で1箱分、S K 3725が2箱分の出土量があった。

### (IV) 平安時代前II期の遺構

猿投窯編年の黒笹90号窯期に相当する時期の遺構をこの時期のものとした。掘立柱建物2、土壙3、井戸1、溝1がある。

掘立柱建物S B3674、S B3701はいずれも3間×2間ではほぼ同一規模の東西棟建物である。両棟は、柱通りの方向に若干ずれがあるものの、ほぼ東西の妻柱通りが揃う。

土壇には、多量の土師器杯・皿が出土した北部の不整形土壇S K3680、径70cmと小土壇ながら大形の灰釉陰刻花文陶器鉢が出土したS K3700、前二期の中でも古い段階に相当する土器が出土しているS K3710がある。

井戸S E3690は径4.4m～4.7mで比較的大形の井戸である。井戸の壁面は遺構面から1mほど下がった所から大きく崩壊していたが、ほぼ底まで完掘することができた。井戸の深さ約4.1m、井戸底の絶対高は5.1mを測る。井戸枠や木簡等の木製品を検出することができなかったが、板切れの残片や、箸状の木製品が出土した。土器類では、井戸底近くで黒笠90号窯期の灰釉陶器碗・皿、土師器杯・皿・甕・高杯等が出土し、埋土上層では、折戸53号窯期の古い段階に相当する灰釉陶器碗、土師器杯・皿等が出土しており、平安時代前二期に廃棄され、平安時代中期の前半には、ほとんど埋没したものと考えられる。

調査区東端で検出した南北溝S D3735は、幅70cm、深さ45cmで、この時期の区画溝として機能していたものと思われる。

#### (V) 平安時代中期の遺構

平安時代前二期より新しく、S E2000（東山72号窯式相当）より古い時期のものをこの時期の遺構とした。

検出し得たのは掘立柱建物S B3699、S B3709の2棟のみである。柱掘形は30cm～40cmと小さく、両者の柱通りの方向も大きく異なる。

#### (VI) 平安時代末期の遺構

掘立柱建物や土壇はなく、溝2条のみ検出した。

6AGF-H区の東端で検出した南北溝S D3704は幅1m前後の浅い溝で、全長10.8mを測る。遺物はほとんど出土していないがこの時期のものとした。

溝S D1936は奈良時代末期～平安時代前期の区画溝を切り、これらとほとんど重複する。幅2.6m、深さ40cmで、溝の法面の傾斜は緩やかである。溝以外同時期の遺構が認められないところから、S D1936は官衙を区画する溝とは考え難く、むしろ区画の意識がこの時期まで何らかの形で残ってきたものとみられる。

#### (VII) 鎌倉時代の遺構

東西溝S D3706のみを検出した。幅1.4m、深さ30cm～50cmで、溝底のレベルは西で高く、東で低く、第35次トレンチ調査区の北端部をかすめ、さらに東へ延びるものと思われる。溝の方向は、概ねE7° Sを示しており、この時点で完全に從来からの地割りの方向性が失われてしまつたものと思われる。

### (VIII) 遺物

奈良時代後期から鎌倉時代に至る各時期の遺物が平箱で約110箱ほど出土している。とりわけ奈良時代末期～平安時代前期の遺構が集中しているので、この時期のものが大半を占める。以下、比較的まとまった土器が出土している遺構を取りあげ、時期別に略述することにする。

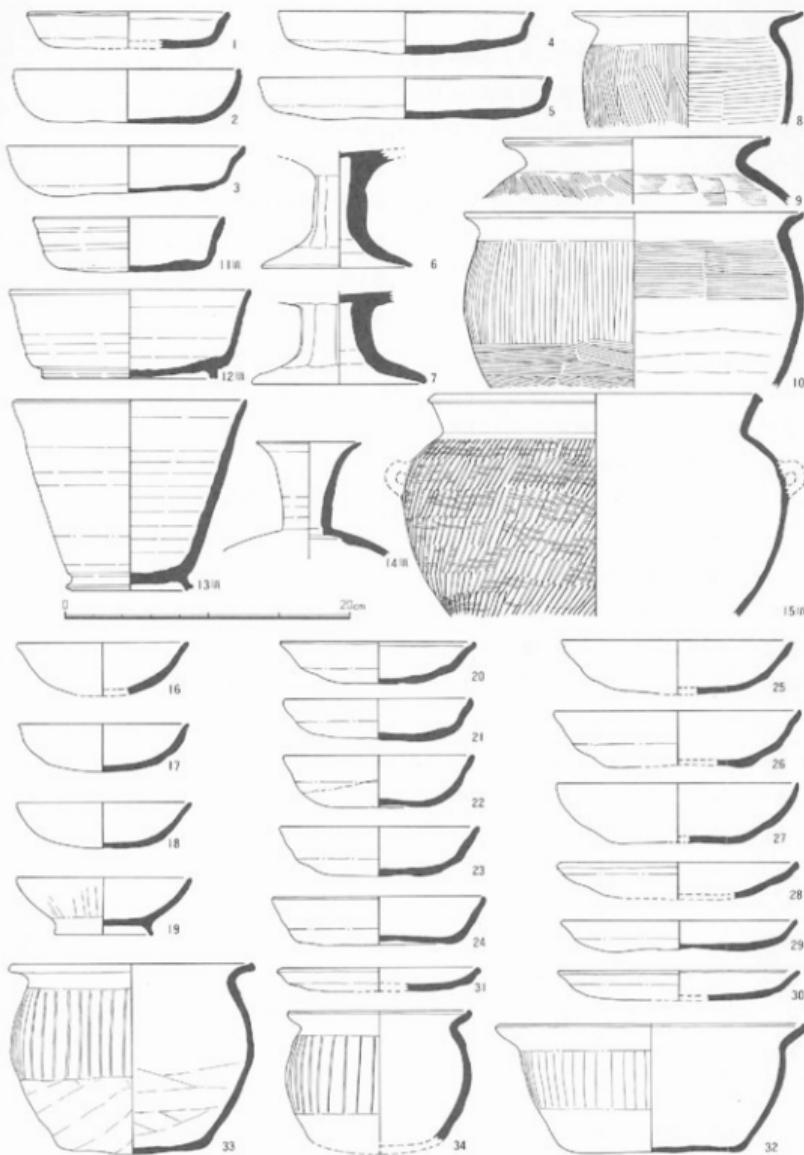
S D3705出土の土器には、土師器杯・皿・甕・高杯・須恵器杯・環状把手付甕・壺等がある。土師器の器面の保存状態は全体的に悪く、調整の不明瞭なものがあるが、杯・皿とも口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするb手法と思われる。これらはその形態や法量から、概ね南宮跡土師器編年の奈良時代後期の式樣遺構であるS K1291出土土器に相当するものと考えられるが、須恵器杯(11・12)の底部はヘラ切りのあとなどでおり、三段構成で口頭部を接合する壺(14)は、口縁端部に面をつくっていない点など、より古い要素を含んでいる。

S K3720・S K3730出土土器は、共伴する須恵器が猿投窯の折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式の範囲で把握でき、土師器杯・皿の形態は第34次調査のS K1445出土土器に相当する。従って奈良時代末期～平安時代初期に位置付けられよう。

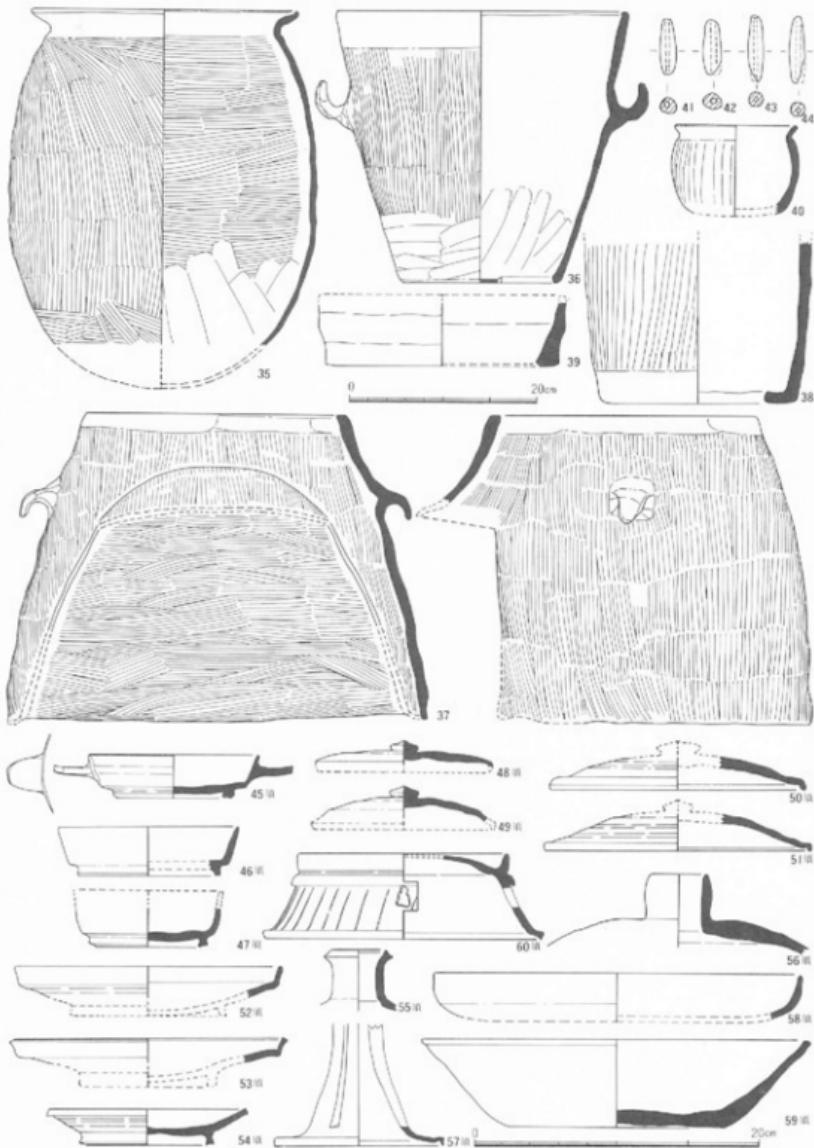
S K3720出土土器は、全体に器面の保存状態が悪いが、多くの器種が揃っており、主なものは土師器杯・皿・甕・鉢・櫃・カマド・ミニチュア製・須恵器杯・杯蓋・高盤・皿・壺・鉢・円面硯・製塙土器、土錘などがある。土師器杯には、口径12cm前後のもの(16～18)、13cm～14cmのもの(20～24)、16cm～17cmのもの(25～27)があり、およそ大中小の3つに分かれる。大形の杯、小形の杯は比較的器高が低く、口縁部は緩やかに内弯しながら立ち上がるが、中形の杯には、器高が低く、口縁部が外反し、さらに口縁端部がやや内弯するもの(20・21・23)が多く見られる。杯(19)は小形の杯に高台が付くものである。土師器皿には、口径17cm前後のもの(28～30)と14cm前後のもの(31)がある。底部が平坦で口縁部が外反するものと、底部は緩やかな弧を描き、口縁部の屈曲が弱く、口縁端部外側のヨコナデの範囲が狭いもの(28)がある。器面の調整は杯・皿とも、口縁部をヨコナデし、底部は指先でなでつけ、器面がでこぼこしている。

須恵器は非常に出土量が少なく、完形品が1点もない。把手の付く杯(45)、壺(56)、鉢(59)は南宮ではかつて例を見ないものである。焼成不良品である鉢(59)は、胎土が白く、底部下面には木の葉の圧痕が認められた。円面硯(60)は、約半分ほど残存している。陸部と海部の境は明瞭でなく、硯面部は緩やかな弧状をなす。脚部には、不整形な透孔が4ヶ所にあり、縦位のヘラ描き沈線が巡る。

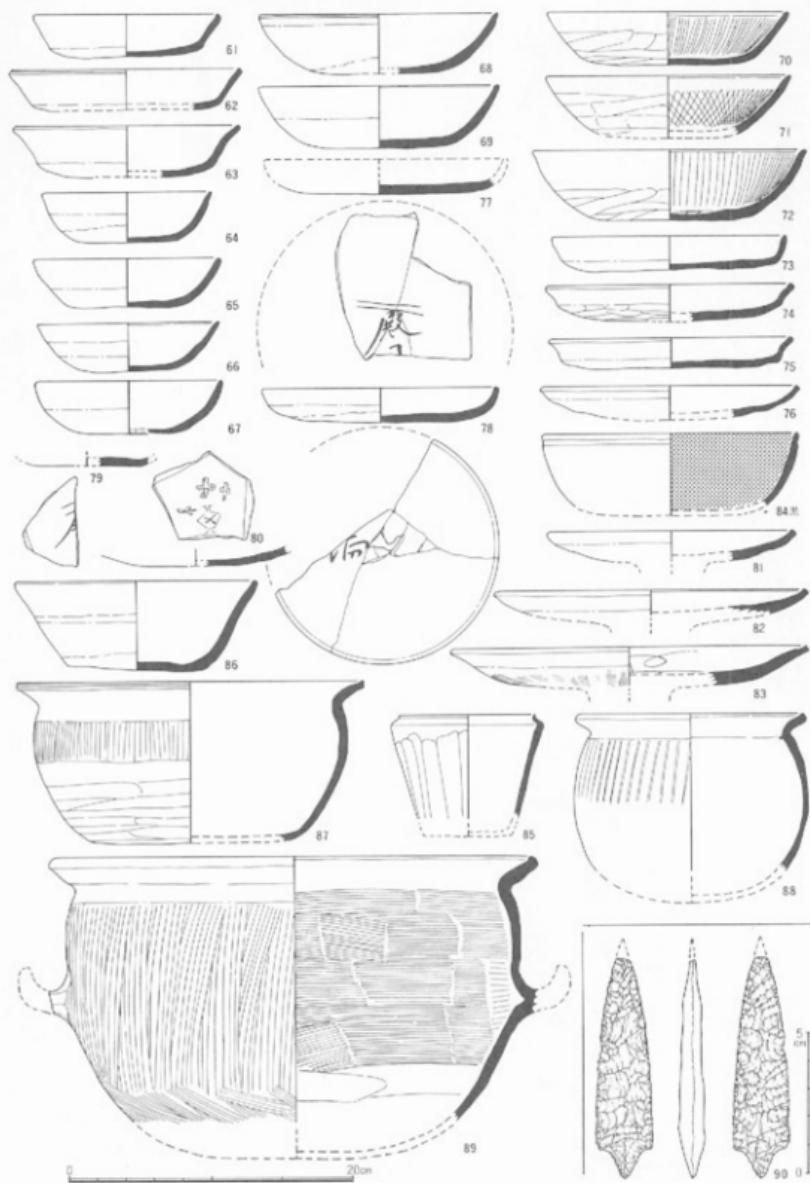
S K3730出土土器には、土師器杯・皿・甕・高杯・鉢・壺・黑色土器椀・須恵器杯・杯蓋・皿・高盤・甕などがある。ほかに釘と思われる鉄製品1点、有舌尖頭器1点が出土している。有舌尖頭器(90)は先端部を欠くが、ほぼ原形をとどめている。現存長7.8cm、最大幅2.0cm



第18図 第57次出土遺物 S D 3705; 1~15、S K 3720; 16~34 (15のみ 1 : 6)



第19図 第57次出土遺物 SK 3720; 35~60 (35・36・37のみ 1 : 6)



第20図 第57次出土遺物 SK 3730; 61~90 (90のみ 1 : 2)

で、両面ともいねいに押圧剥離される。石材はチャート製。櫛田川下流域に位置する斎宮跡での発見はもちろん、こうした下流域での発見例は珍しく、いかなる理由でSK3730に混入したのか現時点では不明である。

土師器杯はSK3720出土のものと同様、大中小の3種類の杯が見られるが、口径17cmを超える大形品の中には口縁端部近くまでヘラケズリし、内面には放射状暗文や格子目暗文、底部に螺旋暗文を施すもの(70~72)があり、また土師器皿は口径16cm~17cmのものが多く、SK3720と同様の2種類の皿のほか、底部が平坦で口縁部がやや内湾しながら立ち上がる奈良時代的な皿(73・77・78)や、数は少ないが、口縁部が外反する皿のうち底部をヘラケズリするもの(74)が見られるなどの点で、SK3730出土の土師器は、SK3720出土のものよりやや古い様相を見せている。

墨書き器は4点確認された。皿(77)の底部外面には、2本線のヘラ記号の下に「殿司」と書かれており、杯(79)の文字も「殿」であろう。このほか皿と考えられる(80)の内面には、焼成後に陰刻された鳥や花の模様が描かれている。

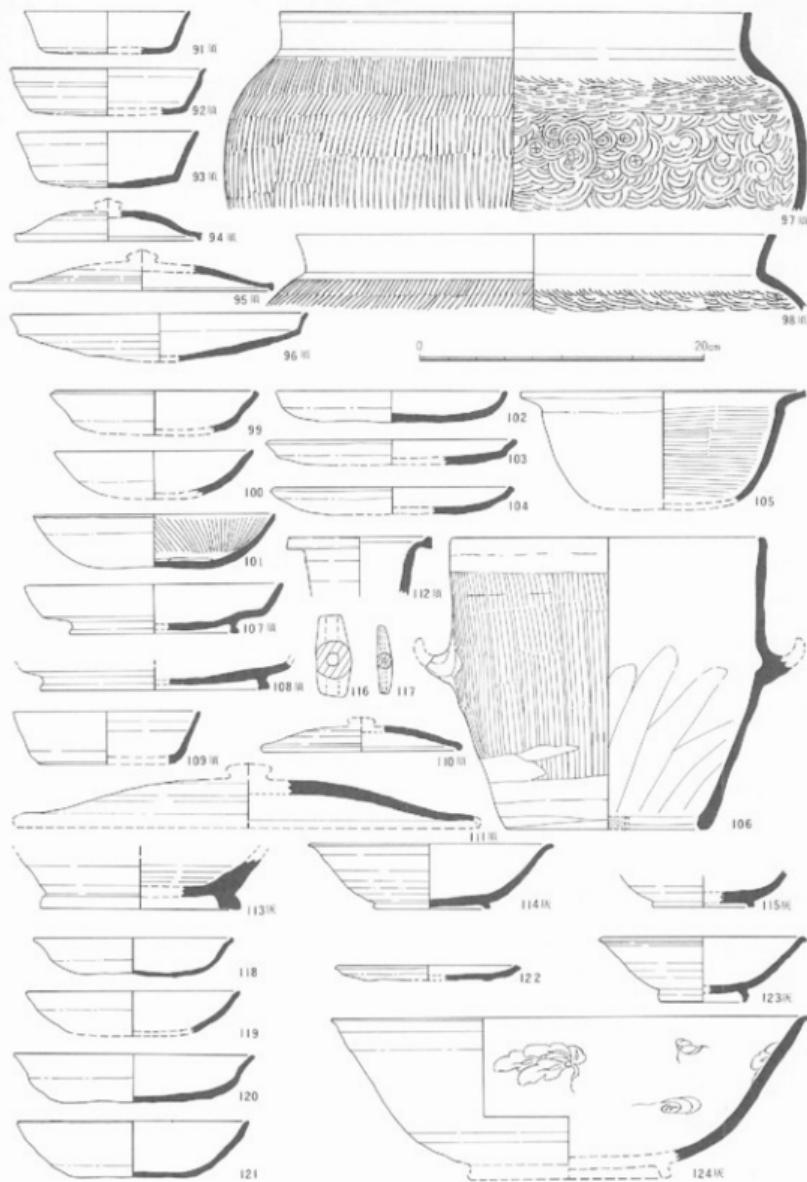
SK3725出土の土器は、黒釜14号窯式の灰釉陶器が共伴し、斎宮跡土師器編年の平安時代前Ⅰ期の標式造構であるSK1045・SK1424に相当する。土師器杯・皿の法量、形態・調整は、前代のものとはほとんど大差はない。

SK3700・SK3580出土の土器は、黒釜90号窯式の灰釉陶器を共伴し、土師器は平安時代前Ⅱ期の標式造構であるSK2650に相当する。

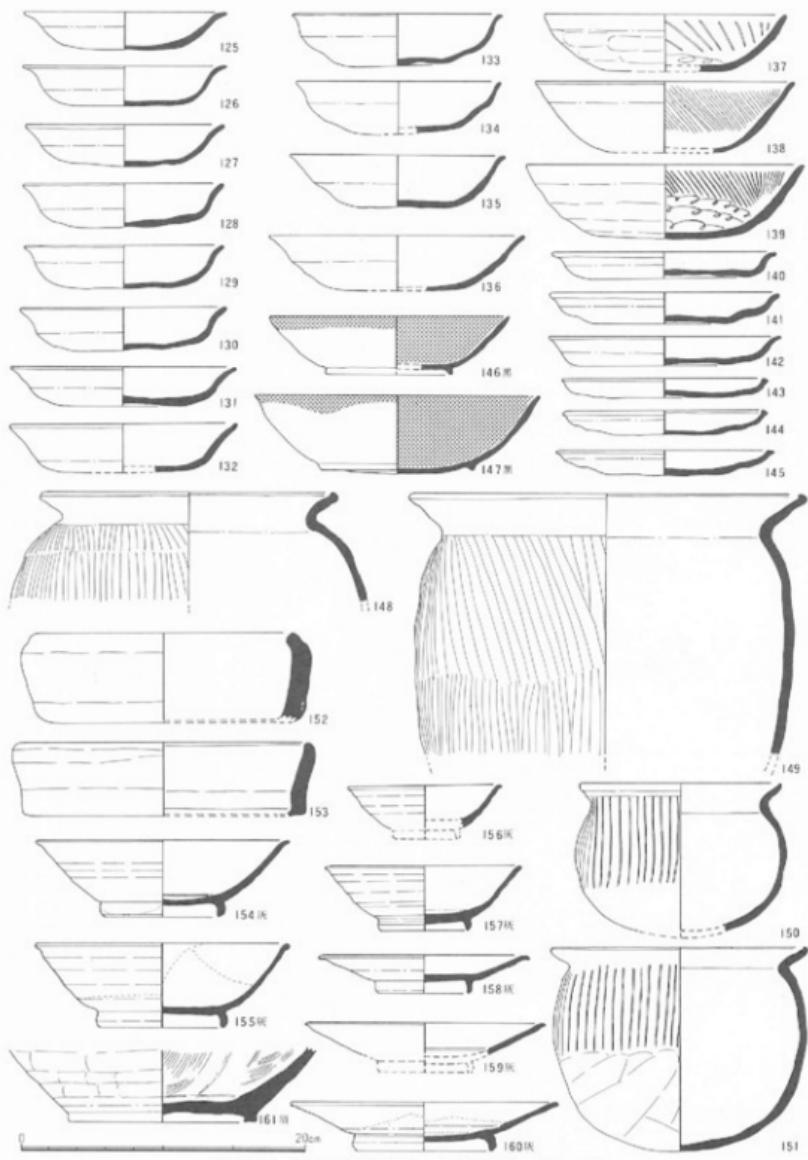
SK3680出土の土師器杯には、器高3cm前後で、口縁部がつよく外反するもの(125~132)と、これより器高が高く、口縁部の外反が弱いもの(133~136)があり、前者には口径14cm前後と16cm前後のもの、後者には口径15cm前後のものと17cmを超える大形のものがある。大形の杯には、内面に暗文を施すもの(137~139)が少量見られる。土師器皿は口縁部が外反するもの(140~142)が口径16cm前後で、前代のSK3720・SK3725に比べ法量が縮小傾向にある。また杯・皿の器壁も全体的に薄くなっている。

灰釉陶器は碗・皿・段皿などがあり、体部内面のみハケ塗りするもの(156~159)、体部内外面ハケ塗りするもの(155)、体部内外面と底部見込み部分をハケ塗りするもの(154・160)がみとめられる。SK3700出土の灰釉陶器鉢(124)は、底部を欠くが、口径33.4cmの大形品である。外面のヘラケズリは、体部上半までおよび、内外面に淡黄緑色の灰釉がハケ塗りされる。内面には大小の花文と渦巻文の3つを一単位とする文様を4ヶ所に陰刻している。

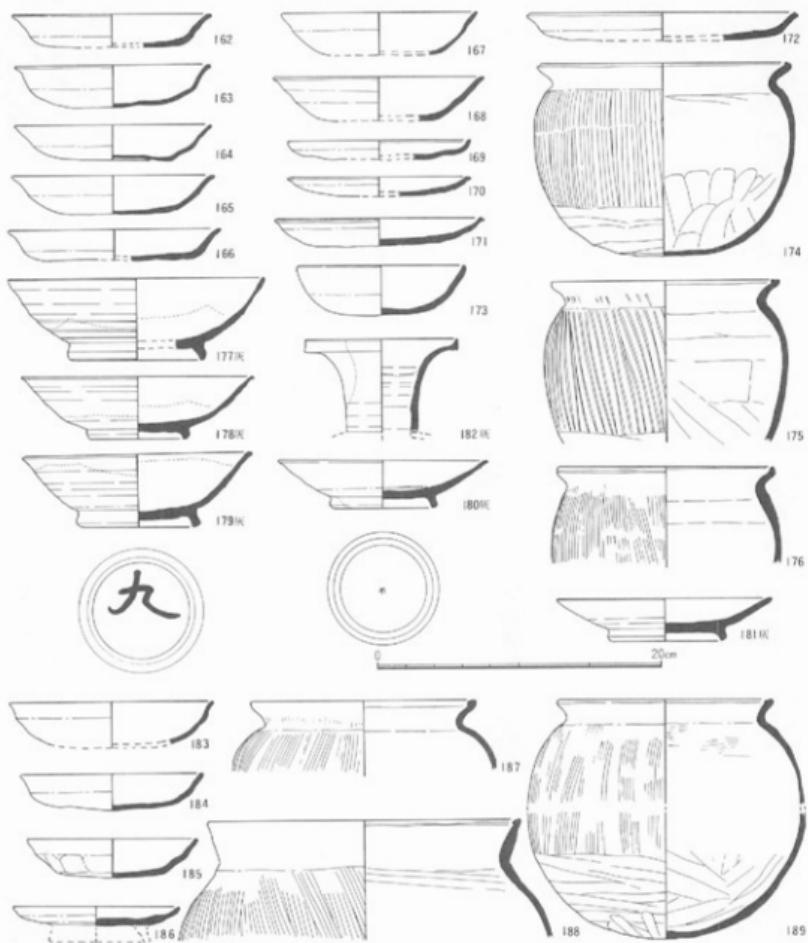
井戸SE3690出土土器は、埋土が上層、下層と明瞭に分かれていたわけではないが、埋土の上の方から出土の土器と、埋土の下の方から出土の土器とは、様子が多少異なっており、2時期に大別できそうである。



第21図 第57次出土遺物 S K 3730; 91~98、S K 3725; 99~117、S K 3700; 118~124  
(97・98のみ 1 : 6)



第22図 第57次出土遺物 S K 3680; 125~161



第23図 第57次出土遺物 S E 3690下層；162～182、上層；183～189

下層出土の土師器杯・皿は前II期のものに比べ法量が縮小してはいるものの、形態的にはその名残りをとどめており、甕の体部最大径は口径よりやや大きい。灰釉陶器には、体部内外面と底部見込みをハケ塗りし、底部はヘラケズリする皿(180)、ツケ掛けで底部をヘラケズリす

る椀(177・179)、ツケ掛けで底部は糸切りのままの椀(178)、無釉の皿(181)などがある。椀(179)の底部下面には「九」という墨書、皿(180)には、「不」という小さなヘラ書きが見られる。

一方、上層出土の土師器杯は、下層のものより法量が小さくて口縁部のヨコナデの範囲も狭く、形態的にはむしろ後Ⅰ期の標式遺構であるS E 2000出土の杯に近い。蓋の体部最大径は口径を大きくまさり、体部は球形に近い。また体部外面のハケ目は間隔を置いて施されるもの(189)もある。

以上の点でS E 3690下層出土の土器は、黒竜90号窯式の新しい段階から折戸53号窯式の古い段階にかけての過渡的な段階に位置付けられ、上層出土の土器は、これより新しく、S E 2000出土の土器よりは古いと考えられる。

このほか、当調査区からは、縁輪陶器15点、ふいご羽口4点、須恵器杯の転用碗1点、円面硯脚部片1点などが出土している。

#### (IX)まとめ

今回の調査では、溝の集中する箇所及びその近辺を調査対象としたため、掘立柱建物の検出は20棟あまりである。建物の時期は大半が奈良時代末期～平安時代初期のものに限られ、平安時代前期～中期の建物はわずかに5棟検出し得たのみである。建物の規模は3間×2間の小規模な東西棟建物が多く、その多くは1つの区画内における中心的な官衙の建物に対する付属的な建物と思われる。ただ調査区西端部で検出した大形の柱掘形をもつS B 3685、S B 3715は、調査区外へ延び全体の規模は不明であるが、官衙を構成する主要な建物として位置付けられよう。掘立柱建物の柱通りの方向は北で西へ3°～4°偏るものが多く、区画溝の方向とよく揃い、殿舎の造営が溝と共に計画的であったことが窺われる。

一方、区画溝は予想された場所で、奈良時代末期から平安時代末期に至る間に少なくとも5回掘り直されていることを確認した。平安時代中期～後期の溝を遺構として明確にし得なかつたが、間断なく溝は存続していたものと思われる。しかし平安時代末期の溝S D 1936に至っては、官衙を区画する区画溝としての機能をもった溝とは考え難く、むしろ建物がないのにこの時期まで溝のみが地割りの溝として残っていたということが注目される。区画溝の1つS D 1935は、この溝の西側を一定の間隔で並走するS D 3705と規模・方向・形状が似ているところから、これらを東西の側溝と考えるならば、道幅13mと、斎宮の中ではかなり幅の広い道路遺構が想定できる。なお西側溝S D 3705が埋没後は、東側の溝だけが平安時代を通じ区画溝として生き、一時、平安時代初期に道路部分にもいくつか土塙が掘られ、道路としての機能を果たしていたか否か定かではないが、平安時代前期以降、この部分は建物の空白地帯となっているので、道路であった可能性が強いと考えられる。

遺物では、特に注目されるものにSK3730出土の「殿司」と墨書きされた土器がある。これまでに斎宮寮官制にみえる主神司以下13司の存在を裏付け、あるいはその場所を比定し得る資料として第37—4次調査（西前沖地区）で出土の「水司鶴□」へラ描き土器、第34次調査（西加座地区）で出土の「寮□」、第46次調査（鐵治山地区）出土の「膳」などがあったが、今回の発見はこれらに継ぐものであり、奈良時代末期～平安時代初期の殿司の場所を本調査区（本区画）に比定する際、有力な資料となろう。また出土遺物の中で土師器杯・皿類が多く、甕類が少ない点、円面鏡、転用鏡などの鏡類が見られる点などからも、当地区を官衙地区として位置付けられよう。

以上のように調査次数を重ねることに中町地区の実態が次第に明らかになってきている。そして今回の調査により、從来宮城西部にあった奈良時代の斎宮が平安時代になり、宮城中・東部へ移動したという考え方より明確になり、しかもそれは奈良時代末期まで遡ることが明らかとなってきた。また今回検出した大半の握立柱建物は時期的にみて、多氣の斎宮を度会の離宮に移す（類聚国史 824年）以前の建物とみられ、斎宮が再び多氣にもどされた時点（続日本後紀 839年）では、当調査区では官衙としての明確な遺構は少なく、その中心は、平安時代全期間を通じ、遺構が間断なく存続する宮城中央部の御館・柳原地区や西加座地区西部に移り、むしろ当地区はその周辺部に相当していたのではないかと思われる。今後各区画ごとに対比しながら検討を加えてゆきたいと考えている。

## VII 第53次調査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

### 第53-1次調査 6 ACM-P (体育館新設)

斎宮小学校体育館新設にあたり、1250m<sup>2</sup>の面的調査を実施した。検出した遺構には、奈良時代の竪穴住居7 (S B3770-S B3776)、土塙5 (S K3787-S K3789-S K3792)、溝1 (S D3788)と平安時代前期の土塙2 (S K3781-S K3786)、後期の溝2 (S D3782-S D3783)、末期の掘立柱建物2 (S B3778-S B3779)、土塙3 (S K3777-S K3780-S K3785)、溝1 (S D3784)がある。S B3778は南東隅に土塙S K3777を伴う4間×4間の純柱建物で、L字形に曲がるS D3784はこれを区画する溝と考えられる。このほか、室町時代の遺構として南北溝S D3369-S D3372-S D3375がある。奈良時代の遺物は、土師器杯・皿・甕・瓶がほとんどで、わずかに須恵器杯・蓋等がある。平安時代の遺物は末期のものが多く、土師器皿・小皿・甕・山茶椀等がある。

### 第53-2次調査 6 ACA-M (中西宅地)

宮城北部の坂本集落南部の畠地で、112m<sup>2</sup>にわたり調査を実施した。検出した遺構は、奈良時代に限られ、前期の竪穴住居2 (S B3809-S B3810)、後期の掘立柱建物3 (S B3811-S B3813)、土塙1 (S K3815)、溝1 (S D3814)がある。S B3811-S B3812は南に廂をもち、S B3811-S B3813は柱通りの方向を描え、ほぼ方位にのる建物である。すぐ近くで実施した第43-1次調査で出土の「美濃」刻印須恵器と共に、奈良時代斎宮の存在を考えるうえで貴重な調査成果があった。遺物は、奈良時代土師器、須恵器のほか、遺物包含層からは飛鳥時代の須恵器杯蓋も出土している。

### 第53-3次調査 6 ABE (永納宅地)

坂本集落南部の県道に面する西側の畠地で、東西16m、南北11mの調査区を設定し、180m<sup>2</sup>にわたり調査を実施した。検出した遺構には、奈良時代後期の土塙S K3818-S K3819と鎌倉時代前期～中期の東西溝S D3816-S D3817を検出し得たのみである。奈良時代の土塙からは土師器杯・甕・瓶など、鎌倉時代の溝からは土師器甕・皿・小皿・三足鍋脚部・山茶椀・片口鉢などが少量出土している。

### 第53-4次調査 6 ACL-S (田所収納小屋)

斎宮小学校の南西部にあたる畠地で、東西10m×南北7mの調査区を設定し、70m<sup>2</sup>にわたり調査をした。検出した遺構は、奈良時代の土塙S K3822と平安時代末期の溝S D3823のみである。出土遺物は、奈良時代の土師器杯・甕・須恵器杯、平安時代の土師器杯・灰釉陶器、近世

陶磁などがあるが、いずれも少量である。なお、特殊なものに土馬頭部片が出土している。

#### 第53-5次調査 6 A C R (田中倉庫)

宮城南端部、牛葉墓地の北側で、東西 5.5m × 南北 5 m の範囲で調査を実施した。遺構・遺物とも少なく、わずかに調査区北西隅で柱掘形と考えられる小穴を 1 つ検出し得たのみである。

#### 第53-6次調査 6 A G O (町道側溝)

宮城東部の通称役場道と呼ばれている町道側溝新設個所に、幅 1.2m、長さ 117m、深さ 60 cm をあらかじめ重機で排土した後、部分的に遺構面を確かめた。その結果、掘削面から旧地表まで 40cm あり、さらに遺構面までは数 10cm あるため、調査不可能と判断し、また遺構への影響は軽微と考えられたので、工事立会いにとどめた。出土遺物はない。

#### 第53-7次調査 6 A D D - U (野呂資材置場)

宮城北部、住宅の密集する篠林地区のあき地で、幅 4 m と 1 m のトレンチをコの字形に設定し、調査を実施した。調査区南西部は近世の擾乱をうけていたが、奈良時代の溝 3 (S D 3826 ~ S D 3828) を検出した。S D 3828 は幅 50cm、深さ 35cm で、ほぼ東西軸線にのる。土師器甕・皿・鍋、須恵器平瓶などの細片が出土している。

#### 第53-8次調査 6 A G E - O (上田宅地)

宮城の北東隅部分にあたり、これまでの近辺の調査から調査区北側の小道に相当する部分を、宮城北部を迂回する鎌倉時代の大溝 S D 5 が走るものと予想されてきた。調査の結果、道際でこの大溝の南肩部分と考えられる遺構を検出した。溝からは、平安時代末期から鎌倉時代にかけての土師器皿・甕・鍋、山茶椀などが出土している。

#### 第53-9次調査 6 A C S - O (浅尾倉庫)

牛葉墓地の北東、第53-5 次調査の東側にあたる畠地で、305m<sup>2</sup> にわたり面的調査を実施した。検出した溝には、奈良時代と鎌倉時代のものがあり、奈良時代では、溝 S D 3833、円形周溝 S X 3830、鎌倉時代では、溝 S D 3831、S D 3832 がある。S X 3830 は、溝幅 50cm、周溝の内径 7 m で、底は各所に 10cm ~ 20cm の凹部が認められた。土器の出土はほとんどなく、わずかに土師器杯が 1 点出土している。S D 3831 は幅 80cm、深さ 20cm ~ 35cm で、ほぼ南北に走る。溝から土師器皿、山茶椀、白磁碗、古瀬戸壺などが出土している。

#### 第53-10次調査 6 A C A - R (西川倉庫)

坂本集落南部の県道に面した東側の畠地で、東西 6 m × 南北 5.5 m の調査区を設定し、調査を実施した。検出した遺構には、奈良時代末期の土塁 S K 3835、ピット 3837、鎌倉時代の浅い溝 S D 3836 がある。ピット 3837 からは土師器長甕 1 個体分が直立した状況で出土した。

#### 第53-11次調査 6 A D R - W (西村宅地)

宮城南端部にあたる牛葉集落南部の畠地で、東西 21 m × 南北 17 m の調査区を設定し、363m<sup>2</sup>

にわたり面的調査を実施した。検出した遺構には、竪穴住居1( S B3847 )、掘立柱建物2( S B3838・S B3839 )、溝2( S D3841・S D3850 )、土塙6( S K3842～S K3844・S K3846・S K3848・S K3849 )などがある。2棟の掘立柱建物は柱掘形の規模は異なるが、南側の柱通りをほぼ揃えている。S B3838の南東隅の柱掘形からは、土師器甕が1個体直立した状態で出土した。現在の道路に並行し、建物の方向とも合う溝S D3845は、幅1.2m、深さ40cmで、埋土には平安時代前期と鎌倉時代の土器が混在している。遺物は奈良時代のものが多く、土師器杯・皿・碗・甕・鉢などがある。

#### 第53-12次調査 6 A B L - K (沢納屋曳家)

宮城西部の台地縁辺部にあたる竹川集落北部の畠地で、幅4mのトレンチをL字形に設定し、70mにわたり調査を実施した。検出した遺構は室町時代のものばかりで、土塙( S K3857 )や溝( S D3854～S D3856・S D3858・S D3859 )のみである。遺物は弥生土器2点、土師器皿の細片が少量出土したにすぎない。

#### 第53-13次調査 6 A D Q - L (辻宅地)

斎宮駅南部の畠地で、東西7.3m×南北14mにわたり調査を実施した。検出した遺構は、中・近世のものばかりで、鎌倉時代前期の掘立柱建物S B3870のほか、溝5( S D3862～S D3866 )、小穴等がある。S B3870は、全体の規模は不明であるが、すべての柱掘形内に扁平な石を根石として入れる総柱建物である。桁行柱間1.8m、梁行柱間1.7mを測る。このほか調査区北端では、南側の2ヶ所に階段状の入口をもつ防空濠の跡(東西3.8m)も見つかっている。遺物は、土師器皿・甕・鍋、天目茶碗、陶磁器などが出土している。

#### 第53-14次調査 6 A C M - O (体育庫移築)

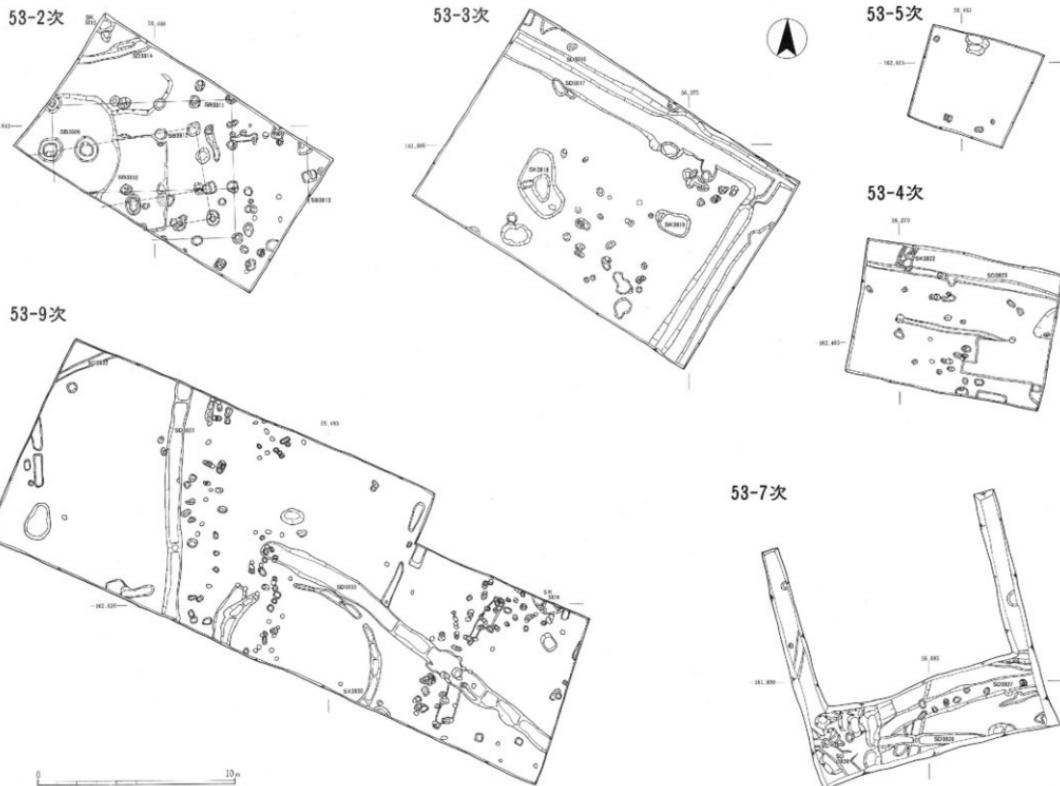
斎宮小学校の北西隅に東西8m×南北6.2mの調査区を設定し、調査を実施した。検出した遺構には、奈良時代の土塙3( S K3804・S K3807・S K3808 )、溝1( S D3802 )、平安時代末期の土塙3( S K3803・S K3805・S K3806 )、溝1( S D3801 )がある。S K3803からは、平安時代末期～鎌倉時代初期の土師器皿・小皿・山茶碗・山皿などがまとまって出土した。

#### 第53-15次調査 6 A F K - C · D (鈴木盛土)

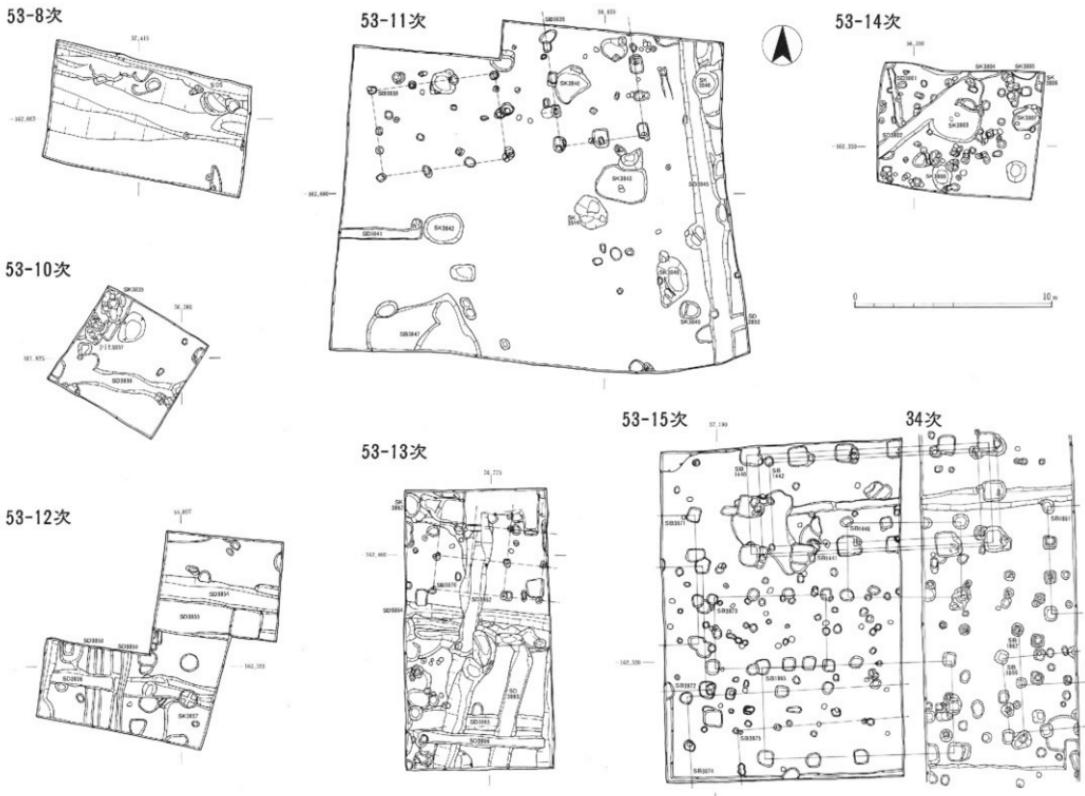
一辺1m前後の大形柱掘形をもつ掘立柱建物をはじめ、棚、土塙、溝など平安時代前期～末期に至る各時期の遺構や、多量の綠釉陶器、墨書き土器等の遺物が検出された第34次調査の西隣にあたり、本年度は申請地の東側半分を204m<sup>2</sup>にわたり調査した。検出した遺構には、第34次調査で検出している掘立柱建物5棟を含め、整然と配置された平安時代の掘立柱建物10棟を確認した。S B1865は初期、S B3871～S B3873・S B1440～S B1442・S B1446は前期、S B3874は後期、S B3875は末期の建物である。遺物では、平安時代初期～末期に至る各期の土師器杯・皿をはじめ、灰釉陶器、綠釉陶器の出土も多く、墨書き土器「萬」も確認された。



第24図 第53次造構実測図 (1:200)



第25図 第53次遺構実測図 (1:200)



第26図 第53次遺構実測図 (1:200)

## VII 調査事務所要覧

### I 調査概要

- (1) 調査事業 19地区 9,584m<sup>2</sup>
- ア 計画発掘調査 4地区
- |        |         |                     |
|--------|---------|---------------------|
| 第54次調査 | 西前沖地区   | 1,630m <sup>2</sup> |
| 第55次調査 | 御館・柳原地区 | 1,500m <sup>2</sup> |
| 第56次調査 | 東裏地区    | 1,870m <sup>2</sup> |
| 第57次調査 | 東加座地区   | 1,700m <sup>2</sup> |
- イ 緊急発掘調査(個人住宅新築等)
- |              |                     |
|--------------|---------------------|
| 第53-1次～15次調査 | 2,884m <sup>2</sup> |
|--------------|---------------------|
- (2) 普及事業
- ア 現地説明会の開催
- (ア) 第48-13次・第53-1次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和59年4月28日 午後1時30分
- 場所 明和町竹川字東裏地内
- 調査面積 2,090m<sup>2</sup>
- 調査期間 2月20日～5月9日
- 報 告 山沢義賀主査  
明和町教育委員会技術中  
野敦夫
- 参加人員 約 120名
- (イ) 第54次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和59年7月1日 10時30分
- 場所 明和町齋宮字西前沖地内
- 調査面積 1,630m<sup>2</sup>
- 調査期間 5月7日～7月31日
- 報 告 福村直人主事
- 参加人員 約 150名
- (ウ) 第56次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和59年11月3日 11時
- 場所 明和町竹川字東裏地内
- 調査面積 1,870m<sup>2</sup>
- 調査期間 9月17日～11月22日
- 報 告 倉田直純主事
- 参加人員 約 170名
- (エ) 第57次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和60年2月3日 10時30分
- 場所 明和町齋宮字東加座地内
- 調査面積 1,700m<sup>2</sup>
- 調査期間 12月17日～2月27日

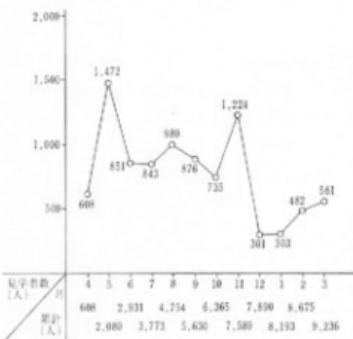
報 告 倉田直純主事

参加人員 約 200名

### イ 調査報告講演

- (ア) 6月2日 第4回中世遺跡研究集会  
谷本親次主査
- (イ) 6月26日 松阪市立中央公民館郷土史  
講座 倉田直純主事
- (ウ) 8月25日 三重県埋蔵文化財発掘調査  
報告会 倉田直純主事
- (エ) 9月7日 朝日カルチャーセンター  
山沢義賀主査
- (オ) 10月30日 津市ロータリークラブ  
佐々木宣明所長

### ウ 資料展示室見学者数



### エ その他

#### 斎宮跡講演会

- 日時 昭和59年11月3日 午後1時30分
- 場所 明和町中央公民館講堂
- 演題 「斎宮跡とまちづくり」
- 講師 三重大学助教授 北原理雄

## II 予 算

斎宮跡保存対策費 73,402千円

(単位:千円)

区分 事業名	歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	32,842	16,842	16,000	発掘面積約6,700m <sup>2</sup>
史跡公有化補助金	—	—	—	公有化面積約5.4ha
管理施設設置補助	100	100	—	
保存修復事業	500	500	—	
維持管理	2,860	2,860	—	
整備計画策定	2,200	2,200	—	
計	38,502	22,502	16,000	

## III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日)  
(教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

### 第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務（県立学校関係事務を除く。）を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。  
一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関する事務。  
二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開

展示に関する事務。

三、その他斎宮跡に関する事務。

附則（昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄）

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

## IV 職 員

職	氏 名
所長	佐々木 宣明
主査	山沢 義貴
主査	谷本 錠次
主任事務官	福村 直人
主任事務官	倉田 直純
事務補助員	森本 敦子
〃	刀根 やよい
〃	坂 真弓美
〃	豊田 敏子

## V そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

### 1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員（以下「委員」という。）を置く。

### 2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

- 当史跡の遺構の調査、検討に関する事務。
- 当史跡の遺物の調査、検討に関する事務。
- 当史跡の文献の調査、検討に関する事務。
- 当史跡の環境整備の計画、検討に関する事務。

(5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

### 3. 定数等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに關し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

### 4. 任期

任務が完了するまでの間とする。

### 5. 会議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

### 6. 庁務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

### 7. その他

この要綱に定めるもののほか、委員に關し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

### 附 則

この要項は、昭和54年10月19日から施行する。

### ○調査指導委員

氏名	専攻	現職
福山敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
服部貞藏	考古学	(県)文化財保護審議会委員
久徳高文	国文学	稻山女学園大学教授
坪井清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇植二	古代史	京都府立大学教授
橋崎彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
早川庄八	古代史	名古屋大学教授
渡辺 寛	古代史	皇學館大学助教授

## 昭和59年度所内日誌

自 昭和59年4月1日  
至 昭和60年3月31日

月 日	内 容
4月5日	昭和59年度史跡地先行取得事業の文化庁ヒアリング（三重県・明和町説明）
11日	斎宮跡地権者の会……明和町役場
13日	斎宮跡環境整備基本構想（試案）について協議（59年度事業計画）……三重大学工学部
16日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……（文化庁・三重県・明和町）
26日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議（三重大学北原助教授から技術指導）……三重大学工学部
27日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
28日	第48-13次、第53-1次発掘調査 現地説明会（山沢主査・明和町中野技師報告）
5月7日	中勢南部県民局地方連絡会議で調査報告（佐々木所長）
7日	第54次発掘調査開始（西前沖地区）
9日	第53-1次発掘調査完了
9日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……明和町役場
14日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……明和町役場
16日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……三重大学工学部
17日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……三重大学工学部
17日	第53-2次発掘調査開始（住宅新築）
19日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
19日	松阪市郷土会で講演（佐々木所長）
22日	「斎王まつり」実行委員会
29日	第53-2次発掘調査完了
6月2日	第4回中世遺跡研究集会において報告（谷本主査）
3日	斎宮跡環境整備基本構想（試案）について協議（地権者の会役員の参画）……明和町中央公民館
11日	斎宮小学校校舎・体育館の整備について協議……三重大学工学部
15日	三重県議会議員「昇和会」斎宮跡現地視察（12名）
17日	斎王まつり
24日	斎宮跡保存啓発事業（福井県朝倉氏遺跡見学・明和町各界代表）
26日	松阪市立中央公民館において講演（倉田主事）
7月1日	第54次発掘調査 現地説明会（福村主事報告）
10日	斎宮跡史跡整備に関する府内検討会……県庁
19日	斎宮跡環境整備基本構想（試案）について協議……（三重県・明和町・地域環境計画研究会）
21日	第55次発掘調査開始（御館・柳原地区）

月 日	内 容
7月30日 31日	斎宮跡保存啓発事業（体験発掘 30～31日） 第54次発掘調査完了
8月4日 9日 13日 21日 22日 23日 24日 25日 29日 30日	斎宮跡史跡内の生活環境整備について協議（三重県・明和町）……中勢南部県民局 斎宮跡史跡内の生活環境整備について協議（文化庁・三重県・明和町） 第53－3次発掘調査開始（住宅新築） 中部地区文化振興会議斎宮跡現地視察（47名） 第53－4次発掘調査開始（収納小屋新築） 第53－3次発掘調査完了 第53－5次発掘調査開始（倉庫新築） 三重県埋蔵文化財発掘調査報告会で報告（倉田主事） 第53－5次発掘調査完了 第53－4次発掘調査完了
9月3日 4日 6日 7日 10日 17日 18日 19日 20日 21日 27日 29日	第53－6次発掘調査開始（町道側溝） 第53－6次発掘調査完了 第53－7次発掘調査開始（資材置場造成） 朝日カルチャーセンターにおいて講演（山沢主査） 斎宮跡生活環境整備について協議（三重県・明和町）……中勢南部県民局 第56次発掘調査開始（東裏地区） 三重県議会（第3回定例会）で斎宮跡の歴史資料館について一般質問 第53－7次発掘調査完了 知事・県議会議長・県教育長へ陳情（斎宮跡に県立博物館の設置要望）……明和町 第53－8次発掘調査開始（住宅新築） 斎宮跡調査指導委員会……吉田山会館 第53－8次発掘調査完了
10月3日 5日 16日 18日 25日 26日 30日	第55次発掘調査完了 斎宮跡調査・保存に係る事務連絡協議（三重県・明和町） 中勢地区高等学校教育事務研究会において講演（佐々木所長） 大規模遺跡調査五県会議……広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 県総務部長斎宮跡現地視察 東海三県自治研究所長斎宮跡現地視察 津ロータリークラブにおいて講演（佐々木所長）
11月3日 3日	第56次発掘調査 現地説明会（倉田主事報告） 斎宮跡保存啓発事業……斎宮跡講演会「斎宮跡とまちづくり」講師 三重大学助教授北原理雄氏……明和町中央公民館

月 日	内 容
11月10日	文化振興斎宮跡保存促進三重県議員連盟の視察（平城宮・同史跡庭園等）
14日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
15日	斎宮跡への旅紹介（朝日新聞〔夕刊〕）
18日	金剛坂遺跡 現地説明会（県営圃場整備事業）
19日	東京都富士高校修学旅行（斎宮跡現地見学）
22日	第56次発掘調査完了
22日	第53－9次発掘調査開始（農業用倉庫新築）
22日	第53－10次発掘調査開始（農業用倉庫新築）
28日	第53－10次発掘調査完了
30日	第53－9次発掘調査完了
12月17日	第57次発掘調査開始（東加座地区）
19日	第53－11次発掘調査開始（住宅新築）
1月 8日	第53－11次発掘調査完了
18日	知事・県教育長へ陳情（斎宮跡に県立博物館の設置要望）……明和町
26日	第53－12次発掘調査開始（既設納屋の曳家）
28日	第53－12次発掘調査完了
29日	会計検査院副長斎宮跡現地視察
30日	斎宮跡調査指導委員会（30～31日）……三重厚生年金休暇センター
2月 3日	第57次発掘調査 現地説明会（倉田主事報告）
4日	第53－13次発掘調査開始（住宅新築）
12日	第53－13次発掘調査完了
15日	中町地区対策委員会……中町公民館
18日	県立博物館整備に係る序内検討会……県庁会議室
22日	第53－14次発掘調査開始（斎宮小学校体育館移築）
22日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
23日	竹川・牛葉地区合同役員会……竹川地区公民館
26日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
27日	第57次発掘調査完了
27日	第53－15次発掘調査開始（盛土）
3月 5日	第53－14次発掘調査完了
6日	作業員見学旅行（大阪）
14日	斎宮跡環境整備基本構想（試案）について協議（文化庁・三重県・明和町・地域環境計画研究会）
20日	第53－15次発掘調査完了
22日	文化審議会……吉田山会館
27日	遺跡環境整備担当者会議……福井県立朝倉氏資料館

## 掘立柱建物・柵列一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
<b>第54次調査 ( 6 A F E - N )</b>								
3402	- × 2	E 5° N	-	4.0	-	2.0	平安前	S B 3409より古い
3403	3 × -	E 3° N	6.0	-	2.0	-	"	
3404	5 × 2	E 1° S	10.0	4.0	2.0	2.0	"	S K 3411より新しい
3407	3 × 2	E 1° N	6.3	4.5	2.1	2.25	"	S B 3409より新しい
3409	3 × 2	E 6° N	6.0	3.4	2.0	1.7	"	S B 3402より新しい
3418	3 × -	E 4° N	6.0	-	2.0	-	"	
3423	3 × 2	E 3° N	7.2	4.2	2.4	2.1	"	
3426	3 × 2	N 3° W	5.4	4.1	1.8	2.05	"	
3440	4 × 2	N 2° W	9.2	4.0	2.3	2.0	"	
3448	(4) × 2	N 3° W	-	5.0	2.4	2.5	"	
3455	(4) × 2	N 4° W	-	5.0	2.3	2.5	"	
3506	- × 2	E 4° N	-	4.4	-	2.2	"	
3494	4 × 2	N 10° W	6.6	3.2	1.65	1.6	平安中	
1886	3 × 2	E 0°	6.3	4.3	2.1	2.15	平安後	柱建物、第35次調査で確認、建物方向・規模変更
3453	(2) × 2	N 2° E	-	4.4	2.1	2.2	"	
3470	3 × 2	E 0°	6.9	4.0	2.3	2.0	"	
3471	3 × 2	E 4° W	4.8	4.2	1.6	2.1	"	
3475	4 × 2	N 1° E	7.4	4.4	1.85	2.2	"	柱建物
3484	4 × 3	N 0°	9.6	6.6	2.4	2.2	"	北面、東面廻、北面柱間2.4m、東面廻柱間2.2m
3500	3 × 2	N 8° W	6.0	4.0	2.0	2.0	"	柱建物
3505	- × 2	E 3° N	4.2	-	2.1	2.1	"	
3523	3 × 2	N 0°	4.0	6.3	2.1	2.0	"	柱建物
1885	5 × 4	E 2° N	10.5	6.8	2.1	1.7	平安末	柱建物、第35次調査で確認、建物方向・規模変更
1890	3 × 3	E 4° N	6.3	5.7	2.1	1.9	"	柱建物、第35次調査で確認、建物方向・規模変更
3420	2 × 3	E 4° N	4.2	5.0	2.1	1.9	"	北面廻柱間 1.2m
3429	3 × 2	N 4° W	5.7	4.2	1.9	2.1	"	柱建物
3432	3 × 2	E 0°	6.9	3.8	2.3	1.9	"	
3437		N 6° W	25.3		2.3		"	柵列
3441	3 × (3)	E 5° N	6.0	-	2.0	2.0	"	柱建物
3442	3 × 2	N 9° W	5.4	4.0	1.8	2.0	"	柱建物
3468	4 × 2	E 2° N	8.2	3.8	2.05	1.9	"	
3469	3 × 2	N 1° W	6.6	4.6	2.2	2.3	"	
3483	4 × 2	N 6° W	8.4	5.0	2.1	2.5	"	
3495	3 × 2	E 0°	6.3	4.2	2.1	2.1	"	
3496	3 × 2	N 6° W	6.0	4.0	2.0	2.0	"	柱建物
3502	3 × 2	N 6° W	6.2	4.0	2.07	2.0	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
3504	3 × 2	N6°W	6.2	3.8	2.07	1.9	平安末	總柱建物
3518	3 × 2	N5°W	6.3	4.6	2.1	2.3	〃	
3541	(3) × 3	N6°W	6.3	—	2.1	2.0	〃	總柱建物
3545	(2) × 2	N4°W	—	4.0	2.1	2.0	〃	總柱建物
3457	4 × 3	N11°W	7.2	6.3	1.8	2.1	嫌倉前	總柱建物、根石をもつ
3464	3 × 3	N4°W	6.0	5.4	2.0	1.8	〃	總柱建物、根石をもつ
3474	3 × 2	E5°N	5.6	3.6	2.0	1.8	〃	總柱建物、根石をもつ 東面廊、南北間1.95m
3501	3 × 3	E7°N	6.0	5.5	2.0	1.83	〃	總柱建物
3546	3 × 2	N5°W	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	總柱建物

第55次調査 (6 A E N - P)

315	5 × 2	E1°N	11.7	4.8	2.34	2.4	平安初	第19次調査で確認 SB1004と重複
999	5 × (2)	E0°	11.6	—	2.32	—	〃	第19次調査で確認 南面廊、南北間1.95m
1001	5 × (2)	E2°N	12.2	—	2.44	2.4	〃	第19次調査で確認
1004	5 × 2	E0°	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	〃
3551	3 × 2	N1°W	4.8	3.4	1.6	1.7	〃	
3552	3 × 2	N0°	7.5	4.6	3.0	2.3	〃	南面廊、南北間1.5m
1002	5 × 3	E6°N	12.1	5.85	2.42	2.35	平安前	第19次調査で確認 北面廊、南北間1.2m
1007	3 × 2	E4°N	5.9	3.9	1.97	1.95	平安後 I	第19次調査で確認 SB1010より新しい
1059	5 × 2	E4°N	10.5	4.4	2.1	2.2	〃	第20次調査で確認 SB1068より古い
3562	3 × 2	N5°W	7.2	4.2	2.4	2.1	〃	
3563	3 × 2	E8°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	
3564	3 × 2	E10°N	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	
3567	(3) × 2	N7°W	—	3.8	1.9	1.9	〃	
1014	5 × 2	E4°N	10.5	4.4	2.1	2.2	平安後 II	第19次調査で確認
1019	4 × 2	E3°N	8.4	4.3	2.1	2.15	〃	第19次調査で確認 建物規模変更
1022	3 × 2	E6°N	6.4	3.9	2.13	1.95	〃	第19次調査で確認
1023	4 × 2	E3°N	8.8	3.9	2.2	1.95	〃	第19次調査で確認 建物規模変更
3570	3 × 3	N6°W	5.6	4.7	1.86	1.56	〃	
314	3 × 2	E4°N	6.8	4.25	2.27	2.13	平安末	第19次調査で確認 SB1009より新しい
1008	3 × 2	E3°N	6.3	4.0	2.1	2.0	〃	第19次調査で確認 建物規模変更
1024	5 × 2	E3°N	10.5	3.9	2.1	1.95	〃	〃

第56次調査 (6 A C H - S)

3592	3 × 2	E4°N	6.9	4.2	2.3	2.1	奈良後	
3596	5 × 2	N0°	9.1	4.4	1.82	2.2	〃	
3599	3 × 2	N2°W	5.8	4.3	1.93	2.15	〃	東西側柱の柱通りが若干ずれる
3608	3 × 2	N4°W	7.4	4.4	2.47	2.2	〃	SB3610より新しい
3609	3 × 2	N5°W	5.8	4.1	1.93	2.05	〃	SB3608より新しい
3610	3 × 2	N12°W	5.3	3.4	1.77	1.7	〃	
3617	2 × 2	N10°W	3.5	3.3	1.75	1.65	〃	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
3593	(3)×2	E14° S	—	4.2	2.1	2.1	平安後II	S B3596より新しい
3628	3×3	E4° N	7.2	6.6	2.4	2.2	〃	南面廊、廊柱間 2.1m
3633	3×2	E10° S	7.2	3.9	2.4	1.95	〃	
3639	4×3	E7° N	8.8	6.2	2.3	2.15	〃	三面廊建物、北・西面廊、柱間1.9m、東面廊柱間2.3m
3640	5×2	E6° N	11.6	4.2	2.32	2.1	〃	
3643	3×2	E20° S	5.9	4.2	1.97	2.1	〃	
3627	3×3	E0°	6.7	6.5	2.23	2.15	平安末	北面廊、廊柱間 2.2m
3629	3×2	E4° N	5.8	3.9	1.93	1.95	〃	
3631	—×2	E3° N	—	3.8	—	1.9	〃	
3637	4×3	E6° N	8.2	5.9	2.05	1.97	〃	純柱建物、南東隅に土塀
3649	4×2	E15° N	9.4	4.2	2.35	2.1	〃	

第57次調査 (6 A G F - H · 1)

3671	(3)×(2)	N2°W	—	—	2.0	2.0	奈良後	
3670	(2)×—	E4° N	—	—	2.4	—	奈良末～平安初	
3672	4×(2)	E4° N	7.7	—	1.93	2.5	〃	
3675	3×—	E6° N	5.4	—	1.8	—	〃	S B3673より新しい
3683	5×2	N2°W	7.9	3.6	1.58	1.8	〃	
3685	—×(3)	E3° N	—	8.1	—	2.7	〃	北面廊、廊柱間 2.7m
3688	3×2	E0°	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	梁行柱間不揃い
3689	3×2	E6° N	5.7	3.7	1.9	1.85	〃	S B3688より新しい
3691	3×2	N3°W	5.5	3.5	1.83	1.75	〃	
3692	3×2	N3°W	5.8	3.3	1.93	1.65	〃	S B3691より新しい
3693	2×2	E3° N	4.4	3.3	2.2	1.65	〃	
3714	—×2	E0°	—	5.3	—	2.65	〃	
3715	(2)×3	E3° N	—	7.7	2.4	2.65	〃	北面廊、廊柱間 2.4m
3716	3×2	E3° N	5.8	4.0	1.93	2.0	〃	
3673	(3)×2	E4° N	5.6	—	1.87	1.8	平安前I	S B3672より新しい
3713	(2)×2	E6° N	—	5.9	2.4	2.95	〃	
3674	3×(2)	E4° N	5.7	—	1.9	2.0	平安前II	S B3673より新しい
3701	3×2	E2° N	5.6	4.2	1.87	2.1	〃	
3699	3×2	E2° N	5.4	3.6	1.8	1.8	平安中	
3709	5×2	E3° S	8.1	3.8	1.62	1.9	〃	

第53-1次調査 (6 A C M - P)

3778	4×4	E8° N	9.3	8.4	2.4	2.1	平安末	東側桁行柱間 2.1m 東側隅に S K3777を伴う
3779	2×2	E1° N	5.2	4.2	2.6	2.1	〃	

第53-2次調査 (6 A C A - M)

3811	5×3	E2° N	9.0	6.9	1.8	2.25	奈良後	南面廊、廊柱間 2.4m
3812	(5)×3	E10° N	—	4.65	1.85	1.55	〃	南面廊、廊柱間 1.5m
3813	—×(2)	N10°W	—	—	1.55	—	〃	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(=) 桁 行 梁 行		時 期	備 考
-----	-----	-----	-------	-------	--------------------	--	-----	-----

第53-11次調査 (6 A D R-W)

3838	3 × 2	E7° N	6.3	4.4	2.1	2.2	奈 良	
3839	(4) × 2	N7° W	—	4.3	1.6	2.15	〃	

第53-13次調査 (6 A D Q-L)

3870	(4) × (3)	E6° S	—	—	1.8	1.7	鎌倉前	純柱建物
------	-----------	-------	---	---	-----	-----	-----	------

第53-15次調査 (6 A F K-C · D)

1865	4 × 2	E2° N	9.5	4.6	2.375	2.3	平安初	第34次調査で確認
1440	5 × 2	E3° N	12.2	5.0	2.44	2.5	平安前 I	第34次調査で確認
3871	3 × (2)	N2° W	6.5	—	2.17	—	〃	
3872	3 × (2)	N2° W	6.2	—	2.07	2.1	〃	
3873	3 × 2	E2° N	5.6	3.6	1.87	1.8	〃	
1441	5 × 2	E3° N	12.0	4.9	2.4	2.45	平安前 II	第34次調査で確認
1442	5 × 2	E3° N	10.5	4.2	2.1	2.1	〃	〃
1446	3 × 2	E1° N	5.7	3.7	1.9	1.85	〃	〃
3874	5 × 2	E3° N	12.0	4.7	2.4	2.35	平安後 II	
3875	(4) × (2)	E5° N	—	—	2.1	2.1	平安末	

## 豎穴住居一覧表

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(m)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
第56次調査 (6 A C H - S)							
3644	4.8×4.8	N 22° E			東 壁	飛 鳥	一部周溝残る
3600	5.2×4.5	N 3° E				奈良前	
3619	3.5×3.2	N 0°				〃	
3634	— × 3.0	E 14° S				〃	
3660	4.1×4.1	N 12° E			東 壁	〃	
3584	3.9×—	N 3° W				奈良中	
3591	2.6×2.4	N 2° W				〃	
3595	2.7×2.6	N 0°				〃	
3598	3.7×2.8	E 20° S				〃	
3605	3.4×3.0	N 0°			東 壁	〃	東壁に長さ1.4mの煙道が付く
3620	2.9×2.8	N 2° W			北 壁	〃	
3624	2.8×2.2	N 10° W			東 壁	〃	
3630	3.6×3.2	E 28° S				〃	
3655	2.8×2.6	N 0°				〃	
3590	3.6×2.5	E 8° S			北 壁	奈良後	
第57次調査 (6 A G F - H · I)							
3711	4.3×3.3	N 4° W				奈良末— 平安初	
第53-1次調査 (6 A C M - P)							
3771	3.7×—	N 2° W	21		東 壁	奈良前	
3774	4.8×—	N 6° W	16			〃	
3770	3.8×3.7	E 2° N	15		北 壁	奈良中	
3772	3.8×3.0	E 3° N	22		東 壁	〃	
3773	4.1×3.2	E 3° N	20		北 壁	〃	
3775	5.6×3.5	N 15° W	12		東 壁	〃	
3776	4.2×3.1	N 8° W	10			〃	
第53-2次調査 (6 A C A - M)							
3809	5.0×—	N 0°	50			奈良前	
3810	4.8×—	N 0°	25		東 壁	〃	S B 3809より古い
第53-11次調査 (6 A D R - W)							
3847	5.0×—	E 19° N	12			奈 良	

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	45	試振	13-4	51	樂殿2916~2917(松井)
2	46	古里A地区	13-5	"	御館2974-1(川本)
3	"	B地区	13-6	"	中垣内375-1(南)
4	47	C地区	13-7	"	東裏328(小川)
5	48	D地区	13-8	"	西加座2771-1(細井繁久)
6-1	"	Aトレンチ	13-9	"	2773(細井国太郎)
6-2	"	Bトレンチ	13-10	"	東裏362-1(児島)
6-3	"	Cトレンチ	13-11	"	西加座2681-1(浮田)
6-4	"	Dトレンチ	13-12	"	2721-3, 2724-2(森川)
6-5	"	Eトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2(宮下)
7	49	古里E地区	14-1	52	2Eトレンチ
8-1	"	Fトレンチ	14-2	"	2Fトレンチ
8-2	"	Gトレンチ	14-3	"	2Gトレンチ
8-3	"	Hトレンチ	14-4	"	2Hトレンチ
8-4	"	Iトレンチ	14-5	"	2Iトレンチ
8-5	"	Jトレンチ	15	"	斎宮小学校
8-6	"	Kトレンチ	16-1	"	竹川町道A
8-7	"	Lトレンチ	16-2	"	B
8-8	"	Mトレンチ	16-3	"	C
8-9	"	Nトレンチ	16-4	"	D
8-10	"	Oトレンチ	16-5	"	E
8-11	"	Pトレンチ	16-6	"	F
9-1	50	Qトレンチ	17-1	"	竹神社社務所
9-2	"	Rトレンチ	17-2	"	竹神社防火用水
9-3	"	Sトレンチ	17-3	"	西加座2721-6(西沢)
9-4	"	Tトレンチ	17-4	"	樂殿2894-1(中川)
9-5	"	Uトレンチ	17-5	"	2895-1(西口)
9-6	"	Vトレンチ	17-6	"	出在家3237-3(吉川)
9-7	"	Wトレンチ	17-7	"	3237-1(里中)
9-8	"	Xトレンシ	17-8	"	樂殿2894-1(西村)
9-9	"	Yトレンチ	17-9	"	東海造機
9-10	"	Zトレンチ	18	53	6AEL-E・I(下園)
10	"	広域園道路	19	"	6AEN-M・N・O(御館)
11-1	"	西加座2661-1(山中)	20	"	6AE0-I・J(柳原)
11-2	"	2681-1(山名)	21-1	"	6AGN-B(鐵治山、中山)
11-3	"	東前沖2483-2(前田)	21-2	"	6AFI-D(西加座2711-2, 2717-4地山)
11-4	"	下園2926-9(吉木)	21-3	"	6AFD-D(西前沖2649-1大西)
12-1	51	2Aトレンチ	21-4	"	6AFH-F(西加座2678, 2679-3森下)
12-2	"	2Bトレンチ	21-5	"	6AGD-K(東前沖、渡部)
12-3	"	2Cトレンチ	21-6	"	6ACA-T(古里3269-2, 中西)
12-4	"	2Dトレンチ	21-7	"	6AFE-F(東前沖2631-1翁木)
13-1	"	東加座2436-7(浜口)	21-8	"	6AEG-A(東前沖2609-3大西)
13-2	"	2436-4(中村)	21-9	"	6AED-R(藤林3218-3字田)
13-3	"	古里3283(村上)	22-1	"	6AGU

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
22-2	53	6 A G U	37-5	56	6 AFC-G (西前沖2604-7、中村)
22-3	"	6 A G W	37-6	"	6 ABD-A (古里588-2、北萩)
23	54	6 A E L-B (下園)	37-7	"	6 AEC-M (葛子2861-2、道王公民館)
24	"	6 A G F-D (西加座)	37-8	"	6 ADR-P (木賊山128-8、13、14、富山)
25-1	"	6 ADP-K (牛糞3029-1、三垂土地ホーム)	37-9	"	6 AGK-E (東加座2355-1、竹内)
25-2	"	6 ACA-Y (古里3270、葛田)	37-10	"	6 AED-O (東加座3217-1、浅辺)
25-3	"	6 ADD-F (葛田3139-3、浅田)	37-11	"	6 ADN-O (内山3043-3、道宮歌)
25-4	"	6 AER-H (牛糞3014、牛糞公民館)	37-12	"	6 AFH-J (西加座2681-1、3、4、添谷)
25-5	"	6 AGN-H (鐵治山2392、丸山)	37-13	"	6 AGK-F (東加座2385-2,2386-3、竹内)
25-6	"	6 AFH-A (西加座2675-5、谷口)	38	"	6 A C D-S (塚山)
25-7	"	6 AEK-V (下園2926-10、奥田)	39	"	6 A B D-R-S-T (古里)
25-8	"	6 AFC-D (西前沖2604-5、山本)	40	"	6 A G H-L-M (東加座)
25-9	"	6 ACN-C (内山3387-1、北出)	41	"	6 A G J-J 他 (帝宮地内)
25-10	"	6 AEV-A (井戸339-1、水島)	42-1	57	6 A E I-D-F (栗巣)
25-11	"	6 ACF-B (東裏354-1、沢)	42-2	"	6 A E K-A-B (栗巣)
25-12	"	6 AEE-Y (東裏292-3、山本)	43-1	"	6 ADC-C (出在家3235-2、水田)
25-13	"	6 AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-2	"	6 ADT-B (木賊山308-1、山本)
26-1	"	6 A FR (中西)	43-3	"	6 ACP-T (南裏241-1、辻)
26-2	"	6 AEX-6 ACQ (鈴池、木賊山、南裏)	43-4	"	6 ADS-D (牛糞123-3、西山)
26-3	"	6 A EV-W-X (鈴池)	43-5	"	6 ADE-D (葛林3220-3、證野)
26-4	"	6 A CR (木賊山、南裏)	43-6	"	6 AGE (東前沖、町道鶴溝)
27	"	6 A CG-S-T (東裏)	43-7	"	6 ABD-F (古里588-6、今西)
28	"	6 A EO-D (鶴原)	43-8	"	6 ADQ-H (牛糞3025-2、大西)
29	"	6 AFLI, 6AFL, 6AFK, 6AFM, 6AGJ	44	"	6 ADP-A-B (鐵治山2759-1、他)
30	55	6 A B J-M-X-W (中垣内)	45	"	6 AEG-P-Q (東裏2904-2、他)
31-1	"	6 ADO-M (内山3038-13、若見)	46	"	6 AGN-C-D (鐵治山2737-1、他)
31-2	"	6 ACP-I (南裏227-2、跡木)	47	"	6 ADJ-D-G 他 (西加座、鶴原、宮之前、上園)
31-3	"	6 ABD-A (古里588-4、北萩)	48-1	58	6 ACM-M (広原3385)
31-4	"	6 ADQ-T (牛糞3018-2、百五銀行)	48-2	"	6 ADP-Q (牛糞3033-1-2、吉田)
31-5	"	6 ACC-G (塚山338-3、水谷)	48-3	"	6 ABL-M (中垣内34-4、西川)
31-6	"	6 ABO-X (古里576-1、塙田)	48-4	"	6 AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-7	"	6 AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-5	"	6 AGD-6 AFE (東前沖、町道鶴溝)
31-8	"	6 ACN-G (広原3388-1, 5, 8, 9, 森)	48-6	"	6 AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-9	"	6 AGD-L (北野2487-1、中川)	48-7	"	6 ADT-H (木賊山307、森西)
31-10	"	6 ADM-O (内山3043-3、道宮歌)	48-8	"	6 ACL-E-F-G (栗子334-15、他)
31-11	"	6 ADT-I (木賊山304-2、證野)	48-9	"	6 AEV-J (鈴池341-1、延)
31-12	"	6 ADT-J (木賊山304-7、宇田)	48-10	"	6 ADT (牛糞、町道鶴溝)
32	"	6 A CE-D-E-F (塚山)	48-11	"	6 AGP-E (鐵治山2351-1, 2352-1、鶴原)
33	"	6 A DE-C-D 他 (鶴林)	48-12	"	6 AFC-H (西前沖2604-8-9、清水)
34	"	6 A FK-F-G-H (西加座)	48-13	"	6 ACM-O (東裏)
35	"	6 A PE 他 (西前沖)	48-14	"	6 AET (牛糞、町道鶴溝)
36	56	6 A BI-F (中垣内)	49	"	6 ADI-D-U-V-W-X (上園3083、他)
37-1	"	6 AFC-M (前沖2604、日本紹木)	50	"	6 ACH-H (東裏294、297、山本)
37-2	"	6 ADQ-R (牛糞3021-2、野田)	51	"	6 AFF-D (西加座2663-1-4, 2664、森下)
37-3	"	6 AFC-F (西前沖2604-6、押田)	52	"	6 AGF-D (西加座2703、他)
37-4	"	6 AFC-M (西前沖2604、日本紹木)	53-1	59	6 ACM-P (東裏284、体育館)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
53-2	59	6ACA-M (古里3280-2、中西)	53-11	59	6ADR-W (木葉山131-7、西村)
53-3	"	6ABE (古里573-2、永納)	53-12	"	6ABL-K (中垣内464-2、巽)
53-4	"	6ACL-S (東堀271-1、田所)	53-13	"	6ADQ-L (牛堀3022、辻)
53-5	"	6ACR (木葉山97-5、田中)	53-14	"	6ACM-O (東堀287-3、体育館)
53-6	"	6AGO (諏訪山、町道剣淵)	53-15	"	6AFK-C·D (西加茂2721-1、跡木)
53-7	"	6ADD-U (森林3147-3、野呂)	54	"	6AFE-N (西前津2630、性)
53-8	"	6AGE-O (東前津2470-2、上田)	55	"	6AEN-P (柳原; 開船2785-1、他)
53-9	"	6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)	56	"	6ACH-S (東堀289-1、他)
53-10	"	6ACA-R (古里3267-1、西間)	57	"	6AGF-H-I (東加茂2441、他)

### 三重県遺跡標示一覧表

時 代		種 别 と 地 区					
0		A 国 都 街	K 北 勢	伊	勢	城	
1	先 繩 文	B 伊 势 寺	L 中 勢	志	摩 熊 野	碧	
2	繩 文	C 志 摩 熊 野	M 南 勢	伊	質	館	
3	苏 生	D 伊 賀 院	N 志 摩	記	念 物		
4	古 填	E 北 势	O 熊 野	文	通		
5	飛 鳥	F 中 势	P 伊 賀	Y			
6	奈 良	G 南 势	Q 伊 勢	Z そ の 他			
7	平 安	H 志 摩	R 志 摩 熊 野				
8	鎌 倉	I 熊 野	S 伊 賀 所				
9	室 町 以 降	J 伊 賀					

(付 篇)

## 斎宮跡の土師器

昭和 60 年 3 月 20 日

三重県斎宮跡調査事務所

斎宮で出土する飛鳥～平安時代の土器は、90%以上が土師器で、おもな器種には、杯、皿、椀、高杯、鉢、盤、壺、鍋、甕、瓶、カマドなどがある。ここでは、これらのうち、最も出土量が多く、しかも比較的保存状態の良好な杯・皿類の形態、調整法、色調、胎土の変化に注目し、これをメルクマールとして、良好な一括資料とみなしえる各遺構出土土器の編年を試みたい。

なお、その実年代については、目下、斎宮では、木簡の出土は 1 点もなく、また、墨書き土器や文献上の記事から例証でき得るようなものも数少ないため、共伴する猿投窯、美濃窯などの須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器や、瀬戸窯、常滑窯、渥美窯などの山茶椀の年代観を参考とする一方、平城京や平安京など先進地域における研究成果との対比によるところが大きい。

土師器の時期区分については、従来奈良時代を前半、後半の 2 時期に、平安時代を初頭、前半、中葉、後半、末葉の 5 時期に分類してきたが、今回新たに奈良時代中期を設け、平安時代前半と後半をそれぞれ前Ⅰ期、前Ⅱ期、後Ⅰ期、後Ⅱ期の 2 時期に細分した。また、後半、末葉といったあいまいな語句をやめ、すべて期という呼称を用いることにした。従って奈良時代は、前期、中期、後期の 3 期に、平安時代は初期、前Ⅰ期、前Ⅱ期、中期、後Ⅰ期、後Ⅱ期、末期の 7 期に分かれる。以下各期の土師器の様相について述べることにする。

### (1) 飛鳥時代の土師器

奈良時代以前に遡る土器が宮城西部の古里、中垣内、東裏地区などで検出される竪穴住

居や土塙からわずかではあるが出土している。おもな器種には、土師器杯・皿・碗・甕・台付杯・台付皿・蓋・高杯・把手付壺・須恵器杯蓋・無台杯身などがある。しかし出土土器の大半は、土師器甕類であり、他のものは量的に少なく、保存状態も悪いため、この時期の明確な土師器杯・皿類の特徴を把握するまでは至っていない。むしろ供膳土器では、杯よりも径12cm前後で暗褐色や茶褐色を呈する粗製の椀が主体的である。これは、比較的胎土の良い明茶褐色や赤褐色を呈する杯・皿に比べ、胎土に砂粒を多く含み、しばしば粘土ひも巻き上げ痕跡をとどめる通称“いなか風椀”と呼んでいる一群である。甕は、胴の長い長甕と、体部がすんぐりとした球形の小形甕、口径の割に器高の低く、体部が扁平な鍋に近い甕がある。器面の調整は、外面を細かいハケメ調整し、内面は体部上半を横方向のハケメ、下半を縱にヘラケゼリするものが一般的である。また口縁端部に面をつくるものもみられる。

この時期の標式土器として、S B1615（第30次調査）・S X2735（第45次調査）・S K1255（第27次調査）・S K2120（第36次調査）出土のものがある。共伴する須恵器では、杯蓋に返りのあるものが見られる点、無台杯身が2種類に分化していない点などから猿投窯編年の岩崎41号窯式に相当するものと考えられ、S B1615出土土器はこの中でも一番古手に属するものと考えられる。

## （2）奈良時代の土師器

○前期の土師器 古里地区から宮城中央部まで確認されている大溝S D170出土土器、第33次調査で検出の井戸S E1800埋土最上層出土土器、第49次調査で検出の土塙S K3000出土土器を標式とする。共伴する須恵器は猿投窯編年の高藏寺2号窯式に相当するものと思われる。

土師器杯・皿とも平らな底部にやや内窓気味に立ち上がる口縁部から成り、口縁端部は丸く終わるものと、内側に丸く肥厚するものがある。いずれも明茶褐色や赤褐色を呈する。なおS E1800とS K3000出土の土師器杯・皿の法量を比較してみると大形の皿は、口径19.5cm～22.5cm、深さ2.4cm～3.1cmの間におさまり、底部をヘラケゼリし口縁部を横なでするb手法で調整されるなど両者ともほぼ共通しているが、杯では、S E1800出土のものがほとんど口縁部内面に放射状暗文、底部に螺旋暗文を施し、b手法で調整され、中には外面をヘラミガキするものが見られるのに対し、S K3000出土の杯は、暗文を施すものは少なく底部のヘラケゼリが口縁部下半まで及ぶものが多い。また法量においてもS E1800出土の杯は口径12.4cm～16.6cm、器高3.0cm～5.2cm、S K3000出土の杯は、口径15.2cm～18.6cm、器高3.0cm～4.2cmと、S K3000の杯の方が全体的に口径が大きく、その割に器高は低い。この傾向は、粗製の椀についてもあてはまる。このほかS K3000出土の皿の中に口径14.6cm～15.8cm、器高2cm前後の小形の皿が認められる点、S E1800出土の須恵器杯蓋に返りの名残りが認められるものがあるなど、奈良時代前期の中でもS E1800出土土器の方が古く、S K3000出土土器の方が新しい要素をもっているものと思われる。甕は前代に引

き続き、法量、器面の調整とも大きな差は認められない。

○中期の土師器 第21—1次調査で検出の土塙SK1098、第35次調査で検出の土塙SK1970出土土器を標式とする。いずれもトレンチ調査であったため、完掘できなかったが、多量の土師器、須恵器が出土している。特にSK1098からは、整理箱で25箱分の出土量があり、須恵器杯・盤・椀・蓋・高杯・甕、土師器杯・皿・盤・椀・蓋・高杯・甕等、比較的豊富な器種が揃っている。共伴する須恵器は、猿投窯編年の岩崎25号窯式に相当するものと思われる。また、須恵器杯蓋の中に紐部が頂部平坦で断面逆台形状を呈するものがあり、これは平城宮第III段階に見られる特徴的な蓋とされているものである。

土師器杯は、前代同様口径13.6cm~19.8cm、器高2.3cm~4.5cmの様々な法量のものが認められるが、口径に対する器高の割合が前代の杯に比べ全体的にやや減じるようである。器面の調整は底部から口縁部下間にかけヘラケズリするもののはか、外面全面をヘラケズリするc手法調整のものも若干みられる。土師器皿は、前代同様b手法が主体的で、法量における大きな差はない。中には、底部内面に螺旋暗文を施すものや、外面をヘラミガキするものが認められるが量的に少ない。

○後期の土師器 第28次調査で検出の土塙SK1291出土土器を標式とする。共伴する須恵器は鳴海32号窯式から折戸10号窯式の古い段階に相当するものと思われる。

土師器杯は、この時期から底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開くものや、口縁部が外反し、端部はやや内弯気味となるものが現われる。また、法量では口径14cm前後のものと18cm前後のものに大小の差別が明確化していく。器面の調整は口縁部を横なしで、底部のみヘラケズリするb手法である。ちょうど平安時代に盛行する杯に型式的につながるその崩芽段階のものであると考えられる。

土師器皿は口径17cm~18cm、器高2.0cm~2.5cmのものが多く、前代までのように口径20cmを超えるものは、ほとんど見られなくなる。口縁部の形態は、前代までの皿のように内弯気味に立ち上がるものと、新たに、杯の口縁部形態に対応して、外反しさらに端部がやや内弯するものが現われる。器面の調整は口縁部を横なしで、底部は指先でなでつけるe手法である。以上のように、杯の調整法や皿の形態に奈良時代的なものを残しながらも、杯の形態や杯・皿の法量ではむしろ平安時代的であり、ちょうど杯・皿が大きく変化するその過渡的な段階のものであろうと思われる。

### (3) 平安時代の土師器

○初期の土師器 第34次調査の土塙SK1445出土土器を標式とする。出土土器の大半は土師器杯・皿類であり、少量の土師器高杯・甕・鍋・鉢・瓶、須恵器杯・高盤・蓋が伴う。このほか小形円面鏡や「大」「万」「萬」「寮口」「年平」「秋」など10点の墨書き土器もある。

共伴する須恵器は猿投窯編年の折戸10号窯式（井ヶ谷78号窯式も含める）の範疇でとらえられる。

土師器杯は、前代のS K1291にその萌芽が見られたように口縁部が外反する平安時代的なタイプの杯（Aタイプ）と、底径が小さく長めの口縁部が外方へほぼまっすぐに開く椀に近いタイプのもの（Bタイプ）と、口縁部が内弯気味に立ち上がる奈良時代的なタイプ（Cタイプ）の3者がある。杯の大部分は前の2者で、両者はほぼ同数である。Aタイプ、Bタイプの杯とも口径が12.4cm～12.8cm、13.0cm～13.4cm、15cm以上の3つに分類でき法量の規格化が進んだものと思われる。Bタイプの杯には、口径11cm以下のものもある。Cタイプの杯は口径16.0cm～18.6cmと大形で、内面に間隔の粗い放射状暗文や螺旋暗文を施すものが多い。暗文はBタイプ杯にもごく稀ではあるが、口縁部に放射状暗文や格子目暗文が認められるものがある。器面の調整は、Aタイプ、Bタイプはすべて底部外面を指先でなでつけ、口縁部を横なでするe手法で、Cタイプはe手法のほか、b手法やc手法も若干見られる。台付杯はこのCタイプの杯にのみ高台が付けられる。

土師器皿も杯と同様にAタイプの杯と同形態の口縁部を有する皿（Aタイプ）、底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となり、口縁端部の上方に平坦な面をつくるもの（Bタイプ）、平坦な底部に内弯気味に立ちあがる口縁部からなる奈良時代的な皿（Cタイプ）の3者がある。Aタイプの皿は口径16cm～17cm、器高2.0cm～2.4cm、Bタイプの皿は口径15.6cm～17.6cm、器高2.2cm～2.4cmと両者の法量は似かよっており、器面の調整も、b手法で調整される口径24cmのAタイプの大形皿1点を除き、他はすべてe手法である。Cタイプの皿は、口径16.2cm～17.6cm、器高2.4cm～2.8cmのものと口径21cm前後のものがあり、前者はe手法で調整され、後者はb手法で調整される。間隔の粗い放射状暗文や螺旋暗文の認められるものも多い。奈良時代の名残りをとどめているものと思われる。

土師器甕・鍋・鉢の外面の器面調整はこの時期には、確実に体部上半を縦方向にハケメを施し、体部下半から底部をヘラケズリするものが認められ、以後この調整の仕方が主流を占めるようになる。

このほか高杯脚部が最も長大化するのもこの時期のようである。

○前Ⅰ期の土師器 第20次調査で検出の土塙S K1045出土土器、第44次調査で検出の土塙S K1424出土土器を標式とする。いずれも多量の土師器杯・皿のほか、様々な器種の須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器などの供膳土器が伴っており、その出土状況は、祭祀に関係した土器の一括廃棄と見なし得るものである。共伴する灰釉陶器は、猿投窯編年の黒笛14号窯式に相当する。

土師器杯・皿はこの時期から形態、調整法において奈良時代的な要素をもつCタイプのものが消え、それぞれ前代のS K1445で見られたAタイプ、Bタイプのもので構成されるようになる。また器面の調整もb手法やc手法は見られなくなり、すべてe手法に統一される。杯の法量は前代のものとはば変わらず、Aタイプ、Bタイプの杯とも口径の大きさにより少なくとも4つに分類可能である。また比較的大形品であったCタイプの杯はBタイプの杯に同化されたものと考えられるのでBタイプの杯の中に量的に多くはないが口径17cm前後の大形品も見られる。一方皿の法量はAタイプの皿が口径16cm～17cmと前代のもの

と変化はないが、Bタイプの皿は口径14cm前後のものが主流で、前代に比べやや縮少傾向にある。また皿の中に口径20cmを超える大形品は、この時期から見られなくなる。

○前II期の土器類 第51次調査で検出の土器 S K3127出土土器、第44次調査で検出の土器 S K2650出土土器を標準とする。共伴する灰釉陶器は猿投窯編年の黒鉢90号窯式に相当する。なおS K3127出土の灰釉陶器は黒鉢90号窯式と黒鉢14号窯式の新しい段階のものが混在しており、土器器皿・皿も前I期に近いものである。従って本時期はさらに少なくとも2時期には、細分可能である。S K2650出土土器は、祭祀に伴う一括廃棄の土器と考えられ、下表のごとく多量の土器器皿・皿のほかあらゆる種類の土器が網羅されており、この時期の基本資料となっている。

土器器皿・皿は前代同様AタイプとBタイプがあるが、器壁は4mm前後と全体的にやや薄く仕上げられ色調は淡褐色や橙褐色を呈するものが多い。またAタイプの杯は、口縁部が大きく外反するのみとなり、口縁端部の内湾は見られない。調整の省略化が進んだものと思われる。Bタイプの杯も前代のものに比べ外傾度が大きい。

器面の調整は、Aタイプ、Bタイプの杯・皿ともすべてe手法である。口縁部外面の横なでの範囲は、S K3127出土のものでは器高の $\frac{1}{3}$ ほどまで及んでいるのに対し、S K2650出土のものは、器高の約 $\frac{1}{2}$ までしか及んでおらず、S K3127出土の杯の方が明らかに古い要素をもっている。杯の口径はAタイプのもので14cm前後、16cm前後の2つに、Bタイプのものでは13.5cm前後、15cm前後、17cmを超えるものの3つに大別され、口径12cm~13cmの小形品はなくなり、これまで細分傾向にあった法量がこの時期を境として次第にまとまる傾向にある。この点について詳しくは論じ得ないが、黒鉢90号窯式の灰釉陶器が普及するによよんで、土器器皿・須恵器を主体とした食膳形態から新しい食膳形態に変化したことと対応するのではないかと考えられる。

土器皿も同様にAタイプのもので口径15.5cm前後、Bタイプのもので口径14cm~15cmにまとまりつつあり、前I期のものに比べて全体に法量が縮小傾向にある。暗文は、ごくわずかではあるがBタイプの杯やこれに高台をつけた台付杯と大部分の黑色土器碗に認められる。

土器器皿は球形の体部と小さく外反する短い口縁部から成り、口縁端部は上方につまみ

#### S K2650出土土器の構成

土器器皿	須恵器	黑色土器	灰釉陶器	経年陶器
杯・皿 約15,000	杯 高台無 8 高台有 15 計 23	板 A 14 板 B 1 皿 1 小盤 1 盃 3 耳皿 1 長角盤 5 長角耳皿 1 盆 3	碗 32 皿 12 段皿 8 耳皿 1 長角盤 5 長角耳皿 1 盆 3	碗 21 皿 6 段皿 6 耳皿 11 長角盤 4 長角耳皿 2 盆 1
高杯 9	15,056件 (98.8%)	41件 (0.3%)	26件 (0.2%)	62件 (0.4%)
皿  高台無 6 高台有 22 計 28	皿 高台無 4 高台有 1 計 5	耳皿 1 長角盤 1 長角耳皿 1 盆 5 盃 3	耳皿 1 長角盤 5 長角耳皿 1 盆 2 盃 1	耳皿 11 長角盤 4 長角耳皿 2 盆 1
杯  高台無 12 高台有 5 計 17	杯 高台無 4 高台有 1 計 5	耳皿 1 長角盤 1 長角耳皿 1 盆 5 盃 3	耳皿 1 長角盤 5 長角耳皿 1 盆 2 盃 1	耳皿 1 長角盤 1 長角耳皿 1 盆 1
盤 1				
				総数 15,238件

あげられ、やや肥厚する。器高22.4cmを測るやや胴の長い妻は、奈良時代から続く長妻の最末形式と考えられる。

○中期の土師器 折戸53号窯式に相当する灰釉陶器が共伴する土師器をこの時期のものと考えているが、斎宮では、この時期に相当する遺構・遺物が極端に少なく、標式となり得る良好な一括資料は今のところ見つかっていない。敢えてあげるならば第51次調査の井戸S E3134出土土器がこの時期に相当する。土師器杯は口径13.0cm~14.4cm、器高2.2cm~3.6cmで、前代のものに比べさらに縮小化は進み、大形のBタイプの杯を除くとA、B両タイプの区別が不明瞭となる。また口縁部の外反も弱く横なので範囲もせまくなり、白っぽい色調を呈する杯・皿も見られる。

なお斎宮外ではあるがS K2650出土土器に直接続くと考えられる良好な一括資料が多気郡多氣町カウジデン遺跡の溝S D14から出土している。ここでは口径13.0cm~14.8cmの明褐色を呈する土師器杯、口径19.8cm、器高4.5cmの大形で深いBタイプの杯、口径14cm~15cmのAタイプの皿がある。また1点ではあるが、杯に放射状暗文と螺線暗文を施すものがみられ、暗文の下限を一応この時期ぐらいに考えている。灰釉陶器杯・皿は、体部下半から底部をヘラケズリしたのち高台を貼りつけ、灰釉をツケガケするものであるが、皿にはハケヌリするものも若干認められている。従って灰釉陶器は折戸53号窯式の中でも古い段階に属するものと思われる。S E3134出土の美濃窯産と思われる灰釉陶器碗・皿も体部下半から底部をヘラケズリし高台を貼りつけ、灰釉をツケガケするものであるところから、S E3134出土土器は、S D14出土土器とほぼ同時期に位置付けられよう。

○後I期の土師器 第31~4次調査で検出の井戸S E2000出土土器を標式とする。共伴する灰釉陶器の中に大形の深碗があり、猿投窯編年の東山72号窯式に相当するものと思われる。

土師器杯は、法量の縮小化が増々進み、口径13cm~14cmとこれより一回り小さい口径10cm~12cmのものがあり、杯・皿の区別が不明瞭となる。口径10cm~12cmの杯はむしろ小皿と呼ぶべきものであろう。またS E3134まで系統のたどれた皿は、この時点で完全に姿を消している。胎土は、まだ比較的良好で、黄褐色や白味がかった褐色を呈するものが多い。一方、この時期から新しくロクロ製土師器が登場する。おもな器種に底部に糸切り痕をとどめる椀（口径14cm前後）、小皿（口径9.4cm~11.4cm）、そしてこの小皿に高台をつけた台付小皿があり、非ロクロ製のものに比べ胎土は緻密で、作りはていねいである。このほか非ロクロ製の台付椀（口径14cm~16cm）や浅い皿部に高い高台のつく台付皿、台付小皿も前代にはほとんど見られなかったものである。なお台付椀は、カウジデン遺跡のS D14出土土器の中に大形で深い椀部に低い高台のつくものがあり、台付椀の上限はここまで遡るものと考えている。

土師器妻は、球形の体部にくの字形に曲がる口縁部がつき、口縁端部は内側へ折り曲げられてやや肥厚する。体部外面の調整は、上半部を縱方向に全面ハケメを施すもの、間隔を置いてハケメを施すもの、ハケメを施さないものがあり、調整が簡略化されつつある。

体部下半はヘラケズリされるのが通例である。なお、体部上半部を間隔を置いてハケメを施す例は、既に前代の S D14 出土土器の中に見られる。

○後II期の土師器 第32次調査の土塙 S K1730出土土器、第20次調査の土塙 S K1074出土土器を標式とする。共伴する灰釉陶器は、猿投窯編年の百代寺窯式に相当するものと考えている。

土師器杯・皿にはロクロ製と非ロクロ製があり、ロクロ製の占める割合が前代に比べ増加している。ロクロ製の土師器には、小皿・台付小皿・台付大皿のほか擬高台風に底部が糸切りされた大小の皿、最末型式の灰釉椀を模倣したと考えられる椀があり、非ロクロ製の土師器には、杯・小皿・台付皿・台付小皿・大形で深い杯がある。胎土は、ロクロ製のものに比べ、砂粒が多く、器壁も 4 mm ~ 6 mm と前代のものに比べやや厚手である。色調は両者とも白味を帯びた淡茶褐色を呈するものが多い。

この時期におよんで、口縁部が外反する A タイプの杯は完全に姿を消し、従来の杯の系統をひくと考えられるものでも、器高が減じて浅いものは皿と見なされ、杯・皿の区別がいよいよ困難な状況である。なお杯（皿）の中には、底部の厚さに比べて口縁部が若干肥厚し、口縁端部のみ横なでされる新しいタイプの杯（皿）も見られ、このタイプが次の S D3052 出土の皿につながっていくものである。土師器表は、全体をうかがえるものは出土していないが体部外面のハケメはこの時期には施されないものと思われる。

○末期の土師器 第50次調査で検出の溝 S D3052出土土器を標式とする。共伴する山茶椀は瀬戸窯山茶椀編年の II 段階第 4 型式に相当するものと思われる。

ロクロ製土師器には、皿・小皿・台付小皿があり、非ロクロ製の皿・小皿と法量がほぼ一致する。皿は口径 15 cm 前後、器高 2 cm ~ 4 cm、小皿は口径 9 cm 前後、器高 1.5 cm 前後である。台付小皿は口径 9 cm、器高 4 cm で、皿の部分は小皿に比べて浅く、高台部分は、口径の割に高い。ロクロ製の土師器は、淡い茶褐色を呈するものが多く、胎土には細砂を含む。一方、非ロクロ製の土師器杯・皿は全て口縁部のみを横なでするもので、横なでの下端部分が突出するように肥厚するのがこの時期の皿の特徴である。白っぽい褐色ないしは茶褐色を呈し、胎土に細砂を含む。またしばしば粘土紐巻上げ痕跡の見られるものもある。

#### (4) まとめ

以上のように斎宮で出土する飛鳥時代から平安時代にかけての土師器の様相、特に杯・皿の変遷について 11 期に区分し概観してきた。そこで各期の年代観について各地で想定されている土器編年の年代観と対比しながら、私案を示しまとめとしたい。

まず奈良時代以前の S B1615・S X2735・S K1255・S K2120 出土土器は 7 世紀後半に奈良時代では前期とした S D170・S E1800・S K3000 を 8 世紀前半、中期の S K1098・S K1970 を 8 世紀中頃に、後期の S K1291 は 8 世紀後半頃を考えている。そして平安時代では、初期とした S K1445 を 8 世紀末 ~ 9 世紀初頭に、前 I 期とした S K1045・S K1424 は、黒笠 14 号窯式の灰釉陶器を共伴し猿投窯編年ではこれを 9 世紀後半に位置付けているが、

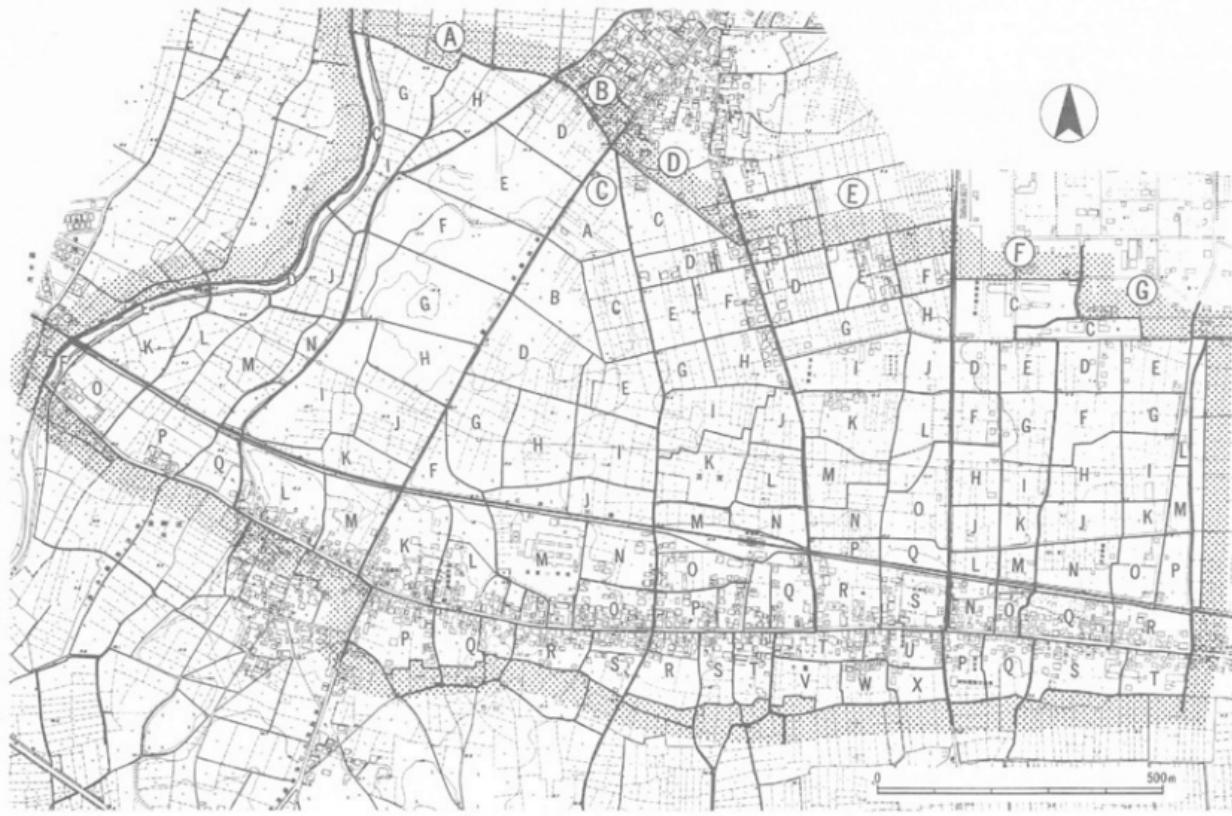
土師器杯・皿は、SK1445のものと形式的に連続するものと考えられ、またSK1445とSK1045・SK1424の間を埋める土器も見つかっていないところから、時期は若干遅り9世紀前半～9世紀中頃を考えている。前II期としたSK3127・SK2650は、いずれも黒釉90号窯式の灰釉陶器を共伴するが、先述のように灰釉陶器や土師器杯・皿の形態からSK3127→SK2650の順が考えられ、2時期に細分が可能である。時期的には、9世紀後半～10世紀初頭頃を考えている。これに続く中期のSE3134は、10世紀前半～10世紀中頃に、東山72号窯式の灰釉陶器を共伴する平安時代後I期としたSE2000は、猿投窯編年から11世紀前半に位置付けられる。このように考えてみると折戸53号窯式の新しい段階に相当する10世紀後半が斎宮では空白となる。斎王制度そのものは断絶はないのに、この時期を埋める遺物がほとんどないというのは、いかに考えればよいのであろう。SE2000とはほぼ同時期と考えられる第8～4次調査（Iトレンチ）で検出の土塙SK190出土土器はすべて火災にあった一括土器であるところから、仮りにこれが天元4年（981）に斎宮寮雜舍13字焼けるという日本紀略の記事に対応するならば、SE2000は11世紀を跨る可能性も十分あり得ると考えられる。次の平安時代後II期としたSE1730・SK1074は百代寺窯式に相当する灰釉陶器を共伴しており、11世紀後半に、平安時代末期としたSD3052は12世紀中頃を考えている。

## 参考文献

- 「斎宮跡発掘調査概報Ⅰ」1979  
SK1045・SK1074・SK1098  
「三重県斎宮跡調査事務所年報1979」1980  
SB1255・SK1291・SK1424・SK1445・SK1452・SB1615  
「三重県斎宮跡調査事務所年報1980」1981  
SK1445・SB1615・SK1730・SE1800・SK1970・SE2000  
「三重県斎宮跡調査事務所年報1981」1982  
SK2120  
「三重県斎宮跡調査事務所年報1982」1983  
SK1424・SK2650・SK2735  
「三重県斎宮跡調査事務所年報1983」1984  
SD170・SK3000・SD3052・SK3127・SK3134  
『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会1983  
藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館1983

年代	標式遺構	土 器					(1/4)
	SB1615 SX2735						
700	SK1255 SK2120						
750	SK1098 SK1970						
800	SK1291						
850	SK1445 SK1424						
900	SK3127						
1000	SE3134						口クロ製
1150	SE2000 SD3052						





斎宮跡地区表示

図 版



第55次調査全景（南西から）



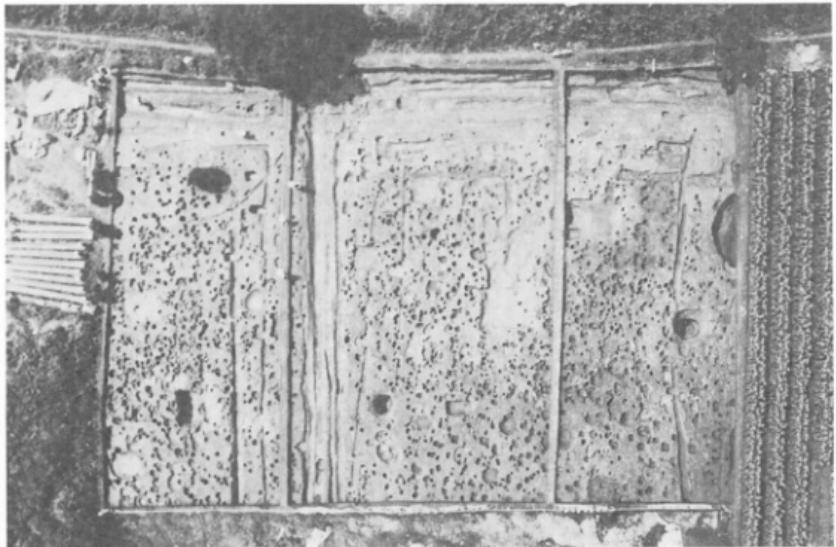
第56次調査全景（東から）



第57次調査全景（上空から）



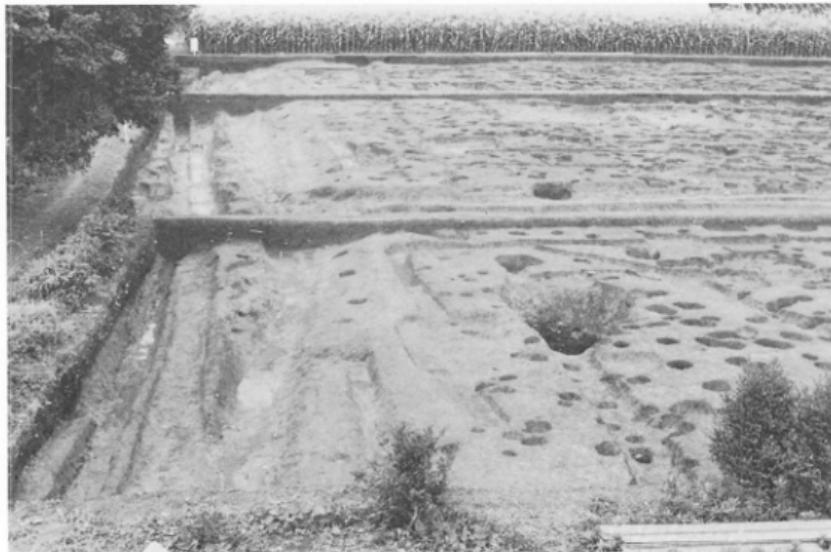
第57次調査全景（東から）



全 景（上空から）



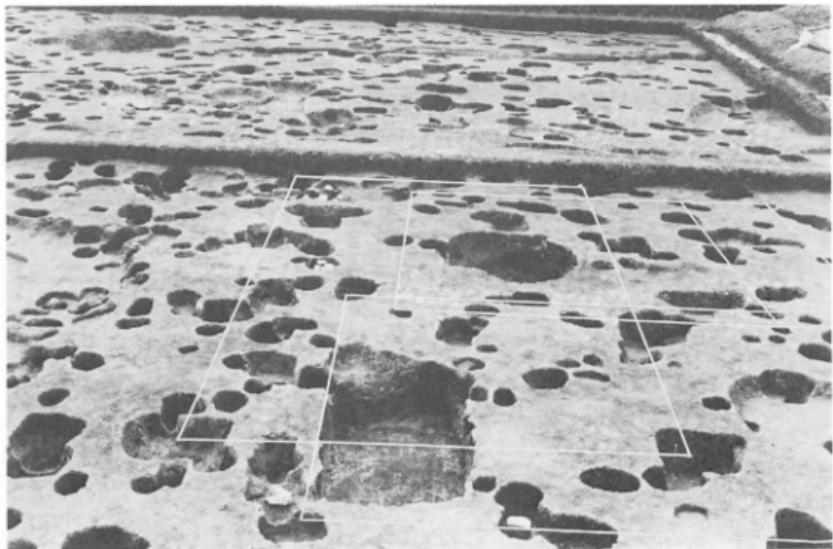
東部全景（北から）



南部全景（東から）



南西部全景（北から）



S B 3423 • S B 3426 • S B 3420 • S X 3428 (東から)



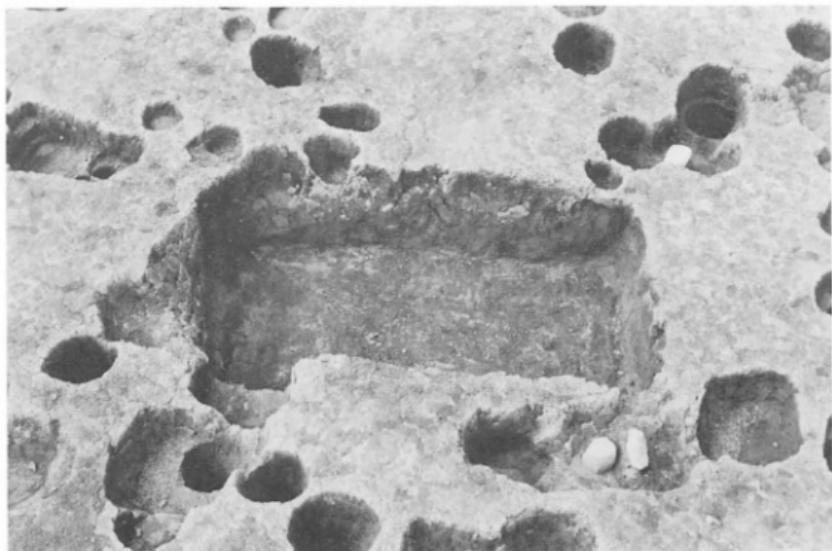
S B 3440 • S B 3494 • S D 3507 • S D 1903 • S K 3497 (南から)



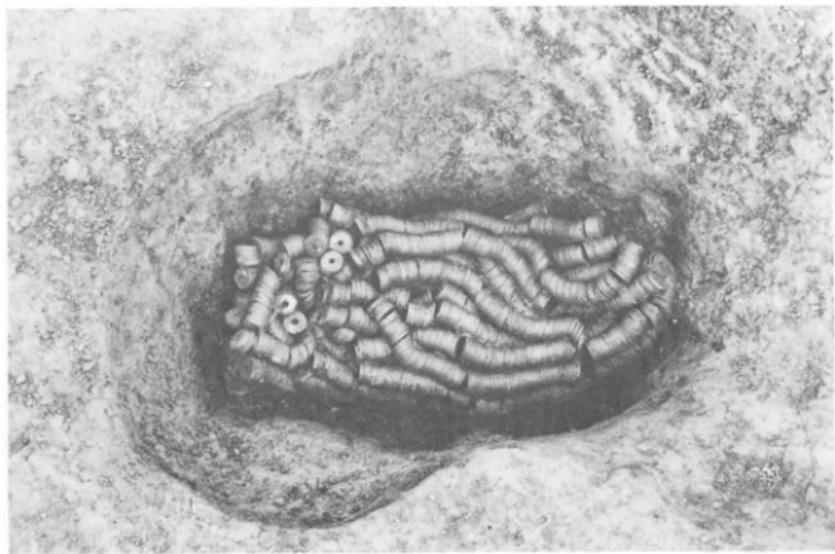
S B3457・S K3503 (南から)



S E1904 (西から)



S X 3428 (南から)



S K 3515 差銭出土状況 (西から)



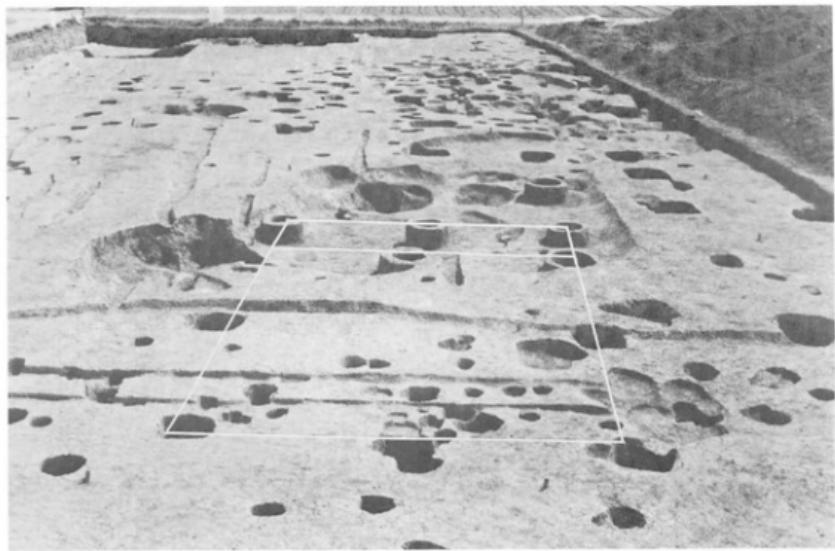
西部全景（上空から）



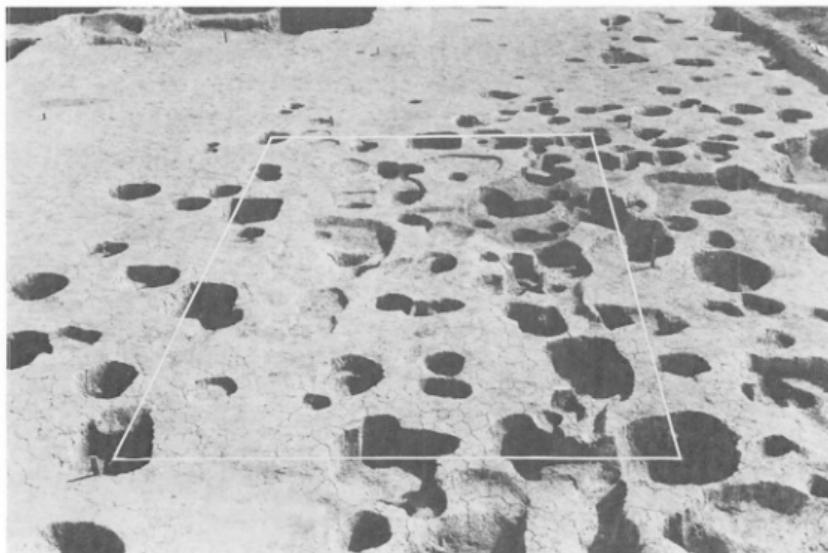
西部全景（北から）



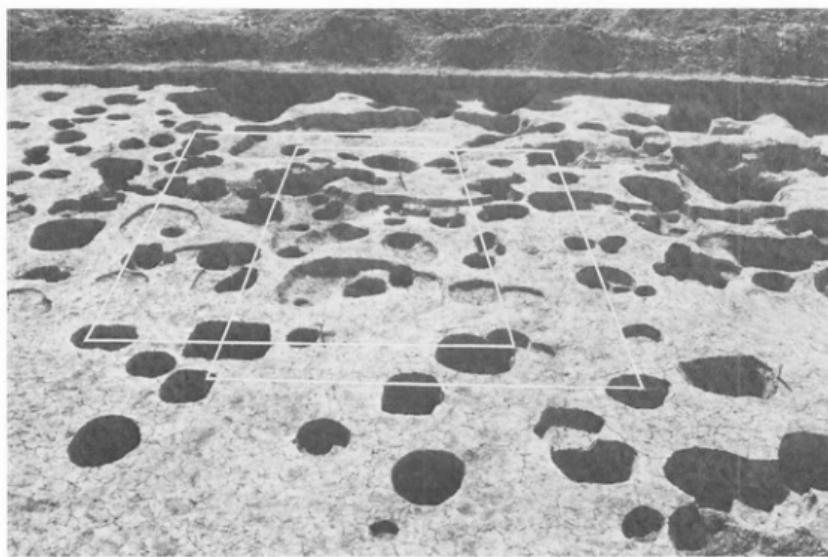
S D 3559 • S D 318 • S D 3558 (北から)



S B 3552 • S D 3553 • S K 3555～S K 3557 (北から)



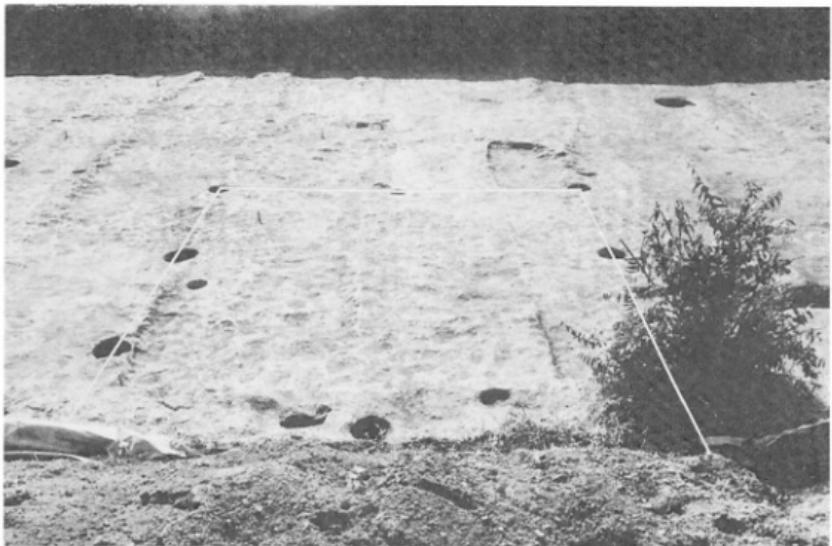
S B 3562 (北から)



S B 3563 • S B 3564 • S K 3565 (東から)



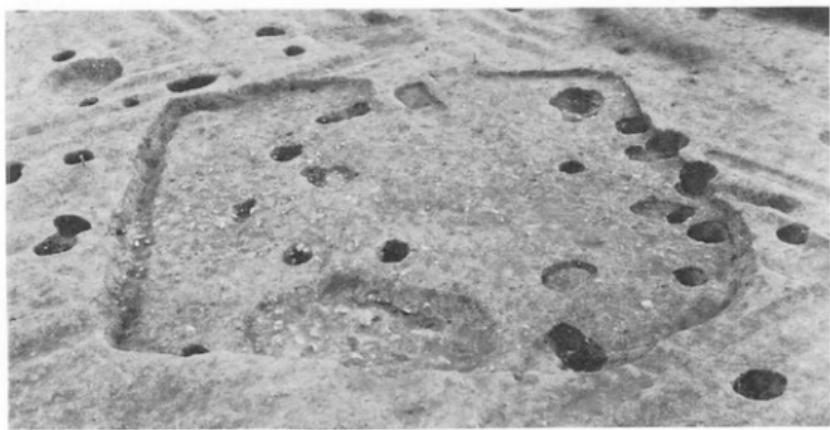
S B 3570 • S K 317 (北から)



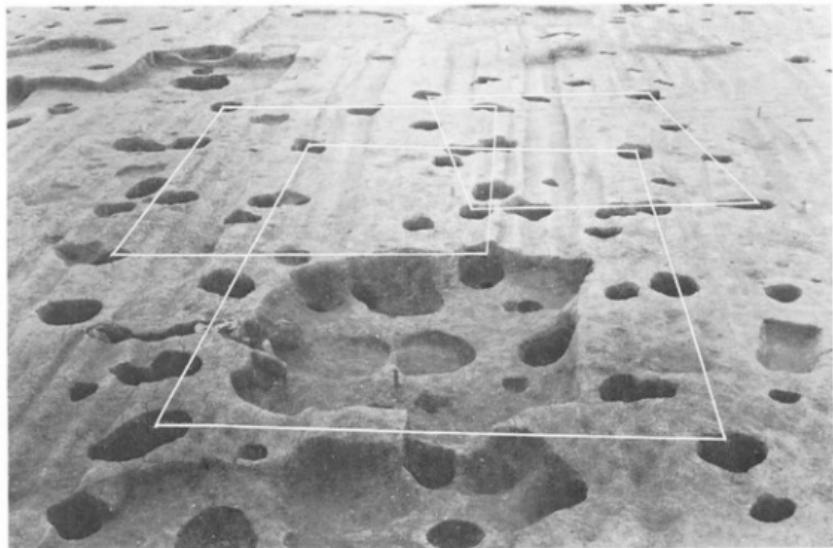
S B 1059 (東から)



全 景（上空から）



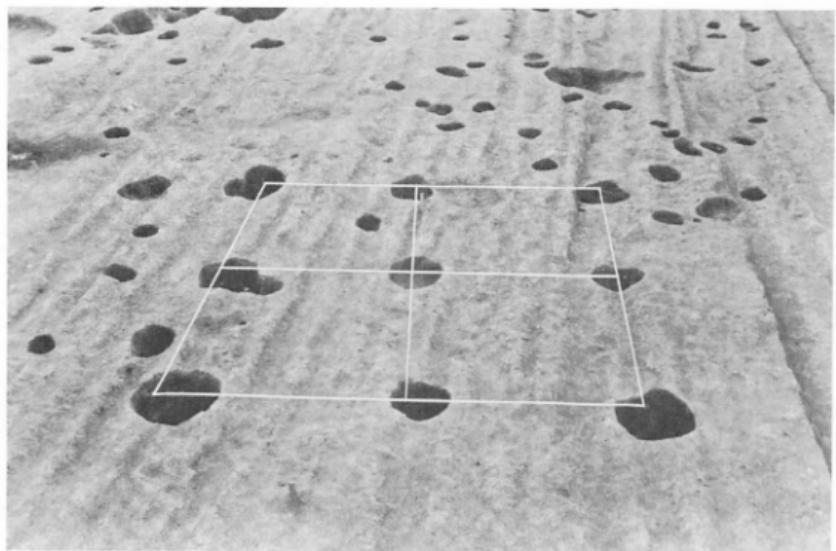
S B 3644（西から）



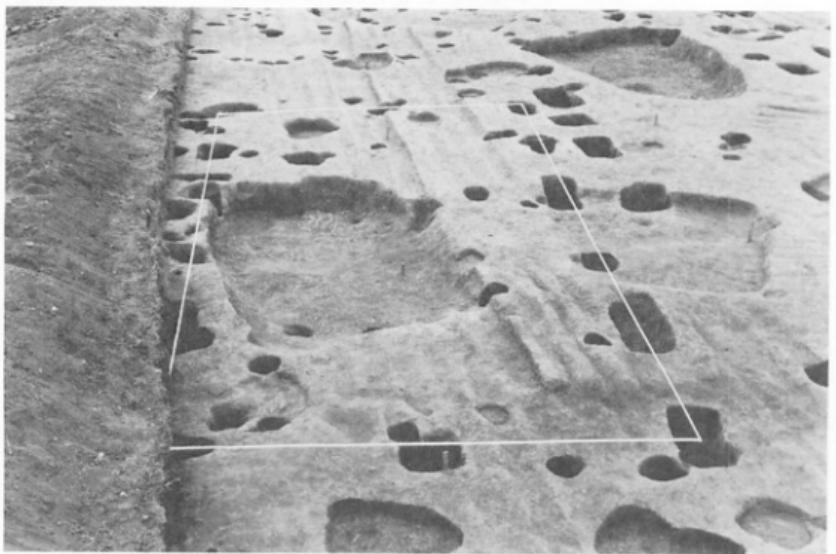
S B 3605 • S B 3608 • S B 3609 • S B 3610 (北から)



S B 3605 (西から)



S B 3617 (北から)



S K 3597 • S B 3598 • S B 3596 (北から)



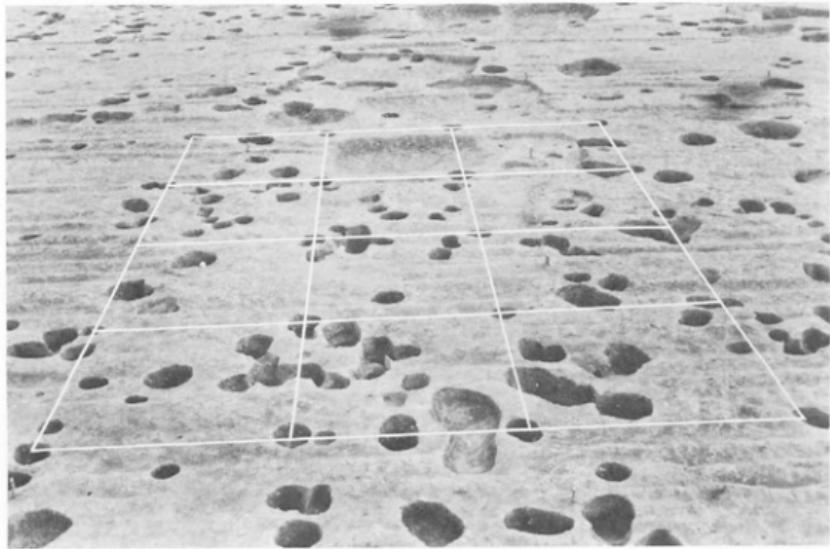
S B 3592 (西から)



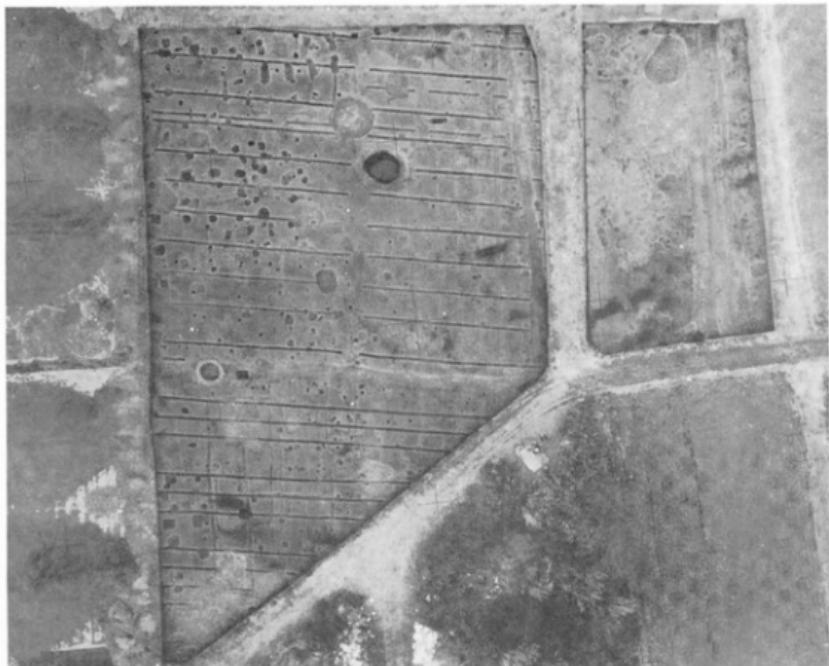
S B 3630 • S B 3628 • S B 3629 (東から)



S B 3639 (北から)



S B 3637・S K 3638 (西から)



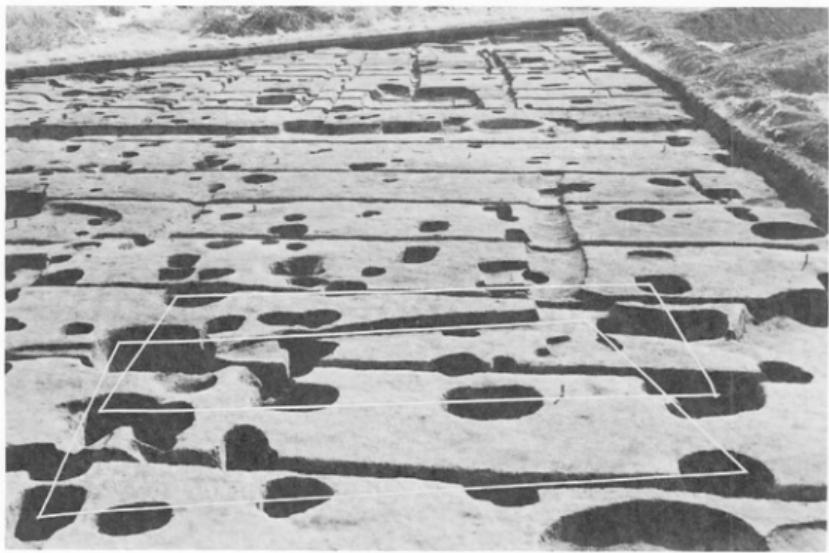
全 景 (上空から)



全 景 (北から)



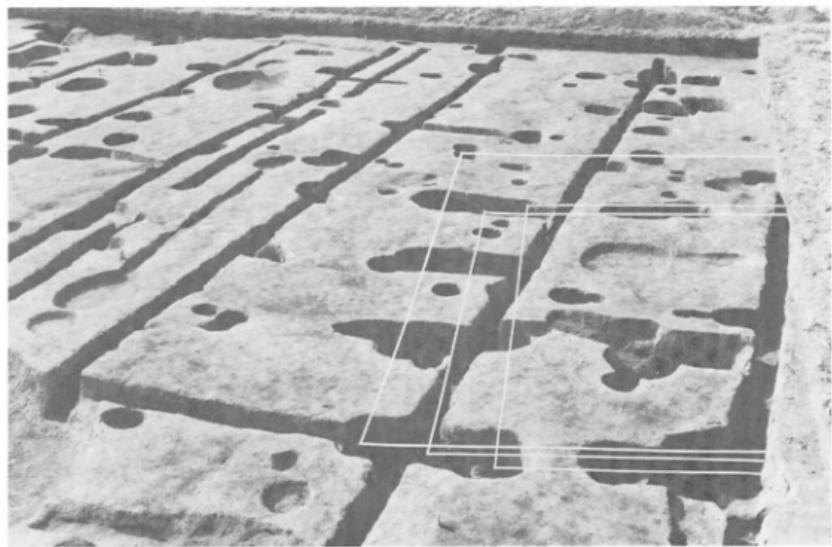
東部全景（南から）



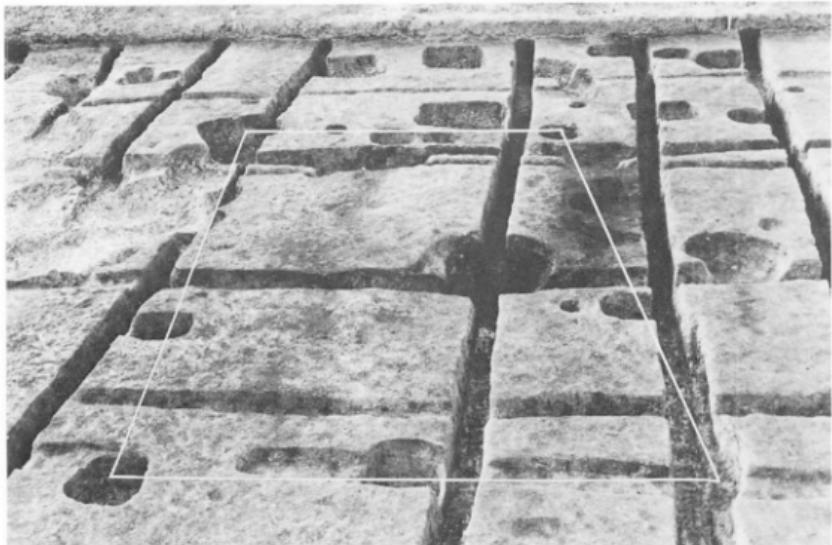
S B 3688・S B 3689（北から）



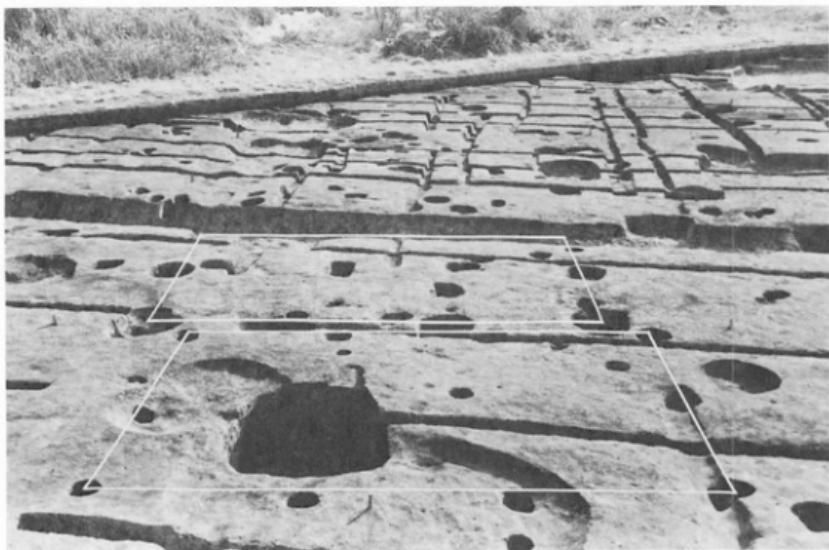
S B 3714 • S B 3715 (北から)



S B 3672 • S B 3673 • S B 3674 (東から)



S B 3716・S K 3712 (東から)



S B 3699・S B 3701・S K 3697・S K 3698 (北から)



S B 3709 • S K 3707 • S K 3708 (東から)



S E 3690 (北東から)



第53-1次（6 ACM-P）調査（北から）



第53-2次（6 ACA-M）調査（南東から）



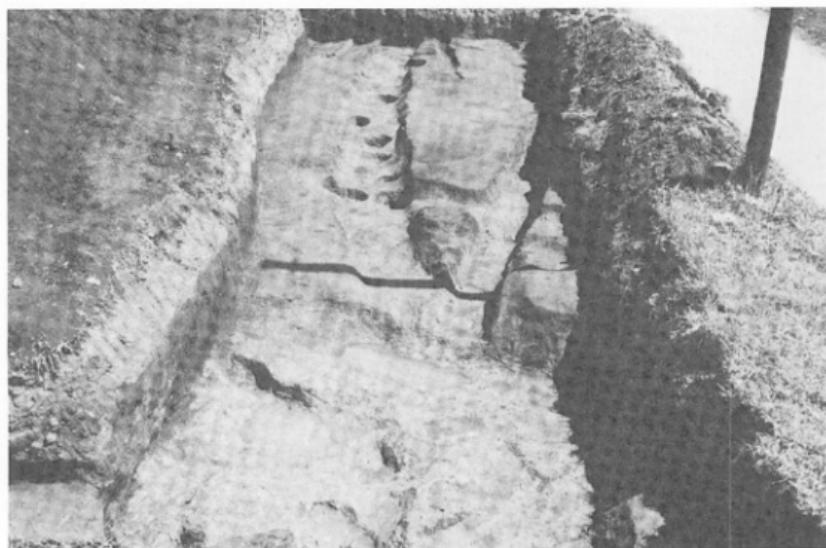
第53-3次（6 ABE）調査（西から）



第53-4次（6 ACL-S）調査（西から）



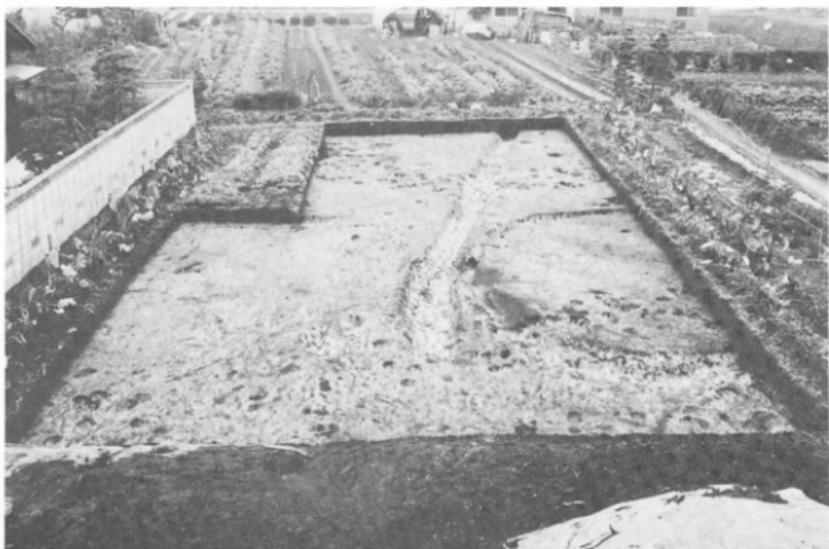
第53-5次（6 A C R）調査（東から）



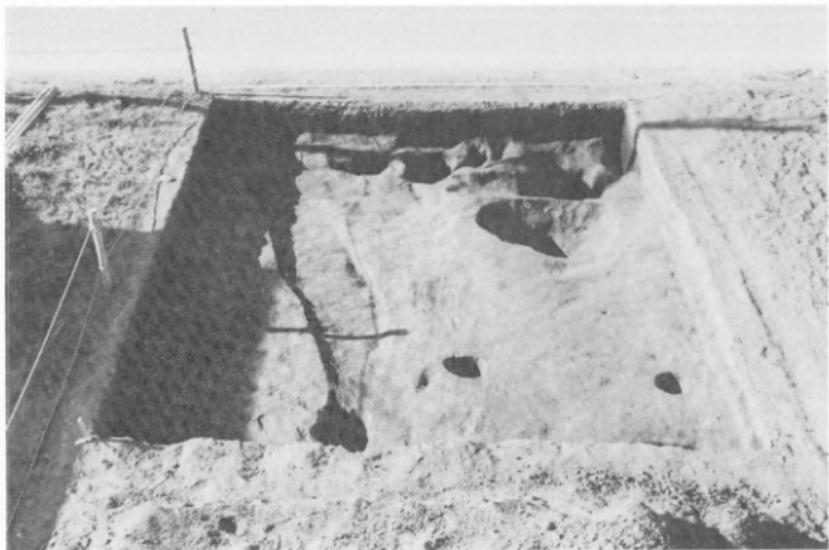
第53-7次（6 ADD-U）調査（西から）



第53-8次（6AGE-O）調査（西から）



第53-9次（6ACS-O）調査（西から）



第53-10次（6ACA-R）調査（東から）



第53-11次（6ADR-W）調査（西から）



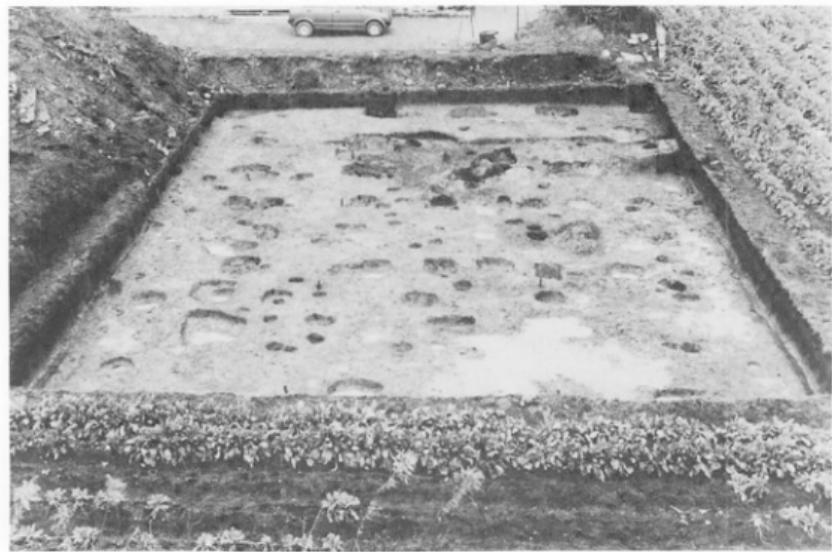
第53-12次（6ABL-K）調査（北から）



第53-13次（6ADQ-L）調査（北から）



第53-14次（6 ACM-O）調査（東から）



第53-15次（6 AFK-C-D）調査（南から）

---

---

三重県斎宮跡調査事務所年報1984

## 史 跡 斎 宮 跡

—発掘調査概報—

昭和 60 年 3 月 30 日

編集発行 三重県斎宮跡調査事務所

印 刷 光 出 版 印 刷 倉

---

